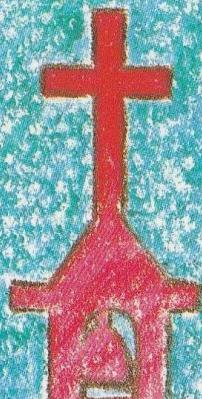


わかりやすい!

日曜学校教授法



マイヤー・パールマン



わかりやすい!

日曜学校教授法

マイヤー・パールマン

福音出版社



福音出版社

わかりやすい!

日曜学校 教授法

マイヤー・パールマン

SUCCESSFUL SUNDAY SCHOOL TEACHING

by My.er Pearlman

はじめに

本書 *Successful Sunday School Teaching* の著者マイヤー・パールマン氏は、ユダヤ教信奉のユダヤ人であったが、後にキリスト教を信ずるようになり、救われてから後は、すぐれたクリスチヤン教育家、また、執筆家として、きわ立った活躍をした。

本書において、著者は、極力専門語を避け、だれにでも平易に読みこなせるように配慮している。それゆえ、特に日曜学校教師養成のための教育を受けたことのない人たちにとっては、この上ない道案内となるものである。著者は日曜学校教育という狭い視野のうちにとどまらず、常に一般教育の観点から書こうと努力しているので、本書はまた、小学校、中学校、さらに高等学校教師諸君の参考にもなろうかと思う。心ある教育者の一読をわざらわし得るなら、幸いである。

本書は、多くの日曜学校教師養成機関、聖書学校等の教科書として使用されてきている。本書の日本語訳を試みるに当たっては、できるだけ条件を日本的に直し、また、原文のままでは日本語として意味の徹底しにくいような部分は、これを徹底するようにしたつもりである。このために、著

者の意図するところと日本文の意味するところとの間に、なんらかのずれを生じてているようなどころがあるとすれば、著者に対しても、読者に対しても、謹んでおわび申しあげる。

各章のはじめには教育に関する教科書のうちの教科書、何ものにもまさる神のみ言葉、それによつて読者が導かれるように、参照聖句の章節をかかけた。各章を読むに先立ち、まず、聖書を開いて、その聖句を見ていただきたい。

本書は、日本における日曜学校教育に絶大な関心をもち、その分野の発展の思わしくない現状に責任を感じ、その観点から翻訳紹介することにしたのである。わが国日曜学校伝道にたずさわる教師諸君にとって、本書がその靈的一助となることを信じて疑わないものである。

日曜学校教授法 目次

はじめに	5
ことばの手引き	9
第一章 教師の任務	11
第二章 授業とは何か	17
第三章 授業の方法	33
第四章 学課に精通しなければならない	45
第五章 授業の目標の設定	59
第六章 授業に対する立案	69
第七章 クラスの緊張の持続	95
第八章 教師の緊張の持続	113
第九章 意味をはつきりと	125

第十章	視覚を用いる……………
第十一章	話をして聞かせる……………
第十二章	印象と発表……………
第十三章	質問による授業……………

175 171 153 141

ことばの手引き

アサインメント
宿題を与える

(Assignment)

ただ単に結果だけを求めるやり方ではない。書けとあれば書き、読めとあれば読まなければならない。そのほか、何でも指定通りにやらせる。そうして、後に教室で討論などをする時の準備一切をさせるのである。

レシテーション
教室課業
(Recitation)

生徒は下調べをしておかなければならない。そして、教師の質問に応じて即座に答えていく。一語一語本の通りに答える必要はない。

レッスン 学課、授業、授業の内容、けいじ、課業、教えること、習うこと、
(Lesson) 第一課の課など。

マスター 精通すること、何から何までわかること、自分のものにすること。
(Master)

テキスト ある題目の出でいろ、よりでいろ、原文、本文など。
(Text)

第一 章 教師の任務

参照聖句 使徒行伝五章四二節、同一九章九、一〇節

聖經の助けなしに、神のみ言葉を教えることはできない

日曜学校の教師として召された者は、実に、すばらしい仕事に携るために、特に選ばれた者である。それは神に協力して、生徒たちの内面生活を指導し、それをクリスチヤンとしての性格にまで築きあげ、かつ、彼らに靈的な知識を与えるという特権を有すると同時に、またその責任をもつものだからである。この意味において、日曜学校の教師は主の御用に召されている。この召命の重大性と尊さとを知るとき、その召命にあづかった者は、だれしも、これを神から授けられた天職と心得て、最大限にその任務を達成しようとするには、どうしても神のみ力にすがるよりほかないということをさとるであろう。

そうして、まず最初に、教師は單なる勉学、研究などからはとうてい得ることのできないもの、すなわち、靈の賜物、特に教師にふさわしいものが必要であるということに気がつき、ひたすらにそれらを求める（コリント1一二・七一〇、二八、ロマ一二・七、ゼカリヤ四・六、エペソ四・一一五）。それから、神は常に、正しいことを理解しようとするわれわれの努力に対して、その力を貸し与えて下さるということを思い起こし、次の諸問題を神に尋ねながら、自分の心構えをつくり始めるこことと思う。

なぜ、自分は教えるのだろうか。その目的、その動機はいかなるものであるか。

日曜学校の教師たる者は、その教えることについての、かんじんな目標というものを、はつきりと認識しなければならない。その教えようとすることに対し、自分は何を「意図しているか」ということを知らなければならない。もしその認識を欠いて、教えようとすることに対する目標がぼんやりとしたものであるならば、その教えようとすることの結果もまた、当然、ぼんやりとしたものになってしまう。このことを考えるならば、ほんとうに靈的な教師はこういう結論に到達するにちがいない。それは、その仕事の主要部分、そのあらゆる努力の目的というものは、実に、生徒たちがキリストを体験的に知る者とするために聖書の真理を用いていくことであつて、生徒たちのクリスチヤンとしての人格の育成とその教化とに当たり、課業の一つ一つはその目的達成のために常に手際よく使われる道具であり、方便であるということである。換言すれば、教師が主として目的とするところは、靈的成果とも言われるべきものなのである。

だれに、自分は教えるのであろうか。自分の授業の対象は、いかなる人々だろうか。

教師の天分と資格が、その人がいかなる生徒を担任するのに一番適当であるかということを明らかにしてくれる。それぞれその人によって、たとえば、成人科、青年科、高校・中学生科、小学上級科、小学下級科、幼稚科などというふうに、その向き不向きがあるのである。

いかなることを、自分は教えるのだろうか。その教えようとすることに対し、自分はどんな知識をもつているだろうか。

教えることの中心は、言うまでもなく、聖書である。したがつて、教師は全力を傾けて聖書を学び、その歴史、教理、地理、風俗習慣について精通しようと心がけなければならない。

「なぜ、人を教えて自分を教えないのか」（ロマ一・一一）。

教師というものは、知らないことは教えることのできないものである。わからぬことは説明のできないものである。取りあげようとする事がさらに精通していなければ、とても、権威をもつてそれを語ることができないものである。教えるということを一つの「仕事」としてそれに従つていこ

うとする者は、常に「休みなく」勉強していかなければならぬ。そして聖書的知識をあらゆる面から余すところなく吸收しようとする勤勉な読書家になることが必要である。そうして、多少なりとも、み言葉を系統立てて研究しなければならない。こう言うやり方は言われるまでもなく、確かに一種つらい困難なやり方である。しかし、人は何の努力もなしに、自然にすらすらと能率的な、効果のあがる教授技能というものを身につけることはできないのである。自他共に教師として許される者は、まさにそのひたいに汗して、みのり多き教導奉仕のパンを手に入れる者でなければならない。それには並々ならぬ努力がいる。しかし、すべて苦しい努力は、それが苦しければ苦しいほど、報いられるところも大きいのである。

どんな方法で、自分は教えたらよいのだろうか。

これはなかなか重大な問題である。というのは、たといどんなに博学であっても、その知識を生徒の心に伝える方法を知らないならば、その教師は失敗するよりほかに道がないからである。

この問題は、どんな方法で教えたらよいか、**日曜学校教授法の技術**とは何か、という本書の主題を引き出す問題なのである。「本当に、ものの考え方というものは習って身につけることができるものなのだろうか。ものを教えるということは、生まれつきその人に与えられた才能かと思つていた」とある人は言ふかも知れない。

確かににある人々はものを教えるということにかけてはすぐれた天賦の力をもつてゐる。しかし、ものを教えるという技術を、習つて身につけることができるということも、また、本當である。ある人々はまことにその方面的「天才」のように見えるだろうが、多くの場合、その天才といわれる人たちの資質もある大天才トーマス・エジソンがかつて言つたように、インスピレーション（靈感）二パーセント、パースピレーション（発汗すなわち努力）九八パーセントの結果なのである。

教えるということは、じゅうぶん、後天的に習得のできる技術である。それは一定の法則によつて拘束されていて、そこから逸脱することのできないものであるから、これらの諸法則を研究し、これらの諸法則を手に入れてしまつた上は、飽きずに根気よく、すべてのことに当てはめていきさえすれば、やがて、「みごとにその授業をやつてのけている」自分に気がつくにちがいない。事の成否は、実に、この「方法を知る」という一事にかかっているのである。

自習案内

- 一、初代教会の指導者たちは旧約聖書を教えるということに重きをおいていたという。使徒行伝を調べ、これを証明すること。
- 二、教会において神がその仕事に従わせたもう教師は、いかなる聖靈の賜物を必要とするか。
- 教えるということについて、教師はこれらの必要な靈的資質を、いかにして手に入れるこ

とができるか。

三、日曜学校教師の中心目標となすべきところはいかなるものか。

四、日曜学校教師はいかにして権威をもつて教えることができるか。

五、日曜学校の教師たる者は、いつ、神のみ言葉を学び、また、いくたびそれを繰り返して学ぶべきか。

六、この本で取り扱おうとする主題は何か。

七、考え方というものは、習つて身につけることのできるものだろうか。

八、じょうずな考え方の根本的要素は何か。

第二章 授業とは何か

参考聖句 ガラテヤ人への手紙六章六節、テモテへの第二の手紙二章六節

教師と生徒とが一致するなら聖靈によつて教師も生徒も教え導かれる

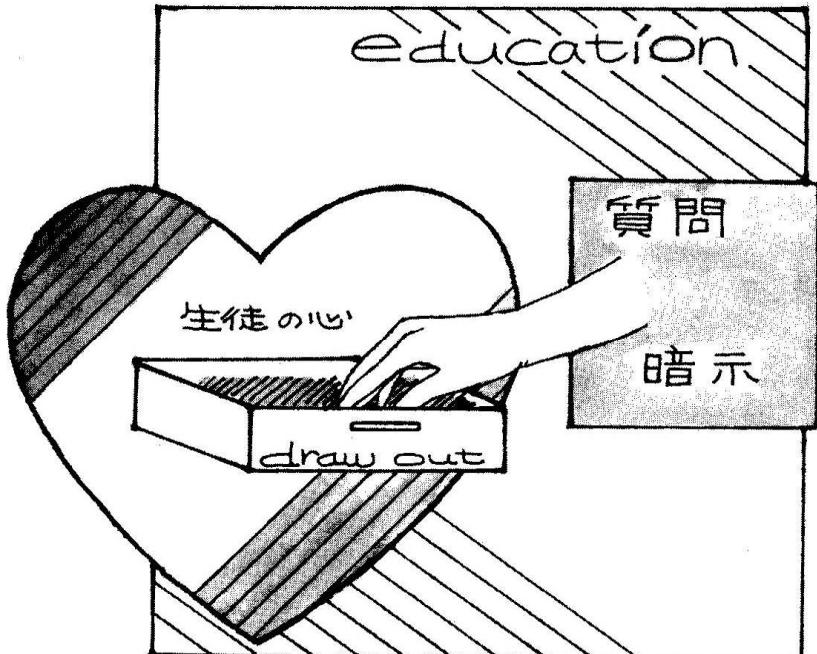
教えるということ、つまり、授業とはどんなことであろうか。それはただ単に事実をありのままに話して聞かせるということではない。そういうやり方では、生徒を理解に導きそこなう危険性が多い。生徒の注意は散漫に流れてしまう。授業はレシテーション、すなわち、教えたことを単純に記憶して、オウムのように暗唱するために、話して聞かせるということでもない。授業とは生徒の心を刺激して、教師の教えようとする真理をつかみ、自分のものにしたいという気持ちを起こさせることであると定義できる。こういう気持ちを起こさせるということは、ただ単に真理を分け与えるということ以上のことである。それは聞く人自身がその人自身の力で自分の聞いたことを、徹底

的に考えてみたいという気にさせることである。

この定義に示された目的を達成するためには四つの原則に従う必要がある。それらは実に授業といいうものの基盤をなすものであり、授業に関するあらゆる法則を集約するものであり、簡単明瞭、極めて卒直に、授業に対する目的とそれに対する基礎的な諸方法とを説明しているものである。換言すれば正しい、効果的な授業を行なおうとする人があるならば、次の四つのことを行なわなければならないということである。

第一に、教師は生徒が、自分で考え、自分の考えを駆使し、自分で自分の結論を引き出し、大体において自分自身の力で真理を探求し、発見するということに習熟させなければならない。

「教育する」(educate)という言葉の意味するところは何であろうか。それは文字通り、「引き出す」(draw out)ことである。「教育する」とは引き出すことである。質問や暗示などによつて、その生徒の心のうちにあるものや、その生徒にできるはずの活動を引き出すことである。つまり、教育とはエンジンを作ることではなく、エンジンを動かすことなのである。有能な教師というものは生徒の注意を促し、生徒の心をゆり起こし、知識欲をそそり、知識を求めるおもしろさを教えてあげ、更に、生徒の前に、生徒自身が自分で結論をつくりあげるために素材を提示してあげる人である。授業ということは、炉に石炭をくべるようく、いろいろの事がらをむやみに生徒の頭の上に積



「教育する」とは引き出すことである

みかさねることではない。授業は質問だとか暗示だとか、必要な事実というような原料を供給し、頭の機械を活動させて、考え尽くされた考え方による仕上げ品を作り出すことである。

経験に富んだある教師の著書にこう書いてある。

「学び、覚えるということは自分で自分を教えることである。これは人間本来の素質である。教師たる者は、その生徒たちに対して、人間本来のこの素質を自由自在に發揮することを許さなければならぬ。何か宣伝広告でもする時のように、真理、真理と、押しつけがましく真理を突きつけてはいけない。むしろ、真理はほんのりと包み、目に見える所にまで近づければ良い。すると、生徒たちは、その真理を包むヴェールを自分たちの手であけてみると喜びを味わうことができるのである。それを見つける方法は各自にまかせる。教師などは無視して、自分がやっているのだとうふうに考えさせるのである。これは教師の感情を傷つけるものであるはずはない。なぜなら教師の任務は、生徒たちに教師がどんなにすばらしいかということを考えさせることでなく、真理がいかにすばらしいかということを考えさせることだからである。教師にとつて何よりの喜びの瞬間は、生徒の一人がやつて来て、その生徒自身の手でやり遂げた大発見の報告を受ける時であり、しかも、その報告が、まさに、教えようとしていたことであつたということを知る、その時である。

……教えるということのこの上ない誇りは、教師が生徒を教えているということよりも、むしろ、生徒が教師を教えることができるということを、生徒に感じさせる能力の上に立つてゐる。

……若い日をかえりみて、自分の先生のことを思い起こしてみるがよい。真理という新しい未知のとびらを黙つてそつとあけてくれた先生が、わき目もふらずにまっしぐらにその中へ飛び込んで行く自分のそばに、つつましく立っていた姿がありありと念頭に浮かんでくるにちがいない。」

第二に、教師は、新しい真理を、生徒のすでに理解している諸真理によつて説明しなければならない。

教えるということは、古いことで新しいことを、知つてることで知らないことを、簡単なことで複雑なことを、はつきりとしたことでぼんやりとしたことを、説明することである。一般的に、言おうとすることを人に納得させるには、これがただ一つの方法なのである。新しい真理は頭の中にすでにあるものをもつて解釈されるからである。いま仮に、突然、教室で、

「チエシデイムについて話を聞いたことのある人は何人ぐらいありますか。」

と、言つたとしてみよう。

生徒たちはぽかんとしてしまうだけである。政党の名であるか、病気の名であるか、それとも、今度新しくできた朝の食卓をにぎわす食べものの名であるか、「チエシデイム」という言葉について何も知らないからである。この思想は全く新しいものなのでそれを聞く人の心に何の映像も示さない。しかし、「チエシデイム」とは中央ヨーロッパにおけるユダヤ人の一教派の名であつて、そ

の教派では、聖靈の外面的な働きを信じ、ほかのユダヤ人よりもはるかに宗教というものに対して、感情的に純粹に、重大なもの、という考え方をもつてゐる。こうしてほかのユダヤ人たちにくらべて標準の高い信仰態度をもつてゐるので、ユダヤ教会における「ホーリネス運動」とも言るべきものである、と、いうふうに説明したとしたらどうであろう。今度は「チエシデイム」ということがわかつたにちがいない。なぜならば、生徒たちのよく知つてゐる考え方や言い方を使つたので、生徒たちは各自その言葉を自分の頭で解説したのである。何か外国風のこの言葉も、こうなるともう、見知らぬ相手ではない。それは教師によつて、生徒の頭のうちの先住者、親しいものを通して紹介され、導入されたのである。

また、五つぐらいの子供に、この地球の形を教えたいという場合のことを考えてみよう。

「地球は球形である」

などと言つてみたところで、どうにも仕方がない。相手はちつともわからぬにちがいない。こういう説明は、説明に説明を要する説明である。

ところが、我々の住んでいる地球というものは大きな丸いオレンジのようなものだと、言うならば、それを聞いた子供は、だいたい地球の観念をつかむであろう。相手の知らないことを説明するに当たり、すでに相手の知つてゐる真理を使うからである。要するに、能率よく授業を運ぶ教師といふものは、生徒たちのよく知つてゐる考え方を察知して、それを新しい認識理解への橋わたしと

して使うことを本分とすべきものである。

第三に、教師はその教材を、生徒の年令、理解力、生活状況等に当てはめていかなければならぬ。

たとえば、幼稚科を教える時に、教師は「新生」とか「聖別」とか「予定説」とか「艱難時代以前の空中再臨」とかいうことばを使うであろうか。これはだれにもすぐわかることがある。教師はこういうむずかしい神学的な言葉のもつ意味を、子供たちの頭で消化することのできる、やさしい形におおして教えるのである。使徒パウロは、この原則をどういうふうに使つたかということを考えてみよう。パウロはユダヤ人に對しても異邦人に對しても同じ一つの福音を宣べ伝えたのであるが、しかし、使徒行伝の中の彼の説教をしらべてみるとならば同じ神の糧^{パン}を与えるにしても、ユダヤ人に対する場合と異邦人に對する場合とでは、そのやり方が違つてゐることがわかるのである。

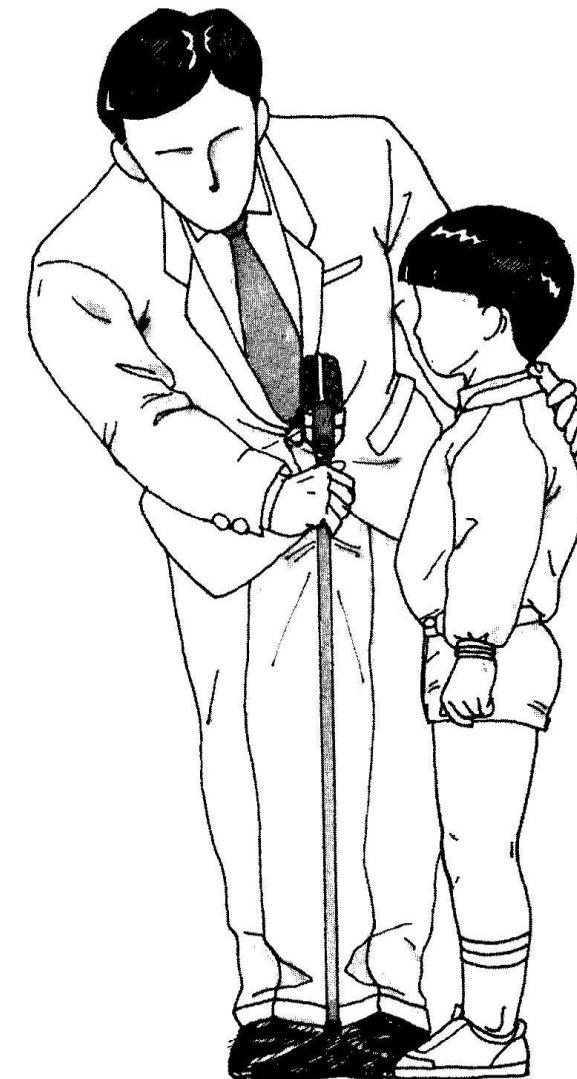
一例を挙げてみれば、ユダヤ人にはユダヤ人にわかるように旧約の教義に結びつけて話し、異邦人に対しては、異邦人の頭のなかにある「自然の書」に結びつけて話している。教師の任務を自覚した教師は、生徒たちの成長的段階にしたがつて、彼らの特長、興味、考え方などというものを探して、自分の授業をそれに当てはめていくにちがいない。アナウンサーは、マイクロフォンの前に立つ人の背の高さによつて、マイクロフォンをそれだけ上げ下げしなければならない。教師の教

師たる技能の大部分は、靈的な教えというマイクロフォンを、聞く人たちの靈的身長に合うように調節する方法を知っているかどうかということにかかっているのである。

第四に、教師はその授業に当たり、常にこの前のレッスンと今度のレッスン、真理と真理、教理と教理、出来事と出来事など、前後の結びつきに心を碎かなければならない。その一つ一つの結びつきが、生徒の頭の中で聖書の歴史や教理の統一に役立ち、知識を系統化するのである。

教師の任務は、生徒の頭のなかに知識の倉庫をつくるために、なんでもかんでもたたき込むということではない。日曜日毎の教師の仕事は、クリスチヤンとしての性格と知識とのつり合いのそれた建物を思慮深く、築いていくことである。

こういう仕事をするためには、その設計に対する「青写真」が必要となる。この青写真がなければ、その目的に向かって、思慮深く働くことができなければ、つり合いのとれた建物を築きあげることもできない。たとえば、教師は、まずモーセのように、祈りと研究との山に登って、生徒たちに与えようとする性格や知識の幕屋のひな型を手に入れなければならないのである。



聞く人たちの靈的身長に合うように調節する

「生涯」という一連の話であるという想定のもとに、ある日曜のレッスンについて、この原理、方法を説明してみよう。授業は始められようとしている。その日の導入に当たって、教師はこういうふうに話し始める。

「けさは山上の垂訓について勉強することになっています。そこには神のみ国のおきてが示されているのですが、さて、そこにはいる前に、今までわたしたちは、この神のみ国の王イエス・キリストについてどんなことを習ってきたか、ちょっと考えてみるとことにしてみましょう。一番はじめの時間には、この王さまが地上においでになつたことと、その神さまとしての御性質について、その後の時には、最初、この王さまはいろいろと違つた階級の人たちにどういうふうに受け入れられたかということ、その後には、この王さまの現われていらっしゃる前触れとして働いた大預言者の話、その後には、イエスさまが洗礼を受けたこと、イエスさまが誘惑に会つたことなどについてお話をしましたが、そこでは、この王さまが実際に伝道をお始めになる前に、ちゃんと一般の人々に紹介されていらっしゃること、それから、王さまはどういうふうに伝道に対する準備、心構えをしていらっしゃったかというようなことを勉強したわけですね。そうして、この前の時間には、王さまは、王さまにつき従う者、つまり、神のみ国の真理を宣べ伝える人たちを最初にお召しになるに当たつて、はじめてその権威をお使いになつたということを習つたのでしたね。

そこで、きょうは、この王さまが神のみ国のおきてを公に示したものと、つまりおきての宣言

ということについて勉強するのです。それから、来週の日曜には、神のみ国のいろいろなしるしや奇跡がこの王さまの力というものを示したことについて考えます。」

ここで注意を促したいのは、教師がどういうことをしたかということである。この教師はその日の授業である山上の垂訓というものを、聖書のなかの前後の関係もなく切り離された一部分として取り扱わずに、キリストの生涯およびその伝道という一連の事がらのうちの重大な一部分として、生徒に提示している。これは、つまり、キリストの生活の輪郭を、生徒の頭の中につくりあげる手段として、「キリストの生涯」という学期の授業を使っているのである。

もう一つ、例をあげよう。

マタイによる福音書二章を勉強しているクラスがあるとする。教師はこう言う。

「悪い王さまへロデはサタンにそそのかされて、ペツレヘムにいる子供をみんな殺してしまおうとしています。神さまの下さった王、わたしたちの贖^{あが}い主を滅ぼそうというのがヘロデの目的なのです。ですが、それはわかりましたね。ところが、神さまは、ヘロデのそのたくらみを、みごとにくつがえしたのです。ここでちょっと、旧約聖書の歴史を復習してみましよう。イスラエル人の生んだ男の子はみんな殺してしまえという命令を出した王さまがありましたね。その厳重な命令をうまくのがれたイスラエルの赤ん坊が一人いました。その人が将来イスラエルを救う救い手となるのですが、その赤ん坊がどういうふうに殺されずにすんだかということを思い出してみましよう。」

するとクラスの大半はモーセの赤ん坊の時のことと思い起こし、旧約における神の契約のとりなし人の経験と、新約における神の契約のとりなし人の経験が似ていることに気がつくに違いない。教師はさらに続けてこう言う。

「マタイのこの章には、また、救い主が子供の頃をエジプトで過ごされたことが書いてあります。救い主はパレスチナで、神さまとその民とにお仕えになることになつてていたのですが、そこへおはいりになる前は、エジプトに送られて、そこで危険な時を守られて過ごされたのです。これについて何か、旧約聖書のことを思い出しませんか？」

すると、生徒たちは、神が初期のイスラエル民族をエジプトに送つて保護して下さり、やがて神に仕えさせるために、聖地パレスチナへお送り下さつたことを思い起すにちがいない。(出エジプト四・一二二、マタイ二・一五比較参照)

ここでも、教師のしたことに注意してみる必要がある。教師はこうして旧約聖書と新約聖書との歴史的関連を見いだし、新約聖書と旧約聖書とは実質的に関係のあること、それらはすべて神のご配慮の一部であること、旧約聖書にある多くの事件は、キリストの生涯、そのみ業、その伝道の、預言としてのひな型であるということを教えている。

この原理をさらに押し進めていつてみよう。

キリストが五千人の群衆を養つて下さつたことを、勉強するに当たつて、教師はこういうふうに

言う。

「キリストは荒野で群衆を養つて下さいました。これについて、旧約聖書にあるどんなことを思いい出すでしようか。」

生徒は、

「モーセの時代、神が荒野で、イスラエルの民をマナで養つたことを思い出します。」

と、答えるだろう。

そこで、教師は一言、言い添える。

「そうですね。そして、そのことがあってから、ユダヤ人の大部分がキリストを第二のモーセ、神のお送り下さったイスラエルの救い主として、仰ぐようになったのでしたね。」

こうして、教師は歴史的関連性を見いだしていく。教師はさらに説明を続ける。

「神はモーセを通して、荒野でイスラエルの民を超自然的な食べ物、マナで養いました。同じように、キリストも荒野で、大ぜいの飢えた人々を養つて下さつたのですね。ある意味では、わたしたちの、今ここにこうしている世界というものは、靈的生活の荒野ですから、わたしたちは今なお、天からくるパンを必要とするのですというのが本当ではないでしょうか。」

教師はここで靈的関連を示したのだが、更に、

「そこで、この世においてわたしたちが靈的な生活を続けようとするには、絶えず靈的栄養分と

いうものを取る必要がある。そうしてイエスさまだけがわたしたちを支えてくださるただ一つの命のパンです、ということをわたしたちに思い出させてくれる聖なる礼典がありますが、みなさんは、それを知っていますか。」

というふうに導いていく。

答えは自然に「聖餐式」となるにちがいない。教師はこうして教理的関連を示しているのである。

「もしわたしたちが食べる物を奪われたらおなかがすいてしまいます。いつまでもそうやって食べる物がもらえない、もうえても、ほんの少しばかりという状態が長く続いたら、どうしても栄養失調になつて病気になつてしまつよりほかありませんね。靈のこともそれと同じです。同じように、この靈的栄養というものを取ることを怠つていたら、つまり、お祈りすること、み言葉を読むことを怠つていると、どうなるかというと、靈的に飢えてきて、靈的栄養失調になり弱くなつてしまつのです。」

ここで教師は、人間個人の問題に関連をつけている。そうして、最後に言う。

「この世の中は靈的に飢えている人々で満ち満ちているのです。その人たちは、罪の重荷にあえぎ、病気に悩み、悲しみに沈んでいるのです。キリストはそういう人たちを養い、満たしたもうことがおきになるのですが、このことについては、わたしたちにその責任がまかせられているのです。キリストはその弟子たちにおつしやつたようにわたしたちにも、『あなたがたの手で食物をや

りなさい』と、おつしやつておいでになるのですから。」

こうして、教師は、その学課をクリスチヤンの伝道責任に結びつけ、実践的関連を示しているのである。

これを要約すると、教師は常に、歴史を教理に、預言をその成就に、聖書の各書巻をそれに対応する書巻に、旧約聖書を新約聖書に、ひな型をその原型にというふうに、聖書のいろいろな部分を結びつけていかなければならないのである。こうすることによつて、生徒に、聖書はただ単なるテキストや出来ごとの寄せ集めではなく、それは人体のようにその一つ一つがお互いに有機的に関係している生命ある統一体であるということを、教えることができるるのである（テモテ2三・一六、コリント1一〇・六、七、一一）。そうして、また、教師は、後述するように、生徒がその教えを頭のなかの防水区画、お倉の中にしまい込んで、その日常生活から切り離してしまわないように、絶えずその授業内容を実生活に結びつけていかなければならぬ。

自習案内

- 一、正しい、効果的な授業を行なうための基礎的要素四つをあげよ。
- 二、教育の定義を示せ。

第三章 授業の方法

参考聖句 ヨハネによる福音書第一四章二六節、テモテへの第二の手紙第二章一五節

一生懸命に勉強するならば、キリストにより必要なことを思い出すことができる

ある有名な学者が、こうすることを書いている。

「講演を頼まれたなら、その場に臨む前に、友だちにこういう手紙を書いたらよい。『自分は今度、これこれの題目で話をしなければならなくなつた。その問題点は次の通りだ』というふうにして、講演の内容の項目を、実際に話そうと思っている順序に書きならべて見る。もし、この際、何も書くことがない場合には、祖母が死にそうだから、残念ながら、今回はご依頼に応じられない、という断わりの手紙をその講演依頼者に出す方がよい。」

少々ユーモアに流れてはいるが、これは、自分に適當な準備のない時には聴衆の前に立つ資格が

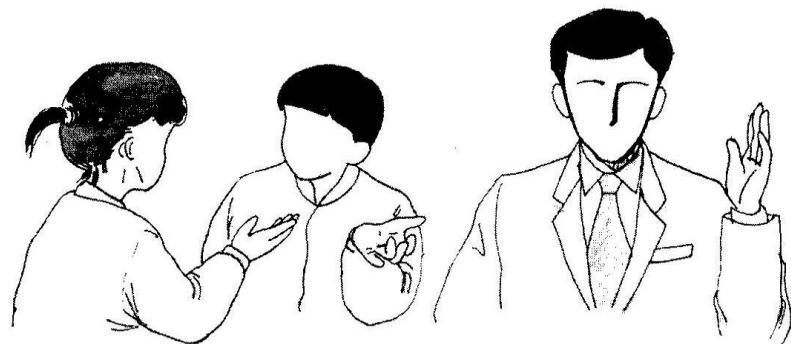
三、一学期一連の授業を想定し、各日曜日毎のレッスンにつき、その前後の関係をいかにすべきかについて研究せよ。

四、新約聖書と旧約聖書との関係を教えることの重要性につき、本書はいかなる例をあげて説明しているか。なお、本章に引照されている例を話にまとめてみること。

五、お互いに有機的に関係している、命ある真理の統一体を教えるために、教師のなすべき、「結びつけ」について、五つの型を示せ。

六、問題五において「結びつけ」たことを、生徒各自の生活に当てはめるためには、教師はいかなることをなすべきか。

教師がそのレッスンを生徒の生活に当てはめることを怠れば、生徒の心と日常生活にいかなる悪影響を及ぼすか。



授業の仕方にもいろいろある

ないということを言っているのである。この忠告は、日曜学校の授業にも当てはめることができる。充分に準備の整った授業は、すでに九〇パーセント、その意が生徒に伝えられているのと同じである。充分に準備の整った授業とは、何を教えるかということを知るだけでなく、いかに教えるかといふことを知ることをも含んで、それに立脚して準備された授業である。材料が充分に整つたら、教師は当然、次のことを考えなければならない。

「どうやって、これらの真理を教えていこうか。お話にして、全部自分でしゃべろうか。質問をして答えさせようか。」

これ言い換えれば、「どんな方法を使おうか」ということである。

得意先に品物を送り届けるのにいろいろな方法があるように、授業の方法にもいろいろある。たとえば、ある商人は自分でその品物を届けに行くだろうし、また、ある商人はお客様を持って行つてくれるよう頼むこともある。それは時と場合で違うのであるが、授業においても、クラスの性格、教師の力、そのほかいろいろの事情によって、方法が決められるのである。そこで、今、便宜上、これを次のように分類してみよう。

- 一、教師が活躍する方法
- 二、大部分をクラスの活動に任せせる方法
- 三、教師とクラスとが協力していく方法

一、教師が活躍する

次の二つの方法では教師に負担がかかってくる。

講義法 この方法では、教師は説教者が説教するのと同じやり方で、教えるべきことを生徒に提示していく。教師はしやべり、生徒は聞くのである。これには、教師はその授業時間をことごとく使って、忙しくて予習のできない人たち、予習をしようとしたい人たちに対し、その授業の内容を、徹底的に、明確に、秩序立てて提示していくという利点がある。クラスの編成が大きすぎて、充分なレシテーションにも向かず、意図するほどのディスカッションもできにくいというような場合にはこの方法が必要になってくる。ここで注意しなければならないことは、この講義法の駆使に当たっては、教師の技能、力というものに相当持つべきところが多いということである。それはじょうずに、力強く講義出来る人、つまり、クラスの注意を持続し、その興味をつなぎとめていくことができる力に満ちた語り手でなければならない。それでなければ生徒のうちのある者は「とりとめもない自分の考えに、ふけり」、また、ある者は居眠りをし始めてしまうにちがいない。さらにこの方法の弱点とするところは生徒を意欲的に予習をさせる刺激に欠けていることである。

物語法 低学年クラスにおいては、授業全体を、筋のある一つのお話として聞かせていく方法が

ある。それは、こういう形式の授業が子供たちの心に靈的真理を吸收させるのに一番すぐれた方法だからである。授業の内容が聖書の事がらを中心としている場合には、高学年クラスにも、この方法を用いることができるし、また、用いるべきである。お話をじょうずにしていくということは、聞く人の注意をひきつける確実な方法だからである。ここにおいて、教師たる者は、お話をして聞かせる技術を身につけなければならなくなつてくる。教師は、そのお話をするところにしたがって、聖書の各時代の中にその身を置き、そのありさまを見、その時代の人たちと共に歩き、そのお話のなかの人物の話すことを聞き、それらの人物の習慣を理解し、そうして、その見るところを、そのままに生き生きと写し出してみせることができるようでなければならぬ。こうすることによつて、聖書の歴史というものは、聞く人に「実感」となつてくるのである。

教理を教える授業、つまり、それを物語の形でもつていくことのできないような場合にも、中心をつかまえた例話やじょうずにまとめたお話をまとると、その授業に精彩を加えることができる。面白くもない説明や解説ばかりでクラスが無味乾燥な砂漠をさまよい始めていることに気が付いたら、教師はすぐにそのレッスンに関連のある面白いいたとえ話のオアシスを見つけることにより、生徒の興味を引き戻し、目的を達することが出来る。

二、生徒が活動する

教師の教師たる任務の一つは生徒に考えを各自の頭でまとめあげていくようにさせていくということである。この理に立てば、教師は、生徒が自分で探し出せるることは言わない方がよいということになる。生徒が、自分で自分が活動していくという原則を知っていく一番良いやり方は教室課業である。授業時間の終わりに当たり、教師は時間をさいて、次のレッスンに対する宿題を与える。一人には質問を与えてその答えを考えさせ、一人には与えられた問題を発展、展開させてさらに新しい問題への糸口を見つけ出させ、また、ある者には地図を書かせるなど、各生徒に何かの宿題を与えるのである。このやり方のもつ、生徒に対する心理的効果は大きい。それは生徒に、教師がそのしようとすることの目的をつかんでいるという安心感、それからまた、生徒のすることを知っているという信頼感をいだかせる。さらにそれは、一つの仕事をやり遂げるという喜びをも与える。

「しかし、それでは、どうやって生徒に勉強させたらよいのだろう。」

この方法を考えるとき、この疑問は必然的に起こってくるはずのものである。それについて考えていくことにしよう。

「**学習の仕方を教えること** せつかく宿題を与えても、生徒はそれをどう扱つてよいのか知らないのが普通である。しかし、学校において学べる最も有益な学課は何といつても自分で学ぶ方法を学ぶことである。

「創造する教え方」の著者、スター氏は同書の中でこう言っている。

「学習の仕方を口で言うだけではだめである。それを示してあげることがかんじんである。学年はじめの授業時間の全部までとは言わないが、少なくとも半分くらいは、この目的のために練習に使われてもよいはずである。教師はまず、生徒たちを自分のまわりに集めて、こういうふうに話しかける。

『さあ、わたしは、みなさんと同じ生徒だとします。これから授業の勉強をしたり、いろいろと下調べをしたりして見せますよ。』

そうして、教師は、実際の過程に応じて、見落としのないように、一つ一つをやつて見せるのである。生徒が実際に行なうように使うべき本は使い、使うべきプリントは使い、使うべき紙は使い、また、使うべきノートは使わなければならない。たとえば、宿題の部分を読むというところへきたら、教師は本を取りあげて、そのところを、声をあげて読むのである。（この点は、あるいは、生徒がその自宅で宿題をやるときは違うかもしれない。実際に自宅で宿題をするときには、生徒は声を出して本を読まなくともすむ。違う点があるとすれば、ただこの一点だけである。）書くという

ところへきたなら、実際に書くのである。換言すればありとあらゆることをことごとくやつてみせて、どうしてこういうふうにいろいろと違つたことをするのかという理由と、それら一つ一つを行なう一番良い方法を説明しなければならない。」

エイモス・R・ウエルズ氏は著者としても教師としても経験豊かな有名な人であるが、氏は、もしも、自分の働きをやり直すことが出来るなら、是非ともやつてみたいと思っていることの一つとして、こう言つている。

「もしも、わたしがもう一度繰り返せるなら、わたしは、わたしが生徒に何を与えたつあるであろうかということは考えずに、いつたい生徒が何を得つたあるであろうかということを考えたいと思う。かつてわたしがこの仕事にはいつたばかりのころは、生徒がめいめい自宅で勉強するための考慮というものをあまり払わなかつた。宿題を与えなかつたのである。わたしの授業は、質疑応答という、薄っぺらな隠れみのに装われてはいたが、もっぱら講義であつた。こうして、わたしはじゅう六だらけのバケツに水を注ぎ込んでいたのである。宿題、それは所期の目的を達するために決して充分なものではなかつたかも知れないが、しかし、それでも、なお、興味をもつて聞くという、しつかりした杯を与えることができたことと思う。そして、その杯のなかに、わたしは、何かしら生徒たちの記憶に残るようなものを注ぐことができたにちがいないのである。」

興味を刺激し、学習に対する意欲を起させること もし人に勧めてその仕事をやり遂げさせようとするならば、その人にそれはやりがいのある仕事である、ということを感じ取らせなければならぬ。また、授業をマスターすることには、何か実際上のプラスがあるということをわからせなければならない。ある意味で、教師はセールスマンのようなものである。相手に、その製品を買いたいという意欲を起させなければならないのである。

宿題を与えるに当たつては、漫然とクラス全体に同一課題を与えるべきではない。一人一人に特定の仕事を割り当てるようにして、各自にその責任をもたせるのである。

教師は生徒各自に与えた宿題をどれ一つもおろそかにしないで報告させること この点に心を配らないと、生徒たちは宿題というものに対してもうやりな態度をとり、「やつて来たつてしまふがなない。どつちみち、指名してくれないんだから」などと言うようになる。

すると、ここにまた、

「次から次へと生徒たちのレシテーションばかりで終始したら、授業は単調になりはしないだろうか」という問題が起つてくる。

まさにその通りである。授業を生徒たちのレシテーションだけに限つてしまふなら、それは無味單調に陥るよりほかにない。そこで、生徒のやつて来た宿題の研究発表の足りないところを補つた

り、面白い方法で更に展開させていくのが教師の働きになるのである。わかりやすいたとえをもつてすれば、宿題というものは建築と同じようなものであって、生徒たちはその構造にしたがつて各自いろいろの部分をある程度までまとめて持つて来る。教師の仕事はそれらを集めて組み合わせ、それを出来あがつた一軒の家として見せることである。生徒たちのすることが全部終わり、レシテーションが一巡したならば、教師はそれをまとめあげ、批評をし、必要ならば直してやる。そして、それを織り込んで、展開した授業をするのである。

三、教師と生徒が協力する

質問法 この方法においては、教師はその練達した技術をもつて質問をしていくことによって、クラス全体の思考力を刺激し、生徒たちを各自の頭で考えるようさせる。この場合、教師は、「教育する」(educate) という言葉の本来の意味の上に立つて、その授業の中心課題を生徒自身の頭の中から引き出すのである。これは最も興味のある一つの方法である。というのは、聞く人たちを注意深くさせ活発にさせることができるからである。またこの方法は、教師を、講義するという重圧感から解放する一助ともなる。こうして教師の立場は、ビルディングを構築するとき指図をする監督のようなものになるのである。

しかしこの方法には、幾つかの危険性が伴う。生徒は学習をおろそかにするようになり、予習をして来ない場合には、その答えも、その場でいい加減につじつまを合わせるという程度のものとなり、あて推量でやっていくようになつてしまふ。それからまた、あまり大切でない問題、直接授業と関連のない事がらについてのやりとりに時間をかけすぎて、本題からそれてしまふという危険性もある。この意味において、ディスカッションの中心点をはずれないようにすること、つまり、横道にそれたり、見当違いのところをうろつき回らないようにじょうずに指導するのが教師の任務となる。

質問・レシテーション法

この方法においては、教師は特定の宿題を与え、各生徒に学習結果の発表をさせ、ディスカッションを行ない、それによつて授業を展開させていくのである。クラスの編成が適当な大きさであり、生徒たちの学習意欲をそそつていけるならば、この方法は、最も効果的な方法である。成人科に対しても、この方法によるのがよく、そうでなければ、質問法が最も興味深いものである。

自習案内

一、本章を通読して、教師が働きかけないで授業のスムーズに運ばれるやり方があるかどうかを調べよ。

第四章 学課に精通しなければならない

参照聖句 ヨハネによる福音書第一六章一三節、詩篇第一篇二節

絶えずみ言葉を考えている人は、常にみ靈に教えられて、み靈に導かれている

さて、授業に使おうとするテキストと教案とは、ここに用意ができたとする。この材料を教師はどういうふうに消化し、マスターしなければならないのだろうか。これから、この問題について考えていくことにしよう。

できるだけ早く着手し、毎日研究すること　たとえば毎日わずか三十分ずつだけでもよい、次の日曜日の授業の下調べのために、ある程度の時間をさくというやり方はすぐれた方法である。また毎日同じ時間に出来るなら、毎日規則正しい習慣を身につけることができるるので、それにこしたこ

二、便宜上、教授法を三分類する。これをどういうふうに説明できるか。また、各分類の下に

おののおの二法がある。この六法をあげよ。

三、講義法はいかなる年齢の生徒に適するか？　また、物語法は。

四、生徒を自発的勉強に導き入れる二方法は何か。

五、宿題を与えるに当たり注意すべきことは何か。

六、生徒のやつて来た宿題を一つ一つ調べなければならない理由をあげよ。

七、質問法の利害を示せ。

八、質問とレシテーションとの併用法はいかなる条件の下において効果があるか？

とはない。ところで、できるだけ早く着手するという理由はどこにあるのだろうか。それは、早く始めれば徹底的に調べ、深く考察するだけの余裕をもつことができる。そして、授業の内容は頭にも心にもしみ通り、あたかも自分自身の一部分のようになつてくるからである。これは雪だるまを作るのと同じである。雪の玉を雪のつもつた地面の上をころころところがしていくうちに、その雪の玉は大きくなる。それと同じように一真理もまた、研究と黙想という過程の中を繰り返しころがしていくうちに、いつか、頭のなかで大きな発展を遂げていく。この過程を踏むためには、その授業の下調べに週の始めのうちに手をつけなければならぬ。

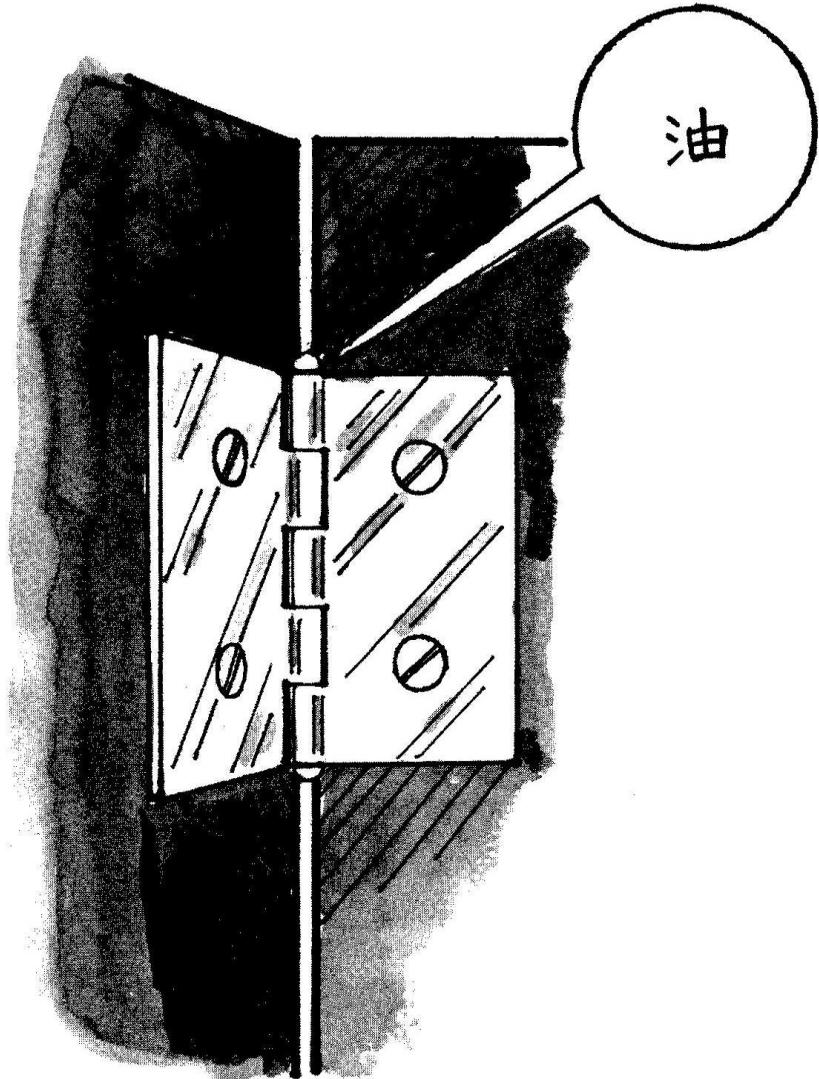
たとえば、月曜日に三十分学課の概論の下調べをする。すると、次の日には自分では意識していないけれども、頭がその材料について働き続けてきているので、より明確になり、より良く配列されていることに気づくにちがいない。その上、そういう下地があれば、昼間自分の仕事をしている間にも、たとえ話だとか、参考になることだとか、本で調べなければならないことだとか、啓發的な考え方だとか、そういういろいろなことが頭にひらめいてくる。こうなつてくると、その授業内容はすでに親しみ深いものとなつてきているので、火曜日の夜、机に向かうときには、それはもう気むずかしい取りつきにくいものではなくなつていて。そこで、勉強に当たつて、こみ入った問題にぶつかつて、いくらもがいてみてもその疑問を解くことができず、がっかりしているということにしてみよう。しかし、こんなとき、失望することはちつともない。それは、次の日、黙想のうち

からぽつかりと解決の糸口を与えられ、新しい光の中にそれらの真理を見直すことができるからである。こういうふうにしていけば、毎日の研究の成果の上に、さらにもう一つの成果を期待することができます。それは、意欲的、積極的に勉強にうち込んだあとには、いわゆる「脳の無意識作用の法則」というものが働いて、ほかのことを考えている間にも、頭はそのことを離れずに、自然にそのことについて作用し続けていくからである。ものごとの取捨選択などに当たつて、俗によく言う、「一晩寝てよく考える」ということは、実に、このことなのである。しかし、何よりもまさつて祈りを通してこそ、教師の頭脳の働きは超自然的に活発にされるのだということを忘れてはならない。

「真理のみ靈が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう」と、キリストは約束された。しかし、ここにある「導く」というみ言葉は、ただ漫然と何もしないでいても、神が導きたもうという意味ではない。それは、真理を探求すること、つまり、勉強し、研究し、常に努めていくということをも含んでいることに注意を払う必要がある。

ある有能な教師が演説の準備について、こういうことを言つているが、それはすっかりそのまま、授業の準備にも当てはめることができる。

「演題は一週間前に決めるべきである。そうすると、結局それについて七晩考へる時間をもつといふことになる。そうして、翌日は朝、目をさましたとたんから、ひげをそる間も、風呂につかっている間も、勤めに出かける乗り物の中でも、エレベーターを待つてゐる間、ごはんを待つてゐる



教師は蝶番である

間、人を待っている間、そういう時間をして、この演題を考えることに費やすのである。それから機会ある毎に、友だちをつかまえて、それについて議論する。言わば、それを今日の話題としてもって歩くようにするのである。そればかりでは、まだ足りない。あらゆる角度から検討を加え、自問自答して、納得のいくまで練りかからなればならないということを言っているのである。

これは要するに、前述したように「雪だるま」の過程を通れと言っているのであり、その「玉ころがし」には週の最初から取りかからなければならぬということを言っているのである。

徹底的に研究すること 「研磨機で働く教師」とは、マリオン・ローレンス氏著「日曜学校の働き人へのわがメッセージ」という有益な本にある、ある章の題名である。この本は日曜学校教師に必要な態度について詳しく記しているが、著者は次のような事を言っている。

「八ポンドの鋼鉄はまさか一丁を製作するが、八ポンドの鋼鉄はまさか一丁ではない。それには三つの条件が加味されなければならない。その一つは形、その二は刃、その三は仕上げである。日曜学校教師のなすべき準備とは、このことをさすのである。研磨機の前に立つて働く時間が長ければ長いほど、仕事そのものはやさしくなる。ドアにたとえれば、教師は日曜学校を回転させるための蝶番である。教師が鍛錬されており、蝶番に油がさされているならば、すべてなめらかに回転していく。」

ここで、さらに教師の勉強に必要な一、二のことに触れてみることにしよう。

A、教案を手に取る前に、まず授業すべきテキストを自分でしらべること それをしらべるに当たつては参考にするための教案などはないものとしてやつていくのである。あの有名な動物学者アガシーやところへ、その名声を慕つて一群の学生がやつて来たとき、アガシーは一人一人に自然科学の本をテキストとして与えたかというと、アガシーはそんなことはしなかつた。ただ一人一人に実物の魚を一匹ずつ与えて、それについて何を発見することができるかやつてみると、アガシーや学生たちは研究に取りかかつた。一日、二日たつて、それぞれの報告書が書きあげられて、いつた。しかし、アガシーは姿を現わさなかつた。学生たちは退屈して時間つぶしに研究を続けて、いつた。観察し、解剖し、推測し、二週間が過ぎた。再びアガシーがやつて来た時、学生たちは魚については全く何でも知り尽くしてしまつたと思つて、いた。しかし、アガシーは一言簡単な批評を加えて、やつと第一步を踏み出したばかりだ、と言い捨てたまま、さつさと出て行つてしまつた。こうして、学生たちは何週間も何カ月間もその研究にかじりついて、いつた結果、魚を取り扱うということは、学問としてすばらしいものである、と言うことができるようになつたのである。

ところで、日曜学校教師には、とうてい、一学課についてそれだけ打ち込んだ研究観察をする時間のないのが普通であるが、しかし、アガシーや教授の方法から次のような示唆は受けることができた、たとえ話を補足したりする役割りを果たしてくれるるのである。

B、材料は必要以上に集めること あまりよい例ではないが、戦いはただ前線の将兵によつてのみ戦われるのではない。後方勤務の人々というものをも見のがしてはならない。事実、第一線のざんごうで戦う将兵一人につき、少なくとも十人の人々——予備兵、輜重兵、軍医、工兵など——がいるのである。同様に、四十五分間の授業は、少なくとも必要と思われるものの五倍か六倍かの材料によって支えられなければならない。いわゆる「超過資本」というものが、教師の語る一語一語に力を与え、クラスに信頼の念を築いていくのである。デイール・カーネギー博士が演説の準備について書いたものがあるが、それはそのまま、また、日曜学校の授業の準備にもあてはめられる。「あらゆる場合の可能性を考え、それに対応できると思われる以上の材料を集め、知識を集めること

ががんじんである。きっと聴衆の胸に触れるという確信を更に強くもつたために、それを得なければならぬ。更に講師の頭も心も、話す態度もそれによつて良い影響を受けるためにもそれを得なければならぬ。アーサー・ダンはこう言つてゐるではないか。『わたしは數え切れないほどのセールスマン、勧誘員、宣伝係などを訓練してきた。その結果、そこにある、だれにも共通な大きな弱点を発見した。それは、自分が取り扱う製品を持つて売りに出る前に、そういう知識を得ることの大切なことを認めていないことである。』

日曜学校教師というのも、たとえて言えば、神の国の靈的製品の販路拡張に当たつてゐるセールスマンなのである。そういう見地からすれば、日曜学校教師はまず、神の国商品の数々、靈的生活の価値などの書いてある、神の国のカタログ、つまり、聖書をマスターし、これに精通していかなければならないわけである。

C、授業の背景を研究すること たとえば、当面の授業がガラテヤ人への手紙の一部であるならば、ガラテヤ人への手紙全体を調べるのである。また、福音書の一つから一連の授業をしていこうとするならば、まずその福音書を最初から最後まで通読するにこしたことはない。もしまだ、ヨシヤ王に起つた出来事の一つを取り扱おうとするときは、ヨシヤ王に関する列王紀、歴代志の記録全体にわたつて、研究し、また、その時代に行なわれたエレミヤ、ゼパニヤの預言をも検討してお

一、教会に教師養成クラスがあるなら、そこに出席することが一番よい。

二、通信教育を受ける方法もある。

三、必要なことがらの書いてある、すぐれた本を買って読む、読書方法もある。

D、研究の結果を書きまとめること 研究の結果を書きまとめることは、記憶の助けともなり、また、本題の中心を頭にはつきりと植えつける手段ともなる。このことについては、後章において、また詳述しようと思う。

E、祈り心をもつて下調べに当たること 日曜学校教師の目標とするところは、主として靈的なものであつて、知識注入一邊倒のものではない。靈的目標、それは、生徒たちの内面にあるクリスチヤンとしての性格を成長発展させていくことである。それゆえ、祈りによつて与えられる靈的力なしに、この靈的知識をうまく教えていくことはできない。それはあたかも電気のスイッチを切つておいて、パイプ・オルガンをひこうとするようなものである。授業の下調べのたびに祈りの必要なことを、スター氏は次のように述べているが、これは特に男の子のクラスのために言われているのではあるけれども、また同時に、一般原則として、各科、各クラスに共通なものでもあろう。

「われわれは、一年を通じて、これらの少年たちに二十九回感動を与えることができるのである。

(毎日曜日授業のある日曜学校においてなら、それは五十二回になる) キリストの戦士として、われわれは手に手に、神のみ言葉なる靈の剣を持つている。しかも、神の教会は神のみ國のために、その剣を三十五回ふりまわせと命じてしているのである。思えば、教室に臨むたび毎に、われわれは危機に立たされていると言つても過言ではない。われわれの授業を受ける少年たちにとつては、われわれの教えていくことは、なにもかもほとんど耳新しいことばかりで、日常生活をとび離れた一つの経験なのである。それだから、すべてはわれわれの一挙一動にかかり、クラスをどういうふうに取り扱うかということにかかっている。もし、われわれが氣高い気持ちで授業をするならば、これらの少年たちの生命のうちに、やがて、彼らをキリストに対する忠実な信仰へと誘う三十五の刺激を与えることになる。われわれは彼らの魂を、人生途上必ず来る試みの日において、危急、困難から救うところの力にふれさせたいのである。

もし、われわれがじゅうぶんに下調べをしなかつたために授業がうまくいかなかつたり、時間いっぱい、四十分間を目標もなくあちらこちらつまずき歩いたり、何の目的もなく、知性もなく、落着きもなく、むやみに神経質であつたり、気が散つていたり、不精だつたり、あいまいな授業をするなら、貴重な機会を逃がした上に更に悪いことには、われわれは明らかに実害を流しているのである。というのは、われわれの氣のない授業、不手ぎわなやり方によつて、口で言うより更に強く、キリスト教などというものは熱情をかきたてるものではなく、またそれを教えようとしているあの

おとな之心をかきたてることすらできない、取るに足りないものであるということを示すことになるからである。

その日は自信がないからといって、われわれはその日曜日に限って、生徒たちに与える影響のパイプのコックをしめるわけにはいかないのである。人というものは、いく人か集まれば、たとい言葉は一言もかわし合わなくても、必ず何らかの意味で影響力の作用を受けるものだからである。われわれは好むと好まさるとにかかわらず、日曜日がやつてくれれば、生徒に影響を与えない。とすれば、問題は、生徒たちに対して、キリストに似るという方向に導くための影響を与えるか、または、そのほかの方向に導く影響を与えるか、というところにかかる。この意味において、まずわれわれはこの仕事に適したものとされていることを確かめなければならない。その上に、更にわれわれは、神のみ力なしにはとうていこの仕事をやつしていくことはできないということを銘記しなければならないのである。」

F、教師としての備えをすること 前項においては祈りについて述べたが、そのことから結論的に言えることは、日曜学校の授業に関しては授業そのものよりも授業をする人、教師の方が大切であるということである。つまり、作業そのものよりも作業をする人の方に重点が置かれているのである。エマーソン氏は、

「教師はわたしに選ばせてほしい。教程はだれが選んでもかまわないと、言っている。」

授業に生氣を吹き入れる力、それはその教師の生活態度である。その人物、人となりはその言うところよりも、はるかに大きな影響力をもつていて。エマーソン氏はまたこうも言っている。

「話し手は自分の好きな言葉を思う通りに使うがよい。しかし、どんなにがん張つてみても、その人自身に内包する、その人の人格以外のことは決して言えるものではないのである。」

それゆえ、教師はしじゅう心のうちに自問自答してみる必要がある。

「自分は生徒たちに真理を教えようとしているが、果たしてその真理に即した一個の模範となつてているであろうか。生徒たちに忍耐強くあれと教えようとしているが、果たして自分自身はどうであろうか。生徒たちに祈りを勧めようとしているが、果たして自分自身は祈っているであろうか。」

ある人が「行儀作法」について話をしてくれるようにと、ある学校から頼まれた。すると、その人は生徒の行儀作法を取り上げないで、教職員に対して、教職員の行儀作法を説いたというが、これは実に、この理に基づいたものである。大砲に弾丸、弓に矢、同様に教師と授業とは切つても切ることのできないものである。

ここに故グリフィス・トーマス博士の詩がある。この詩は下調べの「秘法」ともいべきであろうか、以上本章に述べたことを実に適切に言い表わしている。

おのれを空しうして

ひとり考え

心をとめて

ことごとく読み

ペンをとつて

自らをはつきりと書き

心をこめて

熱きいのりを

自習案内

- 一、学課の真理を消化し、それを教師の一部分とするためにはいかにすべきか。
- 二、次の日曜日の下調べは、いつ始めるべきか。
- 三、週のはじめに下調べに着手するについての利益を二つ以上あげよ。
- 四、本章を精読し、徹底的研究の六段階を示せ。
- 五、教師は、まず、教案を読むべきか、それとも聖書を読むべきか。
- 六、必要以上の材料を集めることの大切な理由を示せ。
- 七、日曜学校教師として欠くべからざる聖書の知識六項目をあげ、これを得る方法を考えよ。
- 八、敬虔な教師となるためには、いかにしてその人物をみがくべきか。

第五章 授業の目標の設定

参考聖句 ピリピ人への手紙第三章一三、一四節

パウロは目標をもつことの重要性を知っていた

働きに必要な材料を手に入れたなら、教師はこんどは、その授業の目標を一つ設定しなければならない。目標設定に当たっては、「この授業を通して、生徒たちの生活のうちに、いかなる靈的成果を期待したらよいであろうか」という問題から出発するのである。これを旅行にたとえてみよう。荷物を整えることは授業の材料をマスターすることであり、乗り物、経路をきめることは教え方の選定であり、時間の割り振り、目的地の決定は授業の目標の設定に当たる。こう考えると、日曜学校の授業は、ある一定の目的をもった航海のようなもので、これはよほど気をつけて運行されなければならないものである。目的地を定めずに出発する教師が、たいてい目的地に到着できないのは

当然の話である。

そんなでたらめな教師はいるはずがないと言う人があるかもしれないが、事実、「目的地」を知らないでその授業を行なっている教師の数は相当たくさんある。ここにクレアンス・H・ベンソン氏が例示した次のような教え方を引用するが、こういう教え方には、世間一般、いくらでもぶつかることができる。

教師 良夫君、その次の節を読んで。

良夫 (読む) 最後に、その女も死にました。すると復活の時には、この女は、七人のうちだれの妻なのでしょうか。

教師 今読んだ句の意味のわかる人は。

つよし 「善良であるように」ということです。

教師 よろしい、それではつよし君、その次の節を読んで。

ベンソン氏は、「こんなことをしていたら、一日の授業はいつになつたら終わるのだろうか」と、言っている。

これはそもそも教え方というものではない。それはただ単に、そこに用いられているテキストの中の、全部の節にある教訓にちょっと触れては、ピヨンと飛んでいくだけのことである。授業というものはその銘記すべき中心点を、コンクリートのなかの砂利の一つのように頭と心とに

しつかりと植えつけなければならぬものであるが、こういうやり方の結果として、生徒はただ多くの相互に関係のない事実を覚えて帰るだけなのである。

次に、あるいは「一レッスン我々は、四十分間にそれだけしか教えないのか」という問題が起ころうかもしれない。実際問題として、成果を期待しての授業をするならば、一校時に一レッスンということになる。ジエームズ教授の主張するところによれば、人は一時間の講義では、ただ一つの点に光を当てることしかできないという。たとえばここにある人がたった一日でニューヨーク全市にわたっての市中見物をしようとしたらどうであろう。矛盾に聞こえるかもしれないが、その人はあまり多く見すぎて、町を見ないということになってしまふにちがいない。それはむしろ、その日見物すべき対象を一つにしぼつて、有名な教会を見て歩くとか、有名な大学を訪ねてまわるとか、集中的なプランをたてた方が良いのである。

日曜学校のある教師はこう言った。

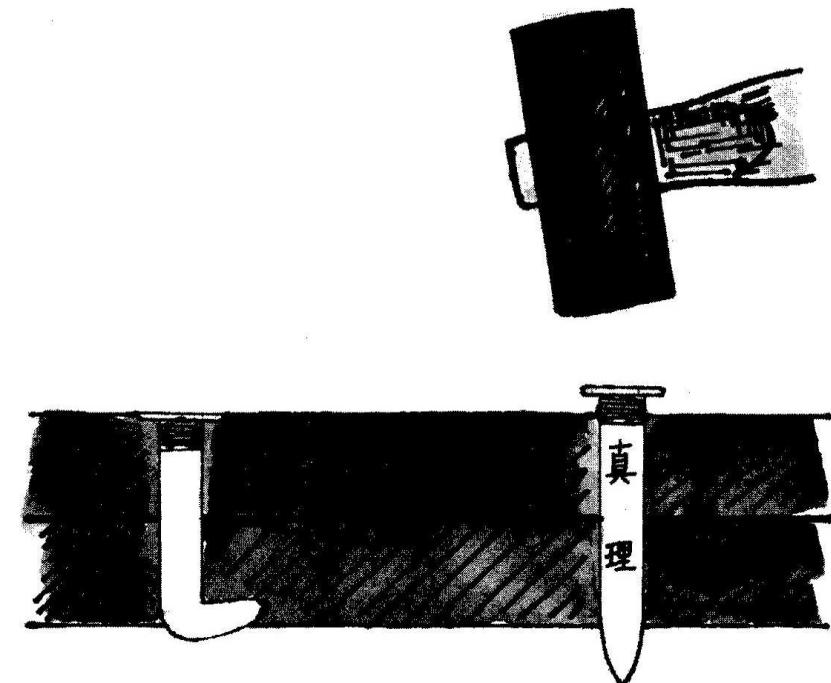
「レッスンのなかでたくさん真理を教え込もうとするよりも、一真理をいろいろな方法、いろいろな角度から教えていくことがかんじんである。一時にたくさん詰め込むことはとうていできることではない。大工が板をつなぎ合わせるときには釘を使う。しかし、その釘はあまり多くはない。できるだけ少ない方がよいのである。それをしつかりと打ち込んで、板を裏返して釘の先をたたき曲げる。不必要にたくさん釘を打てば、板は割れて、きかなくなることを大工は良く知っているの

である。」

以上述べてきたが、こう言つたからといって、何もこれは、その授業に付隨している興味深い細部やおもしろいエピソードなどをすっかりふるい落としてしまって、与えられた四十分間を、きまりきつた一つの教訓に費やせという意味では決してない。それはあくまでも、授業の中心目標は太陽のようなものであり、それを取り巻く付隨部分は太陽をめぐる惑星のごときものであるという意味にすぎない。むかし、中南米で、スペイン人が土着民と戦つたことがある。そのとき、スペインの兵隊たちは相手の酋長を捕えるよといふ命令を受けた。捕えることができなければ殺してしまえといふ命令である。兵隊たちは、この酋長を捕えることが、とりも直さず、土着民全体を捕えることであるということを知っていた。これと同様に、教室で教師を先頭に行なわれる仕事は、教科書の「酋長」を捕えることでなければならない。それが教師の目標とすべきところである。すると、ここから、当然、次の問題が出てくる。

授業の目標を設定するにはどうしたらよいか

第一に注意深くテキストを研究することである。たとえばその授業のテキストがヨハネ十五章の中にあるとするならば、教師は、「祈りをすることと、み言葉を読むことを通して、ぴったりとキリストと触れ合っていくことが



真理を教えていく



授業はびんであり、メッセージは油である。

絶対に必要であることを、クラス全員の心にも頭にも焼きつけなければならない」という点に目をつける。

また、テキストがマタイ六章五一五節ならば、

「この四十分間を通じての第一の仕事は生徒たちを、ただ一人、神と相接するために、聖書を持つてどこかへ身をかくしたいという切なる願いを持つように感動させることだ」と、考えるべきである。

こういう実践的な授業でなく、それが一連の授業の序言というような説明的な授業の場合、たとえば、使徒パウロの少年時代、その教育などを示す学課のときにも、教師は、

「これはパウロの一生というシリーズの第一時間目である。ここでは一つ、当時のユダヤ少年の家庭生活やその教育について、具体的にはつきりとした観念を生徒に持たせなければならない。そして、神は将来の働きのためにパウロに準備をさせていたということを教えようと、考えるにちがいない。

このようにみてくると、ここにテキストのもつ目的というものは自然にわかつてくる。テキストは生徒たちの心と頭とに、きわだつて重要な真理を導き入れるための一手段として存在するのである。

マリオン・ローレンス氏は言っている。

「授業は器であり、メッセージは油である。授業というものはメッセージを運ぶための乗り物のようないわゆる物である。**授業は船であり、メッセージは積み荷である。**生徒は授業は乗り捨てて行くが、メッセージは持つて行く。メッセージのみが命を変質させていくことができるのである。子供のときに日曜学校で聞いたことはみんな忘れてしまって何一つ覚えていないが、そこで習ったことが、この自分の人生に、いろいろな意味で働きかけているということをしみじみと感じていると言うクリスチヤンは、実に多いのである。」

第二に、授業の目標は生徒たちが何を求めているかということを考えて設定することである。日曜学校教師のなすべき仕事の一つに、その担任するクラスの生徒を知るということがある。教師は、クラスの一人一人についてその社会的弱点と考えられる点、どんな人生的苦難を抱いているかということ、現在どんなことに熱中しているかという問題、また、その興味の対象となっているもの、それから、その家庭や学校の状況、などを知らなければならない。次の日曜日における授業目標は、この実際に即した認識と教授材料とを並べてみるとことによって、設定することができる。

フイリップ・ハワード氏はその著書「教師の小さな道具箱」のなかに、この点について、こう書いている。

「クラスの全員を研究し、一人一人の趣味、性格を知り、その一人一人の頭に、魂に、直接ぐつとつつ込んでいく道を見いだすやり方にはいくつかある。その一つは家庭を見ることである。その

父はいかなる人か、母はどういう人か、へやはどんな絵がかけてあるか、その家庭にはいつている雑誌はどんなものか、読書傾向は、家のなかの整理整頓状態はどうか、などを注意するのである。また一つは、個人を觀察することである。生徒の一人一人と個人的に話し合う時間をつくって、いつしょに歩きながらでも、一番好きな本はどんな本か、一番好きな遊びはどんな遊びか、一番好きな仕事はどんな仕事か、というようなことから、この一年間の学校における、家における、仕事に対する意図、計画、また、一生を託そうと考える職業、親しい友人関係などを聞くのである。さらにまたクラスの内外を問わず、友だち同志の会話のうちに現われてくる道徳的傾向を注意して心のメモ又は実際のメモにつけておくべきである。あるとき、ふと、うそをつくことだけが『取り柄』だというような言葉を耳にすることがあるかもしれない。それは、その場ですぐ取りあげて処置することにはならないかもしれないが、しかし取り扱うべき性格の一端を垣間かいま見たことになるのである。更に、表情を見ることである。意地悪い性質、疑い深い性格、軽薄卑屈なものの考え方などを示す、ごくわずかな微候に注意すべきである。同時に、きれいに澄んだ目、生き生きした顔色、開放的で卒直なまなざしなどもまた同様に、心にとめるべきである。」

自習案内

一、日曜学校の学課は生徒の日常生活といかに関連させるべきか。

二、一定の目標のない授業の与える弊害を示せ。

三、一校時の講義で与え得る中心題目はいくつぐらいが適当か。これに関するジエームズ教授の意見をあげよ。

四、一レッスンに多数の真理を織り込もうとすることについて、ある日曜学校教師はどういうことを言っているか。

五、一校時一題目では単調に陥りやすい。これを防ぐにはどうしたらよいか。

六、レッスンの目標を設定するに当たり、教師の考慮すべき「要点」をあげよ。

七、生徒各自の趣味性格をしらべる四方法を示せ。

第六章 授業に対する立案

参考聖句 エレミヤ書第一六章一六一一節、マタイによる福音書第四章一八一二〇節

聖書には具体的に生き生きとした授業計画がたくさん例示されている

次はある講演を聞いた一著作家の印象記である。「講師はその話すべき本題については徹底的な知識をもつていたと思われる。それはおそらく必要以上に知つていたにちがいない。しかし、残念ながら、そこには計画というものがなかつた。その豊富な知識のうちから、語るべき材料を選んでいなかつたようである。その上、それを順序立てて提示する用意に欠けていた。そういう条件にありながらも、講師は無経験から生まれる勇気をもつてすべてを無視し、盲目的にその講演に突っ込んでいった。講師自身、どこへ行くのかわからなかつたが、とに角進んでいった。要するに、講師の頭のなかはごつた煮のちゃんこ鍋であつた。そこから出てきた料理もそのようなものだつた。

最初にいきなり、アイスクリーム、次にスープ、それから、魚のフライ、サラダ、そこへもつてきて何だかしらないが、スープとアイスクリームと飛びきり上等の燻製のニシンとをごちやごちやにませたようなもの、と、まあ、こんなところである。」

真面目な教師なら、自分の授業に対して、こんな酷評を受けたくないのはあたりまえの話である。そこで、教材を消化し、授業の目標を設定した後には、その教材を理論的に順序立てて、その意図とする結果にうまく到達しようということになる。これが本章の主眼である。

まず、ここに次の日曜日の授業の下調べをしている教師があるとする。そのテキストはマタイ六・五一五である。その仕事ぶりをそつとのぞいてみると、その教師は一枚の紙をパンフレットのように折つて教案にさしはさめるようにする。自分を空しいもの、何も知らないものと考え、一生懸命にテキストを読み、吸収し、はつきりするためにノートをとる用意である。とは言つても、授業の際そのノートにばかり頼ろうというわけではないのはもちろんである。ただ参考のために時折ちらと見ようというのである。大要をかいづまんで書くことは、その授業内容を頭のなかで理論的に順序立てていくという目的のためにほかならない。その要約をしていねいにきちんと、きれいに気をつけて書いて取つておくということは大切なことである。その教師が説教者を兼ねているような場合には、なおさらそうである。

授業の大要を作る一番簡単でしかも実際的な方法は、次の三区分による方法である。

一、導入（緒言） 二、提示（本題） 三、結論（結語）

教師は用意した紙に大きく「折つてあるクリスチャン」と書く。その下に、テキストの引照を書いておく。また、日付やその授業のシリーズの名前などを書いておけば、後日、なにかと役に立つことがある。それから、行を改めて「一、導入」と書く

一、導入

指導の成果をあげつつある、一人の教師が言つた。

「始めと終わり、そこにすべてがかかつてゐる。何ごとであれ、始めと終わりをうまくやり抜くということは最も困難な問題である。たとえば、社会生活においても、ある社交場にすんなりはいつてすんなり去るということは、口で言うほどやさしいことではないのではないか。また、業務会談においても、愛想よく近づき、思うところを達成して気持ちよく別れるということは、難事中の難事なのではないだろうか。」

この言葉はそのまま、日曜学校の授業にも当てはめることができる。提示の目的とするところは生徒たちの頭と心とに学課の侵入口をつけることである。結論の目的とするところは、学課が頭や

心にはいったのち、それを離れないようにしつかりと定着させることである。とすると、導入的目的を達成するにはどうしたらよいのであろうか。それは、生徒たちの興味と注意力とを捕えることによって達成される。ローレンス氏は次のように言っている。

「それはまさに理解への道のつけ方の当否にかかっている。教師はかごにリンゴを手当たり次第投げ込むように、その教材を生徒に向かって一度に投げつけてはならない。導入は、それを投げ入れた瞬間にぐいと手答えるあるつり針のような、何となく心をそそるようなものであつてほしい。また、食いついたら最後、容易に獲物を離すことのない捕鯨用のもりのようなものでなくてはならない。」

ここにおいて、教師は導入部の大要を二つに分けて、次のような見出しつける。

- 一、生徒に考えさせる
- 二、生徒に興味を抱かせる
- 三、授業の主題をはつきり示す

これら、三点について、もう少し深く考えてみることにしよう。

一、生徒に考えさせる(第二章の第一、第二参照) 教えるということは学習者のすでに知っている真理を利用して新しい真理を説明することであるから、導入に当たつて、教師はまず、生徒の経験を思い出させたりするのである。とにかく重要な問題は、ここですることが、学課を生徒に本当に理解させるのに役立つかどうかということである。」

さて、ここでまた、下調べをしている教師の考えていることに立ち入つてみるとしよう。
—新しい教材に関連を持たせ、さらにその知識欲を刺激しようとしているのだが、生徒たちはそのようなものについては、どんなことを知っているであろうか。先週の日曜日には欠席が少なかつた。だから、あの宣教師が話してくれた、チベットには祈りの輪というものがあつて、その輪をくるくる回しながら、その回数だけそこの原住民は祈っているという話を聞いたはずだ。こういう祈り方についてどう思うか生徒たちに聞いてみよう。それから、学課にあるように、正しく祈ることがどんなに大切なことであるかということを教えていこう。

もし、クラスがだらけていたり、がやがやしたりして、生徒の注意力を一点に集中することができないような場合には、あのD・L・ムーディーの話をしよう。「有名な福音伝道師のムーディーはある伝道集会で一人の兄弟に祈りをしてくれるようにと頼んだ。指名されたその人は祈りはじめた。しかし、どこで止めたらよいかわからぬようだつた。五分、十分、十五分、時間はたち、会衆は

そわそわし始めた。そのとき、ムーディーは賛美歌を手にして立ち上がって、こう言つた。

『みなさん、この兄弟の祈りが終わるまで、わたしたちは賛美することにしますよう。』

これはすぐれた处置であった。その会衆のなかに才能すぐれた一青年がいた。青年は長い祈りにすっかり飽きて、まさに席を立つて出て行こうとしたのである。しかし、その青年が後日ある人に語つたところによると、ムーディーの常識あるやり方に心を動かされてそのまま残つた。そうして、決心者がつのられた時恵みの座へ出て行つたのである。後年、この青年は世界的に有名な宣教師になつた。

生徒たちはきっと、この話の要点をつかみ、正しい祈り方を知ることがどんなに大切であるかとということを理解するにちがいない。しかし、これは取つておきの非常手段のようなものである。といふのは、うっかりこういう話をすると、生徒というものは、ともすると、話の面白い点にひかれてしまつて、その中にある教訓をおろそかにしてしまうからである。――

二、生徒に興味を抱かせる 今まで生徒との接触をするようにしてきた。そして主題を紹介したので、次にすべきことは、生徒にその問題に興味を抱かせ、生徒の注意の持続を計ることである。それにはどうしたらよいであろうか。人間性に関する重要な真理を知ることが、この際、参考になるかもしれない。アダムの裔チホである人間は、だれしも根本的には利己的なものである。たとえ、だ

れもが利己心に城を明け渡してしまうのではないにしても、本能として利己心をもたない人はないのである。一般に、人はだれに最も深い関心を示しているのだろうか。答えは簡単である。一言もなく、自分自身に対してである。卑近な例をあげるが、夕刊に自分のことが出ているということを知つたら、その人は、新聞を手に取つたとたん、いつたい、どこを読むであろうか。答えは明らかである。人間性を研究しているある鋭い觀察者の説に、一般に人間というものは、歴史上の十大偉人について論ずるのを聞くよりも、自分自身をほめてくれる、ちょっとした話に耳を傾けたがるものだという。

これは何も人はだれでも多かれ少なかれ自己中心主義であるということを皮肉まじりに言つているのではない。むしろ、この知識をどういうふうに応用したらよいかということを説明するためである。主イエス・キリストさえ、無私を教えるために利己をもつて諭して下さつたのである。すなわち、

「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」

と言い、また黄金律に、

「人々にしてほしいと、あなたがたの望むことを、人々にもそのとおりにせよ」と、言われたのである。

生徒に学課に対する興味を抱かせるために、この原理をどういうふうに応用したらよいのだろう

か。それは、生徒にとつてそのレッスンが有意義であること、そこから得られる知識がやがて生徒個人個人にとつて重要なものとなつてくるということを説くことである。

ここでも、下調べに没頭している教師の頭の中をちょっとのぞいてみよう。

——「十五分ないし三十分間、生徒をこの問題につなぎとめておくためには、生徒たちにこれを知りたいという熱意をもえ立たせるよりほかない。もし、生徒たちの気持ちを、うまくその方へと向けて学課にひきつけることができたなら、それだけもう、真理は生徒たちに受け入れられるばかりになつてゐるのである。当然生徒たちは、力を得るということに興味を覚える。そこで、祈りは宇宙における何ものにもまさる力である、それはこの全世界を動かしたもう神のみ手を動かすものである、と説明しよう。そして、実際に祈りが聞かれて成就したという実例を話して聞かせよう。祈りというものが人生においていかなる意味をもつものであるか、これをはつきりと理解させなければならぬ。」

三、授業の主題をはつきり示す こうして教師は本題となるべきものを紹介し、生徒の興味を確保し、ここで、これから学ぶべきことについて、はつきりと生徒に示す。

ウアイグル博士は次のように記している。

「授業の主題は簡単で印象的なものであつてほしいものである。それは覚えやすく、後々までも、

そのレッスンを思い出させる糸口となるようなものとしたい。いつでも、出来るなら人の名前と、そのレッスンの中心事項又は特徴を含んだものが望ましい。たとえば、『よろこんでイサクをささげるアブラハム』『兄弟に対するヨセフの親切』『ヨシュアと五人の王の戦争』というふうに。」
今、例としてテキストをマタイ六・五一一五にとつてゐるので、レッスンの主題は次のようなものとなる。

「正しい祈り方と間違った祈り方を教えられたイエス様」

または、

「祈り方を教えられたイエス様」

授業の目標は、前章において、すでに設定されている。しかし、これは生徒たちに示してはならない。教師はクラスに向かつて、これから何を学ぶかということは公表するが、到達しようといふ目標点、つまり授業の目標については、自分の頭の中にだけしまつておくのである。

さて、この項を終わる前に注意すべきことが二つある。

その一つは、導入部においてかなり多くの時間を使つてゐるように思われるが、実際の場合、この導入部分には全体のほんの少しの時間をさくだけで良い。教師が綿密なプランをたてるならば、導入は、簡単に要点をつかんで、広く大きな範囲の問題を取り扱うことができるはずである。

その二は、導入に当たっては、できるだけ生徒の自主活動に任せるべきである。教師は、微妙な

変化を感じ取り、適切な質問を発して生徒たちの発表を促し、「引き出し」をしなければならない。こうして導入の研究ができたならば、今度は授業の中心をなす「提示」について考えることになる。

二、提 示

この部分で、教師は、

一、学課の概観

二、学課の展開

三、学課の説明

をしなければならない。

一、学課の概観 ここに観光団の一行を案内しようとしているガイドがいるとする。そのガイドは出発に先立つてまず、附近の小高い場所へその団体を連れて行つて、その土地の概観を示し、後刻一行がゆっくりと心ゆくまで見て歩こうとするところ全体にわたつて、その風光の美を一通り紹介する。これと同じやり方で、教師はまず、生徒を授業の小高いところへ案内し、その授業全体を見通せるようにしてあげる。人によつては、この「概観」というへんてこな事実のよせ集めのよう

なもので何をするのかと当惑するかもしれない。しかし、ここにも目的があるものである。それは教師が、本すじをたどりながら、学課の要点を順序よく提示していくことができる。そこで、教師は、教案に出ている、又は他の手引き書に出ている、次のような概観を書き出す。

一、間違った祈り方 マタイ六・五、七

イ、ユダヤ人のまちがい（見せびらかし）

ロ、異邦人のまちがい（意味のない繰り返し）

二、正しい祈り方 マタイ六・六、八

イ、眞実（神に見られ、神に聞かれるように祈ること）

ロ、知性（知性をもつておられる神と交わること）

三、祈りの模範・主の祈り マタイ六・九—一五

イ、はじめの祈り（神への呼びかけ）

ロ、神の一

み名

み国

ハ、人の一

ゆるし

二、頌栄

もち論、教師はその概観を堅苦しい形式で読みあげるべきだというのではない。骨組には肉づけが必要である。たとえば、次のようにである。

「始めに、キリストのおつしやつた間違った祈り方について考えてみましよう。その一つは、人のいる前で、見せびらかそうという気持ちで祈ること、もう一つは、オウムのように意味のないことを口先だけで繰り返して祈ることです。こういう間違った祈り方を正しい祈り方にするにはどうしたらよいでしょうか。それには、方法が二つあります。一つは、神のみ前で、人知れずひそかに祈ることです。もう一つは、神は知性にすぐれたお方ですが、その知性にすぐれたお方とお話をすることです。さあ、そこで今度は、だれでも知っている『主の祈り』という知的な祈りのお手本について勉強をします。この『主の祈り』のなかに、人が神に近づき、お願いをする、正しいやり方が示されているのです。」

二、学課の展開　さていよいよ、授業の中心に足を踏み入れる段階になった。この段階において

は、教師は腕ききの工芸家よろしく、いろいろな事がらをその正しい関係にしたがつて結び合わせ、難解な部分を解きほぐし、全般にわたって、前もつて計画した通りの結果を求めながら、その材料を一つ一つ組みあわせていくのである。

それでは、一見複雑でめんどうなこの仕事をどういうふうにやっていったらよいのであろうか。それはその場合に採用される授業法によって違ってくる。小学下級科クラスを受持つていてるなら、そのレッスンの基礎はお話を聞いて聞かせるというところにあるから、教師はそのお話を一から十まで徹底的に自分のものにしておかなければならない。講義法でやっていくのなら、綿密なアウトラインをつくる必要がある。便宜上、ここでは、小学上級科クラスの授業について考えてみるとする方法が使われている。そこで、この際、最も良いアウトラインは充分に研究し尽くした、生徒にどうしても考えさせずにはおかないというような質問を多く含んだものでなければならない。また、質問の一つ一つはその授業に含まれている重要な論題に対する討議の中心となり得るものでなければならない。池に石を投げ込むと、水面に出来た輪がどんどん大きくなるのを見る。学課を発展させる質問もこれと同じで、その論題を発展させるようにクラスを導くのである。なお、質問に対す る充分な答えを引き出すために、いくつかの補足的質問を試みることもある。次にその実例を示すことにしよう。

今、教師は質問の表をつくり始めている。(二)では混同を避けるために、質問は特に太字にしておく)

1、偽善者とは何か。第五節を見ること。

これは偽善ということについての勉強の、手はじめともなる質問である。この質問によつて、生徒たちの口は偽善ということに向かつて開かれ、この問題に関して今までに知つていろいろなことを意識の表面に思い浮かべるようになる。手なれた教師はまず、生徒たちの頭の中にあるもの用いていくからである。生徒たちはこの質問についてしばらくの間考える。そうして、二人、三人答える者が出てくる。そこで、教師は次のようなことを質問しながら、生徒たちの頭の中にあるものを「引き出す」のである。(「教育する」という言葉の定義を思い出すこと)

「自分の弱さのために罪に落ちていくクリスチヤンがいるけれども、『偽善者』という言葉は、そういう人に当てはまるのだろうか。また教会の会員ではあるが、まだ一度もほんとうに悔い改めたことのない人に、『偽善者』という言葉は、当てはまるのだろうか。それとも一度は全く救われたが、ふたたび罪の生活を始めている人のことを言うのだろうか。第五節を見ると、偽善者についての、イエス様が言われたみ言葉を知ることができる。」

こうして次の質問に移つていく足がかりができた。

2、主は人前で公然と祈ることを禁止されたのだろうか。第六節を見ること。この質問は、さら

に新しい論題への「出発点」となる。ここでも、生徒たちの頭はこの問題についてあれこれと考えはじめ、いろいろなことを意識の表面に浮かびあがらせる。浮かびあがつたこれらの思考は、また、次のような質問によつて引き出し、展開させていくことができるるのである。

「イエスが人前で公然と祈る祈りをお認めになつたという確証をあげることができるか」あとで更に述べるが、答えはただ単なる肯定の言葉または否定の言葉だけでは充分ではない。生徒が本当に考へてゐる証拠がそこにはない。「もし主が人にあらわそうとして人前で祈ることを禁止したのでなかつたなら、主の禁止されたのは何であつたか」などなど。

質問法のアウトラインについてはこれくらいにしておこう。ただこの項を終わるに当たり、次に忘れてはならない注意事項を書きとめておくことにしよう。

- A、時間的制限を考え、常にそのレッスンの中心点を捕えるような質問を選ぶこと。
- B、授業の目標を考え、その目的を達成するための答えを導き出すように努めること。授業活動を車輪にたとえるならば、車軸は目的、スポーツは学課の中の題目、輪縁は生徒の生活に当たると言えよう。

三、学課の説明 復習的に、ここでちょっと家を建てる話に立ちかえつてみるとすることにしよう。

- 1、教材をマスターし、授業の目標を選定することは、青写真をつくり、細部の指定を行ない、

用材を決定し、工事の進行計画を確保することに相当する。

2、授業の下調べは基礎工事に相当する。

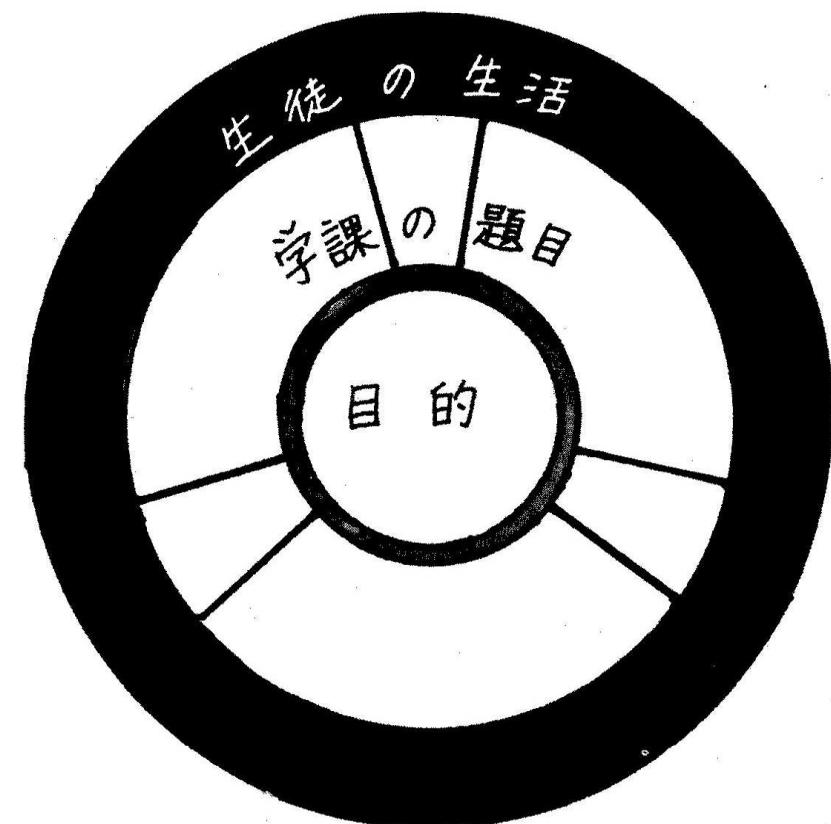
3、授業の要約することは、骨組を立てるに相当する。

4、質問は、与えられた生地のままの木材を手がけて作るように言われ、生徒が製作したものを要求することである。

5、レシテーションや話し合いによって、教師は骨組の間に必要なものを入れ込み、天井、壁、床などができるいく。

そこで今度は、例話によつて、建物の窓とか電気の配線工事をしていくことになるのである。例話は主題の中心点を解明し、生徒の理解を助け、生徒の興味を持続させる。故にこの所で、教師は説明ということを重視し、表をつくつておくことがかんじんである。もし、黒板を使つたり何か実物を使つたりしようというならば、その場合には、何をどういう目的でどういうふうに使うかということも書き落としてはならない。こうみると、レッスンを解説していくための例話のもつ価値というものは、いくら高く評価しても評価しすぎるということはないのである。この意味において、この問題についてはあとで特に一章を設け、改めて考察することにしたい。

さて建築はいよいよ仕上げの段階へと到達した。そこで結論ということになる。



授業の目的を達成する

三、結論

例を変えて言うならば、導入においては釘を立て、提示においてはそれをたたき込み、結論においてはそれの先を折り曲げるのである。結論の目的とするところは授業の内容を生徒の頭と心とで深く植えつけることである。これがために、教師は頭と心、この両面にわたって訴えていくことになる。

一、頭に訴える 生徒たちがその日のレッスンの要点を、しっかりと自分のものとするように、教師は授業の要点を要約してあげなければならない。生徒たちがその教えられた真理をつかんでいるかどうかをたしかめるために、教師はクラスに対していろいろと話させてみるのである。そうして、こういうふうに導く。「ベルが鳴るまでにまだちょっと時間があるようですね。ここで、きょう習ったところを、ざつと復習してみましょう。時間のはじめに、この授業の題をきめましたね。それは何でしたか。だれか言つて下さい。キリストがいけないとおっしゃった第一の間違った祈り方は何でしたか。では、キリストが示された、それを正しい祈りにする方法はどんなものでしたか。キリストがいけないとおっしゃった第二の間違った祈り方はどんな祈りでしたか。それを正しい祈りにするために、キリストは何とおっしゃっていますか。キリストがその弟子たちに教えられたおりに

手本の祈りの名前を言つて下さい。だれか、神様に対するお願いを言つてください。それでは、人に対するお願いは」

二、心に訴える 授業の始めに、教師は生徒の頭に知りたいという強い願いを起こさせた。しかし、ここへきて、教師は一段と重大な任務に直面しているということを自覚しなければならない。それはつまり、生徒に、その知り得たところを実地の行動に移していくたいという強い願いを抱かせなければならないということである。

ある偉大な科学者が言つた。

「人生の大目的は知識ではない。行動である。」

知識は行動に移されなければならぬ。

かつてある男の子のクラスについて次のようなことが言われたことがあるが、それは、あらゆるクラスが他山の石として反省してみるに価する言葉ではないであろうか。

「私たちの授業は、どうも理論にとどまり勝ちななものである。しかし、これは非現実的と言われても弁解の余地がない。少年の欲しているものは理論や忠告などではない。こういうものは、実生活における実力と責任を結びつけることができない。少年というものは單なる忠告を欲していない。同様に、純理論など求めてはいない。少年たちの欲求しているものは実際の事物である。その興味の中心は正真正銘の活動である。」

これはまさに真理である。

今、これを、これまで述べてきた授業のひな型に当てはめてみるならば、教師は次のように言うことになる。

「水泳を習うのに一番よい方法は泳ぐことです。スケートを習うのに一番良い方法はスケートをすることです。そこで、毎日いかがづつ時間をこしらえて、祈る、默想する、聖書を読むという決心をして、実行していくなら、永遠につながる祝福を、この授業から得ることができると思います。」

学課を適応させる方法について、厳重なしかも手つとり早い規則をこしらえることは不可能である。すべては、その時々の状況により、また、神のみ靈の導きによる。もし教師が充分に教えたなら、特にこれという正式の適応の必要のない場合もあるのである。み言葉そのものが働くのである。ある場合には、直接的な説得よりも、間接的にそれとなくほのめかす方が効果的である。その一例として、主イエスが「よきサマリヤ人」のたとえ話をどういうふうに適応されたかを考えみると良い（ルカ一〇・二五—三七）。

このたとえ話をされた後、主は律法学者にこう言つて直接的な応用を与えることができたかもしない。

「『わたしの隣り人とはだれのことですか。』というようなことを聞く、その事が、隣人愛に欠けて

いる何よりの証拠である。もし、ほんとうに隣人であるならば、その人は本能的に、助けを必要としている者は皆隣人であることがわかるはずである。話のなかのサマリヤ人と同じ気持ちを実行しない。それが、この問題に対する一切の回答となるであろう。」

しかし、主はこの直接法を用いられず、かえつて、間接的に次の質問をして、質問者にその考えを言わせられたのである。

「この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になつたと思うか。」

すると、律法学者は、

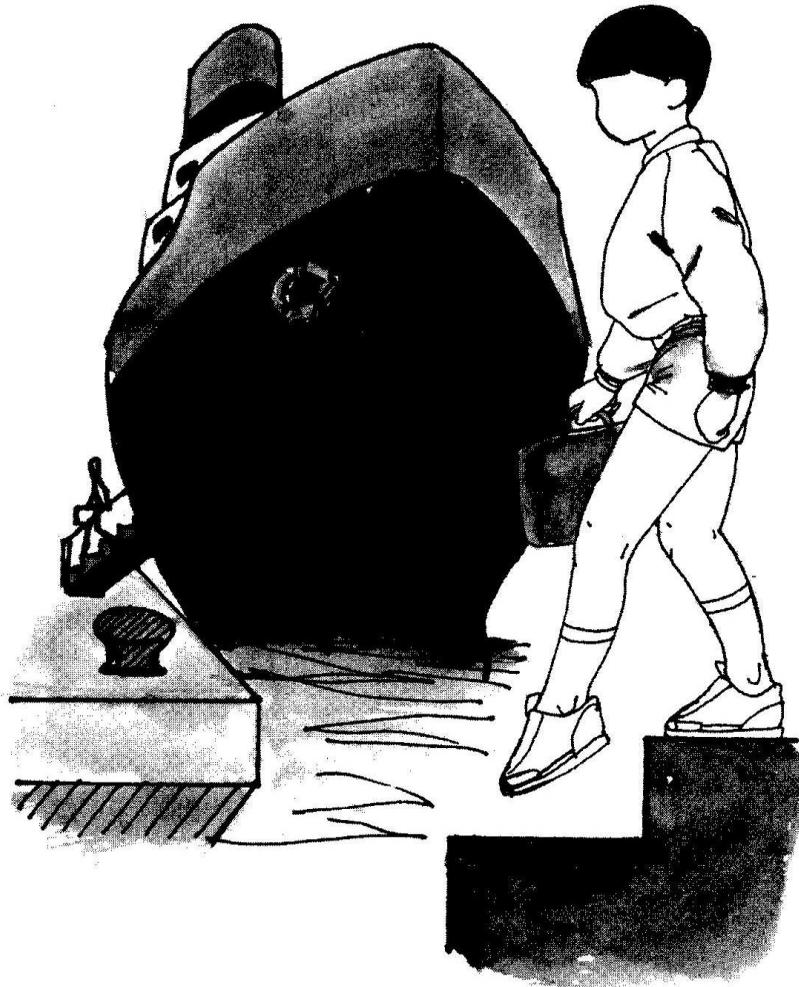
「その人に慈悲深い行いをした人です。」

こうして律法学者の心を引き出した後、主は、「あなたも行って同じようにしなさい。」

と、命令して、そのレッスンの釘を打ち込み、折り曲げたのである。

これらの言葉のうちには律法学者に対する一種非難の語気がうかがわれるが、しかし、これは間接的である。それがために、律法学者の胸の底には何ものかが残され、いく日もの間考えめぐらさなければならなくなるのである。

この際見のがしてはならないのは、主は律法学者に自分で適応をするようになされたということ



授業時間には制限がある

教材を集めるに当たっても、それを割りふるに当たっても、授業時間には制限があるということをしじゅう心に留めていなくてはならない。授業というものは船旅のようなものである。予定したところに着けば橋をかけ渡して乗客をおろすように、時間がくれば教師は生徒をクラスから解放することになるのである。それで、定められた時間内にその授業をすつきり納めるためにはどの部分に強調点をおき、どの部分を簡略化するかというような手くばりをするのであるが、このテクニックは修練と経験とによって身につけることができる。

教師のつくるアウトラインは簡単であることが必要である。それはただ学課の骨組だけであって、それを見て記憶を新たに出来るものであれば、用は足りるのである。

要約

「さあ、正しい祈り方がわかりましたね。しかし、祈り方を知ったというだけでよいでしょうか。祈りについて知つたというだけでリバイバルが起こるでしようか。習つたことはどのようにして完成したら良いのでしょうか。『それは実行です』と答えて授業を終わりましょう。

この章で説明してきた授業計画は学課を、鉄で作つたどうにもならない型の中へはめ込んで、教師の自由を束縛してしまうためではない。むしろこれは、順序よく教材を割り振り、順序よくそれを提示していくための手がかりとなるようにと思って書かれたのである。スター氏は、

「たとえ、だれがつくってもこれ以上はできないというようなアウトラインを用意しておいたところで、授業中に脱線してしまうような事情に直面することはいくらでもあることである。それだからといって、力を落とすことはない。脱線するときにはそれ相応の理由があるのである。時には、即座に返事しなければならないような重大な質問を持ち込んでくる生徒もあるだろう。そういう時こそ、またとないチャンスなのである。その宗教教育の最終の目的は、人生、生活に影響を与えることであるということを忘れてはならない」と、言っている。

時によつては短時間脱線することは必要なことであり、また、賢明なことであるかもしれない。しかし、

「大切なことは、脱線出来るような線路をもともと持つてゐることである。

本章においては、相當に広範囲の事を取り扱つた。そこで、念のため、もう一度授業の計画について、概略を復習しておくことにしよう。

一、導入

目的＝生徒の頭と心とに準備をさせる

方法＝一、生徒に考えさせる

二、生徒に興味を抱かせる

三、授業の主題をはつきり示す

二、提示

目的＝授業の中心的事実をつかませる

方法＝一、学課を要約する

二、質問、話し合い、説明によつて学課を開拓させる

三、例話、学課の説明

三、結論

目的＝授業を要約し、二つの面から人生、生活に応用させる

方法＝一、頭に訴える

二、心に訴える

自習案内

一、授業内容の要約をつくる前に、まず、教師のしなければならない準備がある。その段階二

つを示せ。

二、要約を書かなければならない第一の理由は何か。

三、要約における三段階を示せ。

四、要領よく準備された導入（緒論）は、なぜ、必要か。

五、「導入」の項を読み、授業のはじめに当たり、生徒の注意を手中に收めるための方法を

二、三記せ。

六、本能としての利己心に訴えて授業に興味を抱かせるにはどうしたらよいか。

七、授業の際、教師はその学課の表題を明らかにするべきか、否か。その理由は。

八、授業に際して、その学課の概観を提示する方法を示せ。

九、質問による要約とはどんなものか。

一〇、「結論」の目的とその重要性を示せ。

一一、「結論」を与える場合、その授業をある形式に当てはめるために融通のきかない規則をつくることは不可能である。その理由は何か。

一二、「よきサマリヤ人」のたとえ話において、イエスはその真理を律法学者の日常生活に当てはめようとして、どういう方法をとられたか。

第七章 クラスの緊張の持続

参考聖句 テモテへの第一の手紙第四章一一節、テモテへの第二の手紙第四章一一節

常に励んで生徒の模範となることによつて授業に対する興味を持たせること

クラスの注意を呼び起し、その興味を維持していくことは、授業上まことに重要なことである。

本章ではその重要性を考え、これに対する方法について考察を加えていくこととする。

これに関する教師の問題およびその解決法は、簡単に言えば、次のようになるであろう。

一、教師の任務は

授業の内容を生徒の頭にも心にも植えつけること

二、この任務をどうやってなし遂げるのか

まず最初に、生徒たちの注意を喚起することによつて

三、生徒の注意を喚起するには

興味を抱かせることによつて

四、どうやつて興味を抱かせるか

その授業を、生徒が知つていて、しかも、興味をもつてゐることと対照させていくことによつて、つまり、生徒の頭の中にあることを使つていくことによつてである。

順序を逆にすれば、生徒の知つていることに訴えていけば、興味を抱かせることができれば注意を喚起することができ、注意を喚起することができれば、その授業の所期の成果をあげることができるということになる。

注 意

注意とは何であろうか。

それは「ある事物または真理に対しても頭脳を専心用いることである」と、定義されている。注意深い生徒は、その学課に関して、教師の言つたり、したりすることについてその頭の働きを一点に集中し、思考力を一ヵ所に絞つているものである。いわゆる授業には、生徒は熱心に教師を見つめているが、それはただ見せかけだけの態度であつて、実は、心はいく千キロも離れたところをうろついているということがある。

「心がここになければ、見ていても見えず、聞いていても聞こえず、何を見ていても何を聞いても、いつこう心に映像を結ばない」ということがある。こういう生徒は腰をかけて夢をみてゐるのである。心には内外二重の門がある。外側の門は開いて、心の外庭にはいることだけを許す。生徒というものは大部分、教師の教えていることの大半に対して、内側の扉をひたと閉め切つたまま、それを心の奥へ招き入れようとはしないものである。」

と言われている。

それについて、こんな話がある。

アフリカのある村で伝道集会が催された。その時、宣教師の顔をじつと見つめたまま身動きもしないで聞き入つてゐる一婦人があつた。それはいかにも心をうたれているというふうであった。宣教師は、「この婦人はたしかにこのメッセージに心を奪われている」と思い込んだ。そうして、集会の終わつた後、最後まで熱心に注意を傾けたその婦人のところへ特に近寄つて行つて話しかけた。しかし、宣教師は裏切られて落胆した。その異教の婦人は、「先生の金歯を見ていただ。どこで手に入れなすつただか、教えてくんさろ。」と言つたのである。

婦人はまさに興味を抱いて、それを示してはいたのであるが、しかし、それはその主題に対してもなかつた。

注意に二種の区別がある。一は意志的注意であり、他は非意志的な注意である。

意志的注意においては、聴講者はその講義に対しても注意を集中しようという意志の力によつて、その注意を固定する。しかし、この態度は永続的なものではない。聴講者はやがて、その第二の段階、非意志的注意に移行するか、あるいは注意力を全く失つていくからである。この際、大ていは、非意志的注意へ移るよりも注意力を失うものであることは説明するまでもない。

努力もなく強制もなく一つの事がらまたは一主題にひきつけられていく注意、それは非意志的注意というべきものである。一時すべてのことはことごとくその心頭を去り、生徒の興味はなんらの意識的努力も負担もなく維持されていく。非意志的注意は最上のものである。これは興味に動かされて成り立っている。この意味において、もし教師がその授業を面白くないものにしてしまうなら、生徒の頭はレッスンを離れて、あらぬところをさまよい歩きはじめるにちがいない。その理由の一つは頭というものは変化のない一つの事がらにつまでもこびりついてはいられないものだからである。

多様性と変化は興味というものの中心要素である。だから、教師はそのレッスンをくるくるところがすように変転させていかなければならない。換言すれば、いろいろな角度からそれを示す必要があるのである。たとえて言えば、ここにそのレッスンを高いところからずつと見おろすために望遠鏡を使うこともある。また、あるテキストのかくれた美しさを見せるために、顕微鏡を使うこと

もある。話のすじの暗い片隅にきたときには、例話のスポットライトを当ててみせることもある。それから、聖書のある情景をキャンバスに筆で絵を書くように、言葉でえがくこともある。すべてこういう活動、これに類した活動は、授業をおもしろく興味あるものとするためのものである。教師がクラスの注意をつかみ、それを維持していくことは絶対に必要なことであるが、それは、注意というものが聴講者に講師の考えていることを運び入れるただ一つの道だからである。言うならば、クラスが注意を払っていないということは生徒たちは何も吸収していないということであり、教師はうつろな空間に向かつて話をしているようなものなのである。

更に加えて、クラスが教師に注意を向けていないのに授業を進めていくことは、実際に弊害を伴うのである。

このことに関して、フィッチ教授はこう言つている。

「クラスに対して不秩序を許して、いい加減に取りとめもない授業をしていくならば、教師はその都度、生徒たちの精神的資質を低下させ、これを腐敗に導いているのである。それは生徒たちに悪習慣をつけさせていることになる。そういう教師は生徒たちが一生、思慮深く書物を読み、勤勉に觀察し、熱心に話を聞く人になるのを邪魔するようなことをしているのである。」

興味

興味をつなぎとめていくことは、教育においては何よりも大切なことである。興味をつなぎとめていくこと、それは教育の手段ではなく、かえって、目的であると言った教育家がある。生徒はその教えられたことの大半は忘れててしまう。しかし、聖書は世界中で一番すばらしい本であり、クリスチヤン生活は人間最高の生活であるということを生徒に感じさせることができたなら、その教師はその任務を達成しているということになるのである。今仮に、ある教師養成科があつて、旧約聖書の歴史を研究する六ヶ月コースがあるとしてみよう。この際、必然的に次の二つのことが問題になつてくる。その一は、こういう短期間に旧約のすべてをマスターすることはできないということ。その二は、せつかく勉強しても生徒たちは細かなことはたいてい忘れてしまうであろうということである。しかし、そのコースの終わりにおいて、生徒たちが神の御計画、力、み言葉の美しさというようなものを理解し、自分たちの知識の乏しさを知り、知識に対する意欲のもりあがりを覚えるようになるなら、最高の目的を達しているということになるのである。

一般の生徒というものは、いろいろな考え、意欲、衝動に満ち満ちているものである。これらは、分類上、興味の部に入れられるべきものである。これらは、惡、世俗、第二義的なものに用いられる。しかし一方において、これらは神と靈的なもののために用いることが出来るのである。日曜学

校教師の任務は、生徒のこれらの興味を引き出して、それを人生の最高価値のものへと結びつけていくことである。たとえば次のことを考えてみよう。一週五日の間、学生は歴史、地理、科学その他の学課を受ける。その教師たちは自分の授業に人生と興味を注ぎこんでいるのである。日曜日には教会へ出かける。教会で、その学生は無味乾燥で形式的な、命のない福音説教を聞く。その結果はどういうことになるだろうか。結局、その学生は、歴史、地理、科学その他の学課の方に重要性を認めるようになり、宗教はつまらない無意味なものであると決めてしまうであろう。

この例でも明らかのように、教師はただ生徒たちに興味を抱かせるだけではいけない。正しいものごとに對して興味を抱かせなければいけない。その授業時間を興味深いものにするだけではいけない。クラスがその学課そのものに對して興味をもつようにさせなければいけないのである。もし教師が、何か授業に直接関係のないおもしろい話をして聞かせたとしたなら、生徒たちはその話は覚えるであろうが、かんじんのレッスンの方は忘れててしまうにちがいない。とは言つても、いわば非常の場合には、臨機応変、この規則を超越することが必要になるかも知れない。

ウアイグル博士は、

「無軌道で無鉄砲な少年たちや、ひとりよがりでくすくすと笑つてばかりいる少女たちを相手に仕事を始める教師はまず、出来るだけの事をして彼らの心を我が手のうちに收めなければならない。」

ウアイグル博士の言うことの意味は、生徒と授業との接触を図る前に、まず教師は、生徒と自身の接觸を図らなければならないということである。しかし、この臨機応変の規則超越は、「列車のなかにある、衝突、脱線、転覆、大破というような生死にかかる災害の時にだけ用いるハンマー、のこぎり、まさかりのような非常用具である。」

生徒の観点を用いる

主題や活動が興味深くなつてくるのはどういう時であろうか。それはその人のもつ思考や能力などを発表する機会が与えられる時である。故に興味を起こす考え方とは生徒のもつている考え方を訴えていくものである(第二章参照)。その目的とするところは次の二つである。

- 一、真理を理解させる
- 二、真理を受け入れさせる

一、生徒自身の経験から引き出した用語や考え方を利用して学課の提示を行ない、真理を理解させること サー・ジョン・アダムズ氏が説教者について言つたことは、そのまま、また教師にも適用されてよい。

「上手な説教者は、たとえて言えば、講壇に立つていると同時にベンチに腰をかけていることができる人である。その言わんとするところを、聴衆の目を通して見、聴衆の背景に関わらず、自分の考えを訴えなければならないのである。」

全く同様に、教師は生徒の目を通して真理を見なければならない。

「少年の目から見た日曜学校」のあるページに、少年の教室の絵が入れてある。そこには一見厳格な教師が、教案を見ながら腰かけている。教師はその学課に没頭しているが、生徒たちの方はいつも興味をもつていないのでわかる。一人はじれつたそうにふり向いて壁時計を見ている。二人の生徒は何かおもしろそうに自分勝手なおしゃべりをしている。そうかと思うと、むこうの偶には、退屈そうに生あくびをかみしめながら、

「みんな、僕たちのことはわかっちゃいない」

しかし、こういう事態は、次の問題を心にとめて授業を立案する教師には起こらないはずのものである。

は、生徒の頭の中にすでにどんな考えがはいつているのであろうか。」

この原則について、二、三の例を考えていきたい。

神であり教師であられた主イエスご自身から、聞く者の立場から真理を説いて下さった。イエスは、神、人、人間存在などに関する、いと深き諸真理を含むメッセージを携えて来て下さった。ところで、イエスはこれらの真理を、単純無学なガリラヤ人たちに、どのようにして悟らせたのだろうか。それは神のみ国はこのようなものであると、ガリラヤ人たちがすでに知っている事がらになぞらえて語ることによつてであつた。すなわち、

神の国はからし種のようなものである。

神の国は王の婚宴のようなものである。

神の国は魚をとる網を、おろすようなものである。

など、など。

マタイ四・一八一二〇において、主がそのみわざのために、アンデレ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネをお召しになつたときに用いられた方法を考察してみよう。

「あなたがたの職を棄てて私の弟子になりなさい。私はあなたがたを訓練し、人々に利己心と罪を離れ去り、神に仕える正しい命に生きるように人々を説く働きをさせてあげる。」

これが主の言おうとされたところであろう。しかし、主はこうは仰せられなかつた。より端的に、聞く者的心をかきたてるように訴えられた。つまり、これらの人々が漁師であり、現にその仕事の最中であることを「存じの上でこう言われたのである。

「わたしにつけてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」

漁師を伝道の働きに召し出すのに、これ以上 の方法を考えつくことができるであろうか。主はこれらの人々に対する「接点」を知つておられた。そして、この新しい仕事を、四人が今までの生涯の大部分してきた職業に、結びつけられたのである。ペテロは素早く考えたに違ひない。

「人間をとる漁師！」この人の言ふことはこうなんだ。つまり、おれたちは今までみんな、魚をつかまえちゃ、生きてるのを殺していた。ところが、今度はよく、ラビたちが言つていた惡の海（イザヤ五七・一〇）から人をすくいあげて、死から命へと導くことになるんだ。」

だから、主のみ言葉がペテロたちの心を強く動かしたことは、

「彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従つた」ということで明白である。

次の表示された質問は（ルーテル派に属する教育家シュマウク博士の引用による）低学年クラスに対してもむずかしい事がどういうふうに理解させていくかということを示すものである。今、教師は詩篇五一篇のダビデの悔い改めの祈りを話している。

ダビデはまた、神様にお祈りをしているのです。だから、よい人です。ところで、よい人で悪い人なんているでしょうか。」

(一言もなく、「いません」と答える)

「さあ、では、鍛冶屋さんがお仕事から家へ帰って来る。鍛冶屋さんはきれいですか、きれいですか。」

「きれいでない。」

「それでは、その鍛冶屋さんがおふろにはいつて体を洗つて座敷にすわつて、ご飯を食べます。また夕刊を読みます。——まだ、きれいですか。」

「いいえ。」

「今度はきれいですね。」

「ええ、きれいです。」

「すると、その人はきれいな人で、きれいでない人ですね。」

「そうです。」

「きれいでない時にきれいな人、——同じ時にですか。」

「ちがいます。」

「それじゃ、ある時はきれいでなくなり、また、ある時はきれいになるのですか。」

「そうです。」

「そうすると、何がきれいでない人をきれいな人にするんでしょうね。」

「洗うことです。」

「ダビデは神様に自分の心をどうしてくださいとお願ひしたのですか。」

「洗つてください、きれいにしてくださいとお願ひしました。」

「そこで、詩篇にはどう書いてありますか。神さまはダビデの心を洗つてくださつたと書いてありますか。」

(意見対立——「書いてありません」、「書いてあります」)

「よろしい。神さまは自分の思う通りのことがおできになりますか。」

「できます。」

「神さまは人がきれいでない心をもつてていることを望んでいらっしゃると思いますか。」

「いいえ。」

「それでは、神さまはダビデの心をきれいにしてやりたいとお思いになりますか。」

「お思ひになります。」

「それから、神さまは『自分の思う通りのことがおできになるのでしたね。』

「そうすると、ダビデが神さまに心を洗つていただきたいと思うとすぐに、神さまは洗つてくれますか。」

「そうです。」

「神さまがダビデの心を洗うのにどれくらい時間がかかると思いますか。」

（いろいろな答え——「すぐに」、「時間なんかかかるなかつた」、「あつと思う間に」）

「ところで、鍛治屋さんがからだを洗つてくれるには、どれくらいの時間がかかるでしょうか。」

（「五分」、「十分」いろいろ）

「神さまだって、それくらいかかるでしょうね。」

「かかりません。」

「神さまは全然時間を必要となさらないのですか。」

「そうです。」

「すると、ダビデがお祈りをしたとたんに、ダビデは清められて、よい人になつたのですか。」

「ええ、そうです。」

「どうして人々は神さまに洗つてくださいとお願いするのでしょうか。」

（だれも答えない）

「それじゃ、鍛治屋さんはどうしてからだを洗つたのですか。」

「自分できれいでないと思うからです。——ご飯もよごれるとと思うからです。」

「その鍛治屋さんがきれいでないのが好きな人だったら、からだを洗うでしようか。」

「洗いません。」

「水がひとりでにやつて来て、鍛治屋さんを洗つてくれますか。」

「いいえ、そんなことはありません。」

「と、すると、鍛治屋さんはきれいになりたいから、からだを洗うのですね。」

「そうです。」

「鍛治屋さんはよごれたのがきらいだから、からだを洗うのですね。」

「そうです。」

「鍛治屋さんが洗いたいと思えば、すぐに洗えますね。」

「洗えます。」

「ある人の心がよごれています。それは、その人がよごれていることが好きだからですか。」

「そうです。」

「そうすると、その人が心をきれいにしたいと思ったら、すぐきれいにすることができるでしょうか。」

「できます。」

これらの質問によつて靈的清めといつて複雑難解な問題が、生徒たちのよく知つてゐる、からだを洗うということになぞらえながら、はつきりと理解されていつた方法に注目してほしい。

二、生徒たちが自分の必要と感じている事がうちに當てはめることにより、真理を受け入れるようになること ここに、ダニエル書第一章の授業を受けてゐる少年の組があるとしよう。教師はまづ、生徒たちにそのレッスンに対する興味を抱かせなければならぬ。そこで、どういうふうに始める。たらよいのだろうか。肉体の聖別という神学的な話が何の役にもたたないことはわかり切つてゐる。神学はこの程度の生徒の頭では受けつけることができない。しかし、少年たちが体育、スポーツ方面に興味をもつてゐることがわかつてゐるなら、教師はこういうふうに始めていくであらう。「きょうこれから勉強するところは、みなさんにとつて、とてもためになるところです。それは実際の面からいって、金より値うちがあるとも言えるでしよう。人生は競技又は戦争です。そこで勝利を得るには、からだを強くし、健康にして、心を生き生きとさせ、すつきりとさせておかなければなりません。ダニエルはこの事を体験から学びました。それはダニエルは自分のからだについての神様の命令に素直に従つていこうと決心したからです。ダニエルとはどんな人でしようか。それはきょうの授業に出てくる人です。では、これからそのお話をすることにしましよう。」

この項においては生徒の觀点に立つて教えていくことについて述べてきたが、立派な教師になるには、生徒と親しくなることが絶対に必要であることが説明されたにちがいない。
「学ぶ者の頭や心は種をまく人の畠である。自分の畠の土質を知らない農夫はどうてい豊かな収穫を望むことはできない。」
とは、ケイサー女史の言葉である。

自習案内

- 一、生徒の興味を維持するための四つの方法を示せ。
- 二、「注意」という言葉の教育的定義を示せ。
- 三、注意を払っている生徒の態度はどういうものであるか。その注意の集中点はどこか。顔や態度だけでその生徒が注意しているかどうかを決めるとの可否を示せ。
- 四、二種類の注意をあげよ。
- 五、教育的観点からみて、いずれの注意が、よりよきものであるか。
- 六、生徒が教師に注意を向いていないのに授業を進めることができるか。
- 七、生徒が教師に注意を向いていないのに授業を進めていくことの弊害を示せ。
- 八、興味は、教育的目的か、それとも手段か。

キリストの愛をもつて臨めば、生徒の興味を捕えることができる

実質上、本章は前章「クラスの緊張の持続」の続きに相当する。「教師の緊張の持続」というこの表題は、クラスの態度というものは教師の態度の反映そのものであるということを示したいために、選んだのである。

教師の態度に関する次の四項目を保ち続けるならば、教師は、それが生徒の興味を捕えるのに大きな役割りを果たしてくれるということに気がつくはずである。

- 一、熱心な関心をもつこと
- 二、準備を徹底的にすること

参考聖句 コ林ント人への第一の手紙第一三章、詩篇第三九篇三節

第八章 教師の緊張の持続

- 九、日曜学校教師が興味のない授業をするとき、一般学校教師との関係において、いかなることが起ころか。
- 一〇、生徒の観点に立つて教えることの一いつ目的を示せ。
- 一一、イエスはアンデレとペテロとを、漁師の観点に立つてお召しになつた。これについて述べよ。
- 一二、シュマウク博士は詩篇第五一篇を低学年のクラスにおいて話した。このことを考え、この方法をほかの章節に応用してみること。
- 一三、いかにして真理を生徒に受け入れさせるか。また、それを実生活に当てはめさせるか。
- 一四、授業の成果をあげるにはどうしたらよいか。ケイサー女史の言葉を考えよ。

三、絶えず気を配ること

四、キリストの愛をもつこと

一、熱心な関心をもつこと

ある説教者がヘンリー・ウォード・ビーチャー氏に、

「真夏の日曜の午後、暑い最中の集会ではよく居眠りをする人があるのですが、居眠りをさせないでおくにはどうしたらよいでしょうか？」

と聞いた。

これに対するビーチャー氏の返事は、

「先生、そりやあ、先のとがつた長い棒とピカピカ光つた針を手に入れて、ご自分を刺すことですか？」

と、いうことであった。

ビーチャー氏のこの言葉は意味深長である。デイール・カーネギー博士は次のように言っている。

「講演をするに当たり、聴衆の態度を決めるものは常に講演者である。聴衆は講演者の手中にある。講演が気取つてわざとらしい感傷を示せば、聴衆も気取つてわざとらしい感傷に落ちていく。

講師が差し控えた気分になるなら、聴衆も差し控えた気分になる。講師が強い関心をもたなければ、

聴衆も強い関心をもたない。しかし、もし講師がその語るところに熱情をこめ、腹の底からつきあげてくる感情をもつて、力強く、人々を感化せずにおかない確信をもつてその所信を述べるならば、

程度の差こそあれ、聴衆はどうしても講師の精神をつかまづにはいられないであろうと思う。」

また、故 F・B・マイヤー氏が、

「もし会衆が興味を失つて、だらけていることに気がつくと、わたしはわたし自身を大砲に込めて、その会衆に向かつてズドンと一発ぶつ放すのである。」

と、言つたのは、氏の胸中にまさに、この真理が横たわっていたからにちがいないのである。

これはすべて、教師として成果をあげるために、話しじょうずになれということであるが、しかし、ここにいう話しじょうずとは、いわゆる立板に水というような雄弁家をしているのではなく、むしろそれは、真心から真理がそのまま流れ出てくる雄弁という意味である。この場合にも、説教について言われたことは日曜学校の授業にも適用される。

「説教する者が楽しくできる説教、その説教から聞く者の実生活によき実りを結んでいく説教は、説教する者の奥底からにじみ出でてくる説教である。その説教は説教者の骨の骨、肉の肉であり、精神的労作の生んだ子、創造力の所産である。命に満ち、神を賛美し躍動する説教、人々の心にはいり、その人を翼あるワシのように天に昇らせ、義務の数々を行なわせて、なお疲れることのないようになせる説教、——こういう真の説教は、實に、説教する者の命をかけた生命力から生まれ出で

くるのである。」

ここに真剣な心がまえといふものが必要になつてくる。そしてその心がまえをつくる確実な道がある。それは祈るということである。その授業の要約を神のみ前にささげ、そのすべての項目、細目について祈り、問題点をあれこれと神に問い合わせ、聖靈のみ助けを求める。その主要な事がらの一つ一つが心に焼きつくように祈り、レッスン全体にわたつて友だちと論じ合うように神に語りかけていくのである。こうしてはじめて、詩篇作者が詩篇三九・三に言つている次の句の、眞の意味を理解することができるるのである。

「わたしの心はわたしのうちに熱し、思いつづけるほどに火が燃えたので、わたしは舌をもつて語つた。」

要するに、ここでは教師がレッスンをしつかりとつかみ、レッスンが教師をしつかりとつかむなら、レッスンが生徒たちをつかむようにすることは格別むずかしいことではなくなるのである。

二、準備を徹底的にすること

ドワイト・L・ムーディーはかつて恩寵おんめいというテーマについて徹底的研究に没頭したことがあつた。そのとき、ムーディーは、この問題にしつかり夢中になつてしまつて、帽子をつかんで往来に飛び出すやいなや、いきなりそこを通りがかつた人をつかまえて、

「恩寵」ということを、あなた、ご存じですか」と、質問を浴びせかけたほどであつた。

いく千万の人々が、この神の人の説教に感動させられたのは当然の話である。教師といふものは、ともすると、自分の知つてゐるありきたりの知識に頼ろうとする。そうでなければ、前に一度同じところを教えたという事実に頼ろうとするものである。しかし、思慮ある教師であるならば、こういう誘惑には負けないはずである。たとい、つい一、二ヵ月前に全く同じレッスンについて、詳細にしらべたことがあつたとしても、ここにまたそれを教えることになるならば、心をつくしてそれを研究し、祈り、「もう一度新しく生まれた」レッスンとしてでなければ、クラスに臨もうとはしない態度こそ望ましい。

教師は実際に教室で使う以上の材料を集めなければならない。ちよつと考へるとむだな労力のように思われるが、材料についてこういう余力を貯えておくことは、話をしていくその一語一語に一種の力を与え、教師自身の自信をも強める働きをする。この「準備の上の準備」の必要性は三重の意味をもつてゐる。

と、わざわざヨーロッパまで出向いて、大西洋海底電線の本線經營会社の支配人に面会した。大英博物館を訪ねて、そこに陳列してある海底電線の全般にわたって、研究した。それから、海底電線に関する歴史の本を数冊読んだ。その上、電線を製作する工場の見学にさえ行つた。こうして、女史は抱えきれないほどの材料を手に入れた。どうして女史はそのとき必要な材料の十倍に当たるほどたくさんの材料を集めただろうか。女史はこれら余分の材料はこれから書いていく一語一句に力を与えてくれる、それはちょうど大きな水槽に水を溜めるようなもので、水の量が多ければ多いほどその水圧は高くなり、じや口からほとばしり出る水の勢いは激しくなる、ということを知つていたのである。普通の教師はその授業にいちいち、このような研究をしていくことができないのはもちろんであるが、この原則の上に立とうという理解だけはもつてほしいものである。

教師自らのために 今ここに、一団の人々を食事に招いたとしよう。そのとき、ごちそうが充分かどうかということがはつきりしないとしたら、招待した人の気持ちはどんなであろうか。特に、その席に招かれた人たちが食欲盛んな人たちであつたなら、とてもじつとしてはいられないにちがない。全く気楽でいられるのは、すべてがあり余るほどあるということがわかっている時だけである。真理に対して食欲の旺盛な生徒たちの前に立つて教師が自信をもつことのできる何よりの方法は、よく調理した靈的ごちそうをふんだんに携えて立つことである。

生徒たちのために 本項に関してはパーマー教授の言葉に聞こう。

「講義の下調べをするとき、わたしはいつも講義しない部分に一番力を入れていることに気がついた。講義で言おうと決めてあることは簡単にかたづけられる。そういう部分ははつきりしていて手に入れやすい。しかし、わたしは、それだけでは充分でないことを知った。講義の上には現われてこない広い背景の知識をつかまなければならない。わたしはわたしの講義のテーマ全般にわたつて目をくばり、その言おうとするところが言わないでおこうとするところとどういう関係になつているかということを、あらゆる角度からたどつてみる。そんなことをして、何の役にたつか、なぜ、使いもしないよけいなことを調べるのか、とある人は言うかも知れない。しかし、教師らしい教師なら、だれでも知っている。頭の中にあることを手いっぱい教えていくことには、いつやり損うかという心配がしじゅうついて回るのである。わたしのこの心配はたちまち生徒の感づくところとなり、わたしの講義は無力なものとなつてしまつ。生徒たちはわたしの言わないことの力を感じる。影響力はかえつて無言の言葉にあるのである。はつきりと説明することはできないが、わたしが自分の講義のテーマの上を自由自在に動きまわり、何を依り所にするかというようなことは問題にしないでやつていくとき、生徒たちはしつかりとした力を感じ、それが力強く実を結ばせていくのである。」

徹底的に準備するということには、また、副次的な利益がある。それは、ただ単に読んだり聞いたり、

たりしているだけでは、とうていつかむことのできない神のみ言葉を、しっかりと手に入れることができることである。こうして教師のだれでもが言う、

「学ぶことの一番よい方法は教えることである。」

という言葉の真意を、経験を通して会得するに至るのである。

三、絶えず気を配ること

有名なある伝道師が、大きなテントのなかで会衆に説教をしていた。始め、それは「各々その信仰を堅くせよ」という説教であった。ところが、突然その伝道師は、メッセージの調子を変えて、人々の心にぐつと迫る話をして会衆の涙をそそつた。どうして彼はテーマを変えたのか。大衆の前に立つ、経験豊かな講師としてその伝道師は、はじめの説教が聴衆一般の心を捕えることができず、その注意を失いかけてきていることを見て取つたからである。会衆の注意を度外視した説教の無意味さに気がついたので、ふたたび注意を集めるために、故意に主題を変えたのである。この伝道師はじつとその会衆を見守つていたので、この変転を行なうことができた。

これと同じように教師は常に生徒たちの態度によく注意していなければならない。眠そうな目つき、うんざりした顔つきなどによって興味のあせてきた気配を感じたときには、教師はすぐさま、何か注意回復のために手を打たなければならぬのである。その方法はいろいろあるであろう。た

とえば、黒板の方へ歩み寄つて何かを書きはじめるとか、お話をするとか、例話を語るとか、意味の深い質問をするとかしたら良い。

四、キリストの愛を持つこと

真理のうちには、それがあまりにも真理であるがために、全くあたりまえのこととされ、そのまま全面的に信じられているものがある。そういう真理は、しばしば、人の心のうちに入り込んだり、ぐつすりと眠りこけてしまつていることがある。愛の義務はその一つである。しかし、愛は常に起き立てられ、行為に移されなければならない。特に教師と生徒との関係においては、あらゆる力のうち、愛こそはお互いの間をつなぎ合わせる唯一のかけ橋であり、故にその授業にとつても、愛に代わり得る力は何一つないのである。教師が心からの同情と関心をもつて接するならば、生徒はたちまちそれを知り、応答してくれるであろう。俗に、「人間というものは、口先の話か、心からの話か、いつべんでも見抜いてしまう」と言われている通りである。

心と心とを結び合わせる愛の心がないならば、授業はやかましい鐘や騒がしいシンバルのようになってしまう。クラスの一人一人の名を呼んで神に祈り、その一人一人の必要に応じて助けてあげるそれ相当の知恵を与えたまえと願うとき、クリスチヤンとしての愛と献身という黄金のくさりに

よって、教師と生徒とは常に離れることなく暖かくつなぎとめられるのである。

本章ならびに前章においては、生徒の興味を促すための原則について述べてきた。これに続く以下二章では、これらの原則を実地に移していくに当たつての実際的方法について、次の三項目にわかつて考えてみることにしよう。

- 1、たとえ話を使う
- 2、黒板および实物を使う
- 3、お話を聞かせる

自習案内

- 一、教師の熱烈な愛は、生徒の興味をひき起こす原動力である。これを知るために、本章をもう一度、精読すること。
- 二、講師の態度と聴衆の態度との関係を考察せよ。
- 三、真の雄弁に必要なものは何か。
- 四、日曜学校教師が心の準備をするためのまちがいのない方法は何か。
- 五、日曜学校教師は、授業の都度、何度も新規に準備しなければならない。その理由は。
- 六、授業時間に必要以上の準備をすることの結果について記せ。

- 七、徹底的に、充分な準備をすることによって、教師自身の、神のみ言葉についての知識はどういうふうになるであろうか。
- 八、授業中、なぜ、生徒の態度に気を配らなければならぬか。こうすることによって、来たるべきものに対応しようとするととき、事前の準備なくしてこれが行なわれるであろうか。
- 九、授業中、生徒が注意を失いかけていることに気がついたら、どうしたらよいか。
- 一〇、教師と生徒とを結びつける一番強いかけ橋は何か。
- 一一、授業の成果をあげるために、教師はいかに祈るべきか。

第九章 意味をはつきりと

参照聖句 ハバクク書第二章二節、マタイによる福音書第一三章三四節

意味のはつきりしたたとえ話は、必要不可欠なものである。

レッスンの内容をはつきりとわかりやすくするためにたとえ話を用いるが、このたとえ話の**重要性**はいくら高く評価してもしそぎるということはない。窓や照明が建物で果たしている役割りをたとえ話が授業で果たすのである。中国に、

「百聞不如一見」

ということわざがある。

そこで、教師がその授業に成果をあげようとするならば、生徒たちの耳を目に変えて、その話していることを見るようにさせることができ肝心である。たとえば次の文章を比較してみよう。



たとえ話の重要性

(一) 「もし罪に落ちたなら、そのままほうつておくことは愚かしいことです。すぐ神さまのみ前にひざまずいて、許していただきましょう。」

(二) 「ある人が道を歩いていて足を踏みはずして、どろだらけのどぶの中へころがり落ちました。ところが、その人は起きあがろうとはしないで、どろんこのなかにのびたつきり、ぶつぶつ言つてゐるのです。ころんじやつた、きたない、きたない、と言つてゐるのです。こんな人がいたら、みなさんはばかだなあ、と思うでしようね。りこうな人ならすぐに飛び起きてはいあがり、どろんこを落として、大急ぎで家へ帰つておふろにはりますね。そうして、服を着換えます。羊と豚にはたいへんな違いがあるのです。羊はどろの中へ落ちると、すぐにメエーと鳴く。けれども、豚はどろんこの中に寝ころがつて、ごろごろところがり回るのです。そこで、わたしたちの問題になりますが、わたしたちはイエスさまの羊です。イエスさまの羊だつて、自分が弱いために、又は誘惑に負けて罪というどろんこの中へ落ちます。そんな時には、いつまでもどろの中にいようとしないでしよう。又ぐずぐずと、どろの中にいてはいけません。」

(一) のやり方では、生徒は真理をただ聞くだけであるが、(二) のやり方では、見るのである。この二つを比較するとき、(二) のやり方は木に銃弾をうち込んだようなもので、その情景は生徒たちの頭の奥深くとめられ、(一) のやり方をする場合よりも容易に、その記憶に残るのである。この理を知るならば、教師たる者は、目に描き出す話術というものを身につけるように心がけるべきで

ある。ある著者は、完全なものを改良しようとすることはむだであるということを表現するために、「純金に鍍^{ハサフ}金をする、百合に絵の具を塗る、すみれに香水をかける」というふうなことを言った。

こうして、この作家はその言わんとするところを読者の目に見せたのである。

キリストの教えのうちにたとえ話がどのような立場をしめているかということを知るならば、たとえ話の重要性はいつそう強調されることになる。キリストはたとえ話を用いて、天国はこのようなものであると言われた。

「泣き悲しむ者、喜び踊る者、富める者と貧しき者、飢えかわく者、子供の遊びと政治、集めることと散らすこと、家を離れること、旅宿の枕、婚礼、葬式、豪華な生活と死後の墓、種まく人と刈り入れる人、収穫期のぶどう園主、市場の労働者、羊を探す羊飼い、海の真珠商人、粉やパン種を捜しまわる女、なくしたお金、意地の悪い役人、腐つてしまふ地上の食べ物、などなど、——主の語られたこれらたとえ話は、目に見える絵となつて、子供のように単純な頭の人たちにも、わかりやすく生き生きと身近なものとして受け入れられたのである。」

そこで、このたとえ話の正しい用い方について、二、三の原則を考えることにしよう。

説明

をする説明は説明ではない。このことは、たとえ話においても同様である。たとえ話をする目的は、ぼんやりしていてわかりにくいと思われるところを、聞く人々にはつきりとさせることである。それだから、もしもそのたとえ話がはつきりしないものであるならば、聞き手の混迷は倍加する。あらう人が子供の集まりで、こんなことを言つた。

「わたしはこれから、希望ということについてお話をしたいと思います。ここにいる女の子たちみんなおうちへ帰つたら、おかあさんに、希望とはどんなものかお話出来るようになりますよ。さてそこで、みなさん、この会場のうしろにきれいな小川が流れていますね。このきれいな小川の水は酸素と水素という二つの元素から成りたっています。それと同じように、希望というものも願いと期待という二つのもので成りたっているのですよ」

この話し手は、その主題に光を投げかけてそれをはつきりさせる代わりに、かえつて、子供たちを深い暗いやみの中へと追い込んでしまつてゐる。というのは、「元素」「水素」「酸素」「期待」というような言葉の意味を理解することができない聞き手が果たしていく人いただらうか。

二、たとえ話はすでに生徒の体験しているものに訴えるものでなければならない 教師の心に訴えるたとえ話が必ずしも生徒たちの心に訴えるものとは限らない。ある時、「ぶどうの木をだいなしにした子ぎつねたち」というテキストで、子供たちにお話をした人がある。その人はちよつとした

悪徳、弱点が人格を傷つけるということを説明したかったのである。一見このたとえ話は、その意図するところを明確に説明するために適切であるようにみえる。しかし、それをよく検討すると、いろいろなことが出てくる。聞き手のうち、実際にきつねを見たことのある子供がいく人あるであろうか。見たことはあっても、きつねの生態、性質についてどの程度までの知識をもつてゐるであろうか。ぶどう畑を見たことのある子供は何人いるであろうか。その上、実際問題として、その子供たちはきつねがぶどう畑をだいなしにしてしまう事実や、そういう話の種がある、いなかには住んでいなかつたのである。それで、このたとえ話は生徒の心に触れるという点で失敗だったのである。

この際、もしこの話し手がちよつと腐りきずのあるりんごとナイフとを持つて現われて、それを子供たちに見せ、この腐ったところを切つて捨ててしまわないと腐れがりんご全体にひろがつてしまふと説明したら（一方に腐っているりんごを提示してみせながら）、この説教を心に打ち込むことが出来たにちがいない。子供たちはだれでも、がぶりとりんごにかぶりついて、いたんだところがまづいということを知つてゐる。こういうたとえ話は聞き手の経験する事柄の範囲内にあることである。

ここにこんな例がある。ある宣教師のグループで聖書をアフリカの一民族の言葉に翻訳していた時のこと、

「たといあなたがたの罪は縛のようであつても、雪のように白くなるのだ」というところへきた。

これを字句の通りに訳していくと、雪というものを見たことのないその種族にとつては全く意味のないものとなってしまう。またその土着語には雪という言葉がなかつた。しかし、この地方ではココナツツが盛んに食用せられ、その実の白さならだれでも知らないものはなかつた。そこで、宣教師たちは、

「たといあなたがたの罪は縛のようであつても、ココナツツの実のように白くなるのだ」というふうに訳したのである。

この翻訳は一般には少し変に響くかもしないが、しかし、それはこの種族の経験のうちに真理を持ち込んだということになるのである。

三、たとえ話はレッスンと実質的つながりをもたなければならない　たとえ話は重要なものであるが、しかし、ただ単なるレッスンの飾りとして、むりやりにそれを持ち出したり、押しつけたりすべきものではない。たとえ話は、それ自体が目的ではないのである。それは、あくまでも、ただ授業を理解に導くための補助手段である。たとえ話というものはいわば眼鏡のようなもので、それを通して物を見るので、それそのものを見るのではない。それゆえ、たとえ話を使うときには、

教師はまず、

「それが必要であるか」

「それが当てはまるか」

「それが適当であるか」

ということを自問自答してみる必要がある。

それはスポットライトのように何かを照らし出すものであつて、ネオンサインのように飾りとして見せるものではない。

四、たとえ話は余りたくさん出すべきではない　窓のない家は暗くてやりきれないが、窓ばかりの家も貧弱極まるものである。一つの点を説明するのに、五つも六つもたとえ話を持ち出すならば、生徒の頭は混乱してしまうにちがいない。

体にさらされているということに比較されている。このたとえ話は、二つの理由から、不適当と思われる。第一に、聖靈のみ力やご性質は病氣と比較して説明されるべきではない。第二に、こういうたとえ話のもつ卑俗さは聞く者に敬虔の念を起こさない。これはつまり、献身の念よりもくすぐす笑いを催させるようなたとえ話である。

この問題をほかの観点からみて、マリオン・ローレンスはこう言っている。

「著作家というものは、公開の席上で話をするとき、しじゅう気をつけて、聞く人々に悪感情を抱いて帰らせるようになる話や例話を全く用いないようにしてきた。ということは、どもりの人たちの話、せむし、みづくち、奇型足など、かたわらの人を引き合いに出しての話は絶対にしてはならないと言うことである。もし、ある人が、自分のかたわのからだを思い出させるような、あんなことを言わなくたつてあの話はできたのに、と、反感をもちながら席を立つて行くようなことがあつたなら、その話し手は不親切で、クリスチヤンらしくないと言うべきである。」

六、悪い考えに火をつけるようなたとえ話はしてはならない この事についてウアイグル博士の著書から一例をあげよう。

「ある日曜学校で、ある教師が、小さい時につけられた習慣というものは恐ろしいものであるといふことを話していた。それをはつきりとさせるために、その教師は一段と声を張りあげて、こう

言った。

『みなさん、この辺では道路にコンクリートを敷きますか。』
『はい敷きます。』

生徒たちはそう答えて、一せいに教師を見あげた。

『それでは、みなさんはこういうことを知っていますか。そのコンクリートがまだやわらかい間に、先のとがった棒を持って来て、その上に名前を書くと、その名前はその道路のある限り永久に消えずにそこに残っています。——あ、しかし、みなさんは……』

生徒たちが意味深い顔をした瞬間、その教師はあわてて言い足した。

『あ、しかし、みなさんは……もちろんそんなことはしません。そんなことをする人は一人もいませんね。』

しかし、それはもうおそかつた。その教師が目に描いてみせたものは、すでにその力を發揮してしまっていた。その辺一帯に一つの流行、自分の筆跡を残し伝えていくという流行がこれをきつかけにはじまることになつたのである。』

たとえ話を真理にどういうふうに結びつけたらよいであろうか

たとえ話を真理に結びつけるやり方に二つある。

その一、まずたとえ話をして、それを真理に結びつける。たとえば、次のようにするのである。

たとえ話 マラソン選手が、すっかり息が切れて、心臓が破裂しそうになり、疲れて力が尽き果ててしまつて、もうだめだと思つているとき、突然何かがドカンと起ころ。そうすると、急に新しい力が流れ込んでくるように感じ、疲労は消え去つて、スタートした時と同じように元気よく走り続けることができるという。この現象は一般に「盛り返し」と言われているものである。

結びつけ 前掲のたとえ話は、預言者イザヤが言つた、

「主を待ち望む者は新たな力を得る」

という意味を理解する助けとなる。靈的コースを走つてゐる信仰の人が、力尽き果てて「もうやめよう」と感じるような時がある。そんな時には、しっかりと神によりすがり続け、もし神を待ち望むなら靈の「盛り返し」を受けることができるるのである。

その二、まず真理を話して、たとえ話を結びつける。次のようにするのである。

真理 祈りが靈の世界に働きかけて、祈る人の魂を感動させ、意志を強くし、その人を神との交わりに導き入れるということはだれでも知つてゐる。しかし、ある人々はその祈りがまた、物質界にも働きかけて、いろいろの境遇、状態を変化させ、ものごとを処理していくということを知らない。

たとえ話 今はむかし、ジョージ・ミュラーという人が英國で孤児院を始めた。やがて、そこに

は一万人以上の孤児が収容されるようになった。その孤児院の経費に当ててくれるようになると何百万ドルもの金が送られてきた。しかし驚いたことに資金の援助を公に要請したことは一度もないのです。これをどう考えたらよいであろうか。たつた一つ、ジョージ・ミュラーの信仰の祈りということである。

聞き手の好奇心をそそり、その興味をひきつけていくように例話を語るのは良い方法である。そうすることによつて、真理を受け入れやすい活発な心理状態におくことができるのだ。仮に今、教師が、「わたしは、ある日、エルサレムのクリスチヤン通りを歩いていました。すると、向こうから一人の男がやってきました。着ている服といつたら、目もくらむばかりの、この地方の貴族か王さまの着るような立派な服で、腰には、マホメットの預言者の子孫だけがつける、ぐつと反りのついた黄金の太刀をつけていました。ところがその人はアラビア人の顔をしていません。その人の目は青いのです。アラビア人の目は黒か茶色なのです……」
というふうに話していくとする。

これは好奇心を起こすだろうか。その先を聞きたいという気持を起こさせるだろうか。こういう話し方によつて、次第に興味を失いつつある生徒の耳を、はつとそばだたせることができるのではないだろうか。

「たとえ話は、クリスマス・プレゼントの包みを家であけるときのようになつて、学校や教室であけるべき

きである。ひもがしっかりと結んであればあるほど、期待はふくれあがる。その箱の外形から、中には何がはいつているか見当のつかないときは特にそうである。」
というのは本当のことである。

たとえ話はどこから手に入れたらよいであろうか

一番良いたとえ話は、教師の経験、観察から得たものである。たとえば、

「この聖句を読む度に、わたしはカリフォルニヤのさばくで出会った、髪の毛の逆立つような恐ろしいことを思い出します……」

とか、

「きのうの朝、仕事に行く途中、わたしはついぞ見たこともない、不思議なりさまにぶつかりました……」

という話を聞いて、眠ってしまうようなクラスはないはずである。

自分で経験したり目撃したりした事がからは、興味を起こさずにはおかないと特別な力と権威をもつて話すことができるのである。

日曜学校の教案には、たくさんたとえ話が書いてある。しかし、自分で余分に集めたたとえ話をまた、大切にとつておくべきである。教室の興味が失われかけたときにそれを回復するには、良い

話をして聞かせるよりほかによい手段はないのである。役に立つたたとえ話の本はたくさんある。しかし、また、そういう本などはあまり役に立たないという人々のいることもほんとうである。しかし研究のしようによつては、それらの本の効用も大きなものである。

ちょっと別問題になるが、下調べをするに際し、ノートをどういうふうに使つたらよいであろうかという人があるかも知れない。新しい教案を手にしたとき、時間をきいて、全課程にわたつて目を通す。そうして、それを頭の中で整理整頓し、その教案全体に流れる思潮をつかんでおく。そうしておけば、適当なたとえ話を見つけ出す準備が出来る。教師は町を歩いているとき、ふと第五課にちょうど良いすばらしいたとえ話にぶつかるかもしれない。教師はノート（余り高価でないルーズ・リーフの方が良い）を取り出し、その第一ページに第五課と書く。それから、そこに使いたいと思う事件に心を打たれる。そこで、ノートを取り出して、ほかのページの頭に第六課と書く。そして、新聞を切り抜いて、ピンで、そこへそれをとめるのである。それからまた、通勤の途上、電車の中で、ひょいと何か昔のことを思い出す。それが第十一課に適当なように思われる。そこで、それをあり合わせの紙きれに書きとめておいて、家へ帰つたらさつそくノートに清書する。

以上はすべて教師を編集者になぞらえて、頭のきく教師は、油断のない編集者が常に取材に余念ないように、その教材の採集にじゅう心がけているということを言いたかつたのである。こうし

第十章 視覚を用いる

イエスは教えるために、目の門（視覚）を用いられた

知識の八五パーセントは目からはいると言っている。日本に、

「論より証拠」

ということわざがある。

最も印象的な教え方、効果的な教え方とは、真理を目の門を通して頭や心に運び入れる教え方である。どこの国へ行つても、実物や絵画は、老若を問わず、注意をひきつけ、興味をもたせ、ものごとをはつきりとさせる言葉の代わりをするのである。であるから、目を通して行なわれるこの教え方は、特に子供たちに靈的真理を植えつけるのに必要不可欠なものであることは言うまでもない。

自習案内

- 一、本章の表題をほかの言葉で言い表わせ。
- 二、悔い改めを教える目的のたとえ話を一つ示せ。
- 三、主イエスがその教えに用いられたたとえ話を二、三あげよ。
- 四、たとえ話を使うときの五つの条件をあげよ。
- 五、たとえ話を真理に結びつけるやり方に二通りある。そのおののをあげ、また、そのおのの手順を示せ。
- 六、たとえ話はどこから手に入れたらよいであろうか。その三つを示せ。
- 七、教師がノートを保存し、これを使うことについて、その価値を示せ。

一度「ファイリング」の習慣がつくと、それがやがてその教師の授業を実質的に豊富なものとしていくのである。

参照聖句 マタイによる福音書第六章二五一三三節

聖書の真理を教えるのに目を通して行なうやり方はいろいろとあるが、今ここでは、そのうちの二つを考えることにしよう。

一、黒板書き

二、実物の使用

一、黒板書き（ホワイトボード）

次のような経験に対し、なるほどと思う人は案外たくさんいるかもしない。

「わたしは、自分の教えようすることにちっとも気のない子供たちと、毎週毎週戦つていかなけばなりませんでした。そのクラスにはかなりの生徒がはいっていましたが、生徒たちはみんな率直に言つて退屈しきつていて、しじゅうもぞもぞ動いたり、くすくす笑つたり、何かを書いた紙きれを手から手へと渡してまわすというようなことでもしなければ、目を開けてはいられないといふうでした。まる一年というもの、そういう拷問がつづいて、わたしにとっては、日曜日は恐ろしい日になつていました。どんなおもしろいことをやつてみても、どんな遊戯をやつてみても、聖書のお話に興味を持たせ、保ち続けることができないのでした。ところが、偶然みたいなことからですが、わたしは黒板にへたな地図を書いてみようと思いつきました。それはとてもへたな地図でした。はじめは特にへたでした。わたしは授業をしながら急いでそれを書いてその授業とにら

み合わせて、あちらこちらへ小さな丘や木や矢印などをごたごたと書き入れていきました。すると、不思議なことに、そのへんてこな間違いだらけのようなものが、かえつて子供たちの興味をそそつたようでした。

また、

「とにかくどうしても、わたしはこの男の子たちの注意を引くことが出来ない。」

と、こぼしていたある教師が校長に、教室で鉛筆と紙とを使ってみたら、という助言を受けた。その教師は言われた通りにやつてみたあとで、興奮した面持ちでこういう報告をしていました。

「生徒たちの興味をひきつけるのに、わたしはちつとも困りませんでした。この方法はすばらしいです。また今度、やってみるつもりです。」

これと同じようなあかしはいくらもあるにちがいないが、黒板が教師にとつて価値ある助けの一つであるという証明はこれで充分だろうと思う。

では、黒板はどのように使用したらよいのだろうか。生徒たちが教室にはいつて来る前に学課の要旨や図解などをいっぱい黒板に書いておいたら、よいのだろうか。ところが、こんなことをしたなら、その意図するところとは反対の結果を招いてしまう。それには理由が二つある。その一つは、生徒たちは黒板に書かれているものをあれこれとしらべるのに忙しくて、教師の言うことなどはほとんどその耳に入れないということである。もう一つは、せつかく好奇心に訴えていこうというこ

の方法が、こういう準備のために、かえつて、その新鮮味や不意討ちの驚きを取り除いてしまうということである。黒板を使うに当たっては、常に自由に、自然にして、真理を語りながら図解するようにならるべきである。たとえば、イエスがサマリヤの女と会われたところを教えていようとしよう。教師はまず、「しかし、イエスはサマリヤを通過しなければならなかつた。」

と、テキストを読む。

それから、黒板の方へ歩いて行って、ゆっくり話しながら、書いていく。

「ユダヤ人はサマリヤ人に對してとても偏見をもつて毛ぎらいをしていました（と言ひながら、手早く大まかにパレスチナの地図を書く。それをユダヤ、サマリヤ、ガリラヤと区分して、名を書き入れる）。それは、むかしむかし、ユダヤ人とサマリヤ人とがけんかをしたことがあるからです。それで、ユダヤ人はだれもサマリヤ（とさして）を通らないのです。そこをよけて、遠まわりをして行くのです。ところが、イエスさまには偏見とか毛ぎらいとかいうものがなかつたのです。イエスさまの目からは、人はみんな同じに見えました。それでイエスさまはエルサレム（書いて）をお出かけになつて、ユダヤ人がきたない国、けがれた国と思つているこのサマリヤを通つて（さして）いらっしゃつたのです。」

このやり方がそのレッスンを理解する上に、どんなに価値があるかということを考えなければならない。生徒たちは真理を、耳で聞きながら同時に目で見ていくのである。また、教師が話をしな

がら図解していくことは、絶えず何か新しいことが起こつてくるので、生徒たちにとつては興味しんしんたるものがあるわけである。

もう一つの例として、今教師は、簡単な、しかも容易に人の心を捕えるようなアウトラインを話そうとしているとする。そうして、こう言う。

「さあ、みなさん、イエスさまのお話になつた金持ちの農夫のこと（ルカ一二・一三一一二）ですが、この農夫は、わたしがみなさんに決してしてもらいたくない間違いを二つしました。こつちを見ていてくださいよ。今、それを黒板に書きますから。」

そこで生徒たちの目を一斉に黒板に引きつけて教師は書いていく。

一、自分自身を神とした

二、肉体を魂と同じだと思った

三、すべては永遠につづくと考えた

こういうふうにすれば、ごたごたと説明するよりも生徒たちは興味深く、また、よく覚えるであろう。それから、こうしておけば、この三つの点を開いていくにしても、しじゅうこの黒板の文字をさして話していくので、生徒の興味をつないでいくことが容易になる。事実、黒板に書くといふことは、興味を抱かせるために非常に力のあることである。人は、話しながらおもむろに黒板に近づき、チョークを手にしてそこに立つだけで、聴衆の注意をつかみ取ることができる、とある

作家は言っている。

黒板を使うやり方を、もう一つ書こう。教師は、

「それから、イエスは宮にはいられた。そして、宮の庭で売り買いしていた人々をみな追い出し、また両替人の台や、はとを売る者の腰掛をくつがえされた。そして彼らに言われた。」

と、読む。それから、続けて、

「さて、みなさん、これから聖地行きの急行列車に乗って、エルサレムの神殿を見に行くことにしましよう。ここに一つ大きな建物があると思ってください。その高さは約三十三メートル、広さは三百メートル平方で、全部まつ白な石で出来ています。そしてところどころに高さ二十メートルもあるピカピカ光った真ちゅうの門が幾つか立っています。あるところには金や宝石がちりばめています。ちょうど今、太陽がきらきらと輝いて、丘の上のこの神殿を照らしています。なんとすばらしい姿でしょう。ところが、一方神殿の中を見ますと、そこにはいろんなものを売る出店がならんでいて、思い思いにわあわあと叫び声をあげて、神聖なところをみにく所にしているのです。イエスさまがそういうありますまをごらんになったのはどこの部分か、黒板にちょっと見取り図を書いてみましょう。これが神殿です（大きな四角を書く）。この線の中が神殿になるのですが、庭も書きましょう。ここにもう一本こういうふうに線を書きます。これが異邦人の庭の境。異邦人はこれから先へ行くことができません。もう一つ、この部分は女の庭です。女の人はこれ以上はいつてなどと話していくのである。

行くことができませんでした。それから、ここはイスラエルの男の庭です。もう一つ、そのむこうの奥に（書き続ける）祭司の庭があるのです。ここには犠牲いけにえをささげる大きな祭壇や何かがあります。そこで、みなさん、両替屋や物を売る人たちが店を出していったところはここです（×印をつけて）。異邦人の庭でした。勝手を良く知らない人々にずい分良い見本を示していたものですね。」

黒板は、レッスンを心に打ち込む役を果たす言葉を書くのに用いることができる。黒板はまた、新しい言葉や、むずかしい言葉の意味を説明するときに役立つ。たとえば、

「みなさん、生まれ変わりという意味は知っていますね。これをもつとむずかしい言葉で言うことがあります。（黒板の方へ歩みよつて）そう、教会の先生が使うかも知れないし、何か本で読むかもしれませんから、きょうは、ここではつきりと覚えることにしましょう。それは、こういう言葉です。」

と言ひながら、新生と書く。

以上はほんの一、二例にしかすぎない。実際に黒板の用途というものは無限といつてもよいくらいである。それでは、どの程度に使つたなら、よいであろうか。これは愚問というものである。で生きるだけしばしば使えばよいのである。それは、レッスンを目で見ることができればできるほど、生徒の興味は増大し、記憶持続に役立つからである。

実物を使うことには二重の価値がある。一つは感覚に訴えて興味をひき起こすという実際的価値であり、他の一つは教室でその時に扱われている事がらを、よりいつそう真実なものとするという教育的価値である。また、実物には二種別がある。一つは実在するものを示すもので、もう一つは靈的真理を象徴、示唆するものである。

象徴的な実物について以下、数件にわたつて説明を試みたい。

一、教師は今、一致ということの重要性を生徒たちに植えつけたいと意図している。そこで、教室へ一束の棒を持って来て、いざという時までだれにも気づかれないようにそれを隠しておく（これが肝心である）。そして、強い力は一致から生まれるということを話しながら、そつと、その棒束を取り出して、

「さあ、みんなみているんですよ。」

日曜学校の動きを良く知っているある人が、黒板の価値について、こういうことを書いている。
それはある男の子の言つたことである。

「ぼくは校長先生の言つことは忘れちゃうが、先生が黒板に書いたことは絶対に忘れないんだ。
うそだと思ったら、何かあげてもいい。」

二、実物の使用



黒板の価値

と、クラスの注意を求める。

それから、ひざにその棒束を当てがつて、ぐいと力を入れて折ろうとするが、折れない。そこで、つづけざまに二度三度、ぐいぐいと力いっぱいにやつてみるが、やっぱり折れない。ちょっと考えて、今度はしばつてあるひもを切つて、棒を一本一本ひざに当てるど、すぐにぼきんぼきんと折れてしまう。——これはこれだけで、教師の意図するところを、充分に語ってくれる。

二、ゆりと、ゆりの球根は復活を説明するのに適当である。

三、悪い友だちと交わるとどういうことになるかということを言おうとしたら、黒こげにした棒を持つてきて、それをいじる。黒くなつた手を見せて、

「こういうものを持つと、どういうことになりますか。手がよごれてしましますね。よごれずにはすまないので。——悪い友だちと遊ぶと、どういうことになるでしようね。」

というふうな質問をする。

四、罪のきず跡を説明するためには、釘を板に打ちつけてみせるのである。釘は一本一本罪である。それから、その釘を抜く。悔い改め、ゆるしを受けて、罪の釘は抜くことができるのである。さて、釘は抜けたが、しかし、釘穴は残ることに生徒たちの注意を促したいのである。教師はここで、罪はゆるされるが、罪のきず跡は一生消し去ることはできない、それゆえ、罪に陥らないようにしなければならないということを説明することができる。

五、習慣の力を説明するためには、生徒の手首に糸を巻きつけてそれを切らせてみる。最初は一本、もちろん、それは簡単に切れてしまう。そこで、二重にしてみる。三重に巻いてみる。四まわり巻きつけても切られてしまう。こうして、だんだん巻きつけていくと、いつしか、もう切ろうとしても切れなくなってしまう。

「どうです、みなさん。どんなに小さな罪でも繰り返し繰り返しやつていくうちにには、取り返しのつかない大きなものになつてしまふのですよ。そうして、わたしたちは習慣の奴隸になつてしまふのです。」

実際の事物を示す实物の例を次にあげる。

荒野の幕屋、ソロモンの神殿、キリスト御在世当時の家屋、会堂で使つた律法の巻物の模型、ローマの貨幣、ギリシャの貨幣など。同様に美しい絵画もまた価値あるものである。それは、聖書にあるいろいろの場面を実感させ、その靈的真理の美によって生徒たちを感動させるものとなる。

实物を使って授業をしていくときの注意すべき事を一つあげる。それは節度を保ちつつやっていくということである。へまをすると、子供たちは時と場合とを弁えないので、何か見世物的なものをたえず、せがむようになる恐れがある。極端に言えば、キリスト御来臨に先立つて流れ星が飛んだという話を实物を使って説明すると、生徒たちが、

「花火、花火、花火」

と、しじゅう要求するということになる。

これに反し、黒板を使ってやる授業にはこういう注意は必要がない。というのは、一つは、黒板というものは目に訴えていくためには自然の教え方であるが、実物はこれと少し違っている。実物はそれが適当に選ばれたものでないならば、子供にゆがめられた真理を注入するかもしれないという危険性があるのである。もう一つは、もしも教師がそのレッスンをマスターしているならば、黒板に書こうということはいくらでもあって、困ることはないはずである。しかし毎週実物を使ってクラスを楽しませ続けるということはかなり困難なこととなるであろう。

自習案内

- 一、視覚教材の、教育に欠かせない理由をあげよ。
- 二、生徒の興味をひくためには、黒板はどういうふうに使うべきか。
- 三、効果的黒板使用法を三つ以上あげよ。
- 四、金持ちの農夫がした誤りを二点あげよ。
- 五、实物教育の好例を二つあげよ。
- 六、实物使用について注意すべきことは何か。
- 七、本章の二大中心題目は何か。

第十一章 話をして聞かせる

参考聖句 サムエル記下第一二章一一七節

預言者サムエルは話をして聞かせることによって教えた

「教師が知つていなければならぬことはいろいろあるが、そのうち、だれもが一番大切なものは数えるのは、じようすにお話を聞いて聞かせることである。」と言われているのは正しいことである。それはお話を聞いて聞かせることが靈的真理を提示していく上に、欠くべからざる方法であり、何よりも興味をそそる手段、最も効果的なやり方だからである。長年の間、このお話を聞いて聞かせるということをし続けてきたある経験者は、こう語っている。「ちゃんと納得のいくようになってがき出された真理は世界最大の力である。」

この言葉は子供に関する限り、問題なく正しい。

子供が五、六才になるまでに受ける感化は、そのほかのいかなる時代よりも、考え方や態度を形成するのに力がある。それゆえ、じょうずにお話をして聞かせるということにより、子供の趣味、欲求、感情を善と美とに順応させ、悪と醜とに反発するようにさせることができることが出来る。お話のおもしろさにつり込まれると、子供たちは、それが良い話でも悪い話でも熱心で静かに聞くようになる。そうして、お話が進行していくにつれ、いろいろの場面や人物などがえがき出されることによつて同情を催したり、憎しみを覚えたりしながら、知らず知らずに算数の九九を習う時のように、正確にしつかりと義を愛し、罪を憎むように導かれていくのである。いずれの国、いつの時代においても、お話は性格をつくり、思想を植えつけ、態度を決定し規準を示すのに、大きな力となってきた。それを思うとき、聖書の靈感された話をじょうずに話して聞かせるということは、人々を神と義に對し感化していく上で、この世の何にもまさる大きな力であると言える。

大人もまた、話に心を動かされる。アメリカにおいては、あとからあとからと出される要求に応ずるために、印刷機械がうなりをあげながら、一年じゅう数限りない小説類を印刷している。これら的小説類のあるものは有益であり、あるものは無益である。更になかには積極的に害毒を流すものもある。しかし、何といつてもこういう需要があるということはとりもなおさず、一般的にお話が好まれているということを証明する。このようにして、かしこい教師は、このお話をいうものを、靈的真理を伝えるという、最高の目的のために使うことになるのである。お話を聞いて聞かせる

ということは、聴衆の注意をつかむのに計り知れない価値をもつてゐる。聴衆は教理的問題を取り扱つてゐる場合関心を失い、眠気に誘い込まれてしまふものであるが、しかし、その説教者が説明解釈をやめてお話を聞いて聞かせはじめると、半分眠りこけていた聴衆は、とたんに大きな目をむき出して、口をぽかんとあけて講師を見あげるものなのである。

話とはどんなものをいうのか

「お話とは、起こつた事がらの関連のある叙述、過去の事件の描写である。」と、言われている。定義は一応まずこの通りであるが、しかし、日曜学校で話されるお話というものはそれ以上のものである。あまりよい例ではないが、「子供たちに、その先を聞きたいという、わくわくとした気持ちにさせない」ようなやり方で、事実をありのままに、ミルクが玄関先から盗まれた、と、言つてみたところでどうにも仕方がない。教育的価値のあるお話は、聞く者の感情をゆさぶり、興味を起こさせ、そして、真理を頭にも心にも強く焼きつけるものでなければならぬ。それは「強い関心と感情を呼び起す絵」である。そういう教育的価値のあるお話はどういうものであるかといふと、それはその話がなし遂げていくことを説明していけばわかると思う。良い話というものは

二、同情をひく

三、眞実性を生み出す

四、行動に感化を及ぼす

ものである。

一、お話を聞く人の心にふれてその興味をひき起こす　お話の主要な価値は興味を抱かせ、楽しさを生み出すことにある。聞き手はそのお話の人物、情景にひきつけられ、その言つたりしたりすることに心を動かされる。その間にこれらの人物や情景によって示されている実際的教訓が聞き手の頭や心に刻みつけられていく。だから、お話の価値というものは、間接的なところにある。生徒が興味にひきずられ、筋の発展を追いながら、登場人物を好いたり、きらつたりしているうちに、そのレッスンの含む道徳観はそつと心の裏口からしのび入り、いわば、知らず知らずのうちに生徒は影響を受けるのである。

ナタンはダビデにその二重の罪を自覚させるために、この方法を使っている。サムエル下一二・一一七参照。この預言者はもつともらしい弁解や抗弁ですでにすっかり身がまえているダビデに向かって、直接その非難の矢を放つようなことをしなかった。ナタンは、お話をして聞かせるという間接的なやり方で王の興味を誘発し、その注意をひきつけたのである。表面上は一つの訴訟を提起するように見せかけて、次の事件をこと細かく話していくのである。

「ある町にふたりの人があつて、ひとりは富み、ひとりは貧しかつた。富んでいる人は非常に多くの羊と牛を持つていたが、貧しい人は自分が買つた一頭の小さい雌の小羊のほかは何も持つていなかつた。彼がそれを育てたので、その小羊は彼および彼の子供たちと共に成長し、彼の食物を食べ、彼のわんから飲み、彼のふところで寝て、彼にとつては娘のようであつた。時に、ひとりの旅びとが、その富んでいる人のもとにきたが、自分の羊または牛のうちから一頭を取つて、自分の所にきた旅びとのために調理することを惜しみ、その貧しい人の小羊を取つて、これを自分の所にきた人のために調理した。」

ここで注意すべきことは、たちまちにしてダビデはこのお話に耳をそばだて、心を奪われたということである。ダビデは愛する羊を盗まれた貧しき人のために心から同情し、目には涙を浮かべさえした。そうして、血も涙もない富める人に対する火のように怒つて、

「主は生きておられる。この事をしたその人は死ぬべきである。かつその人はこの事をしたため、またあわれまなかつたため、その小羊を四倍にして償わなければならぬ。」
という激しい言葉をたたきつけている。

ところが、王はここまで、自分の罪が言われているのだと気がつかなかつた。王は自分で害を与えた被害者に自分で同情しているということも知らなかつたし、また、火のような自分の怒りが実は自分自身に向けられているのであるということも知らなかつた。また、自分で自分に罪の宣

告をしているということにも気づかなかつたのである。こうしてこの話は、その任務を達成したのである。そこでナタンは声を励まして、

「あなたがその人です。」

と、ただひとこと、言つた。

それだけでこのレッスンはダビデの良心に迫り、王を悔い改めて地にひれ伏させたのである。

二、興味をひき起こすことにより同情をひく　話は人の心をうち、その話のなかで活動する人物と同じように感じさせて、その人の行動にまで感化を及ぼすものである。聞き手は感動して、義をたたえ、あわれみにうなづき、罪をにくむようになる。しばし生徒は我を忘れて、話の中の人物といつしょに考え、感じ、経験をはじめるのである。人間の心はいろいろな感情に満たされている。故に聖書の話をすることにより、これらの感情は神と義とにくみし、悪魔と不義とに立ち向かうものとすることが出来る。

主イエスはある時、ユダヤの指導者たちと対決された。彼らは昔、預言者たちを石で打ち殺した人々の子孫で、当時に至つてもなおかつ、その救い主、メシヤを憎み、これを殺してしまおうといふ惡意に満ち満ちた人々であった。主はこれが訴訟問題であることを感じさせ、無意識のうちに自分たちの罪の宣告をさせようとして、次のマタイ二一一・二三三一四〇の話をされた。

「ある所に、ひとりの家の主人がいたが、ぶどう園を造り、かきをめぐらし、その中に酒ぶねの穴を掘り、やぐらを立て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。収穫の季節がきたので、その分け前を受け取ろうとして、僕たちを農夫のところへ送つた。すると、農夫たちは、その僕たちをつかまえて、ひとりを袋だたきにし、ひとりを殺し、もうひとりを石で打ち殺した。また別に、前よりも多くの僕たちを送つたが、彼らをも同じようにあしらつた。しかし、最後に、わたしの子は敬つてくれるだろうと思つて、主人はその子を彼らの所につかわした。すると農夫たちは、その子を見て互いに言つた、『あれはあと取りだ。さあ、これを殺して、その財産を手に入れよう。』そして彼をつかまえて、ぶどう園の外に引き出して殺した。このぶどう園の主人が帰つてきたら、この農夫たちをどうするだろうか。」

この話を聞いて指導者たちは興味をそそられたので、一瞬、憎悪を忘れて、熱心に耳を傾けた。
そればかりではない。その話の中に出でてくる人物と一つになつて感じたのである。地所を持つている一人の祭司はひそかにこうつぶやいたことであろう。

「なんてひどいやつらだ。小作の年貢を納めもしないで、集めに来た僕を打つたり、蹴つたり、たいたりして、あげくのはてには殺してしまうとは。おれはこの話の忍耐深い地主のように長く我慢なんにするものか。おれだつたら、最初の一発だけで、すぐにローマから兵隊を出してもらつて、うんとひどい目に会わせてやる。むちを打つて土牢のなかへたたき込んでやれば、こうすりや

こうなるつてことを、うんとわからせることが出来るというものだ。

またもう一人のパリサイ人がこう考えたとも想像することができる。

「これはひどい話だ。神を恐れぬにもほどがある。神の裁きはたちまちに下され、こんな無賴漢や人殺しもは殺されてしまうにちがいない。」

イエスの話して聞かせられたこのお話が彼らの心を動かしたことは四一節で明らかである。

「彼ら（ユダヤの指導者）はイエスに言つた、

『悪人どもを、皆殺しにして、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに、そのぶどう園を貸し与えるでしよう。』

ここに自己の罪状の宣告が行なわれた。それを知らせるにはあとひとこと言えば良かつた。

「それだから、あなたがたに言うが、神の国（ぶどう園で表わしている）はあなたがた（宗教的指導者）から取り上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人（新しく選ばれた人、つまり、教会）に与えられるであろう。」

こうして知らず知らずのうちに、これらユダヤ人の指導者たち、つまり、昔の預言者たちを迫害した者の子孫たちは、その心のうちに神のみ子、メシヤを殺しているのだということを感じるようになされたのである。

このように話というものが、キリストの敵である人々の心をさえ動かすことのできるものである

ならば、まして、キリストに心を向けている人々、特に子供たちの心を感動させ、感化を与えることはどれだけであろう。

三、同情をひくことにより、眞実性を生む

話は靈的原則や、道義的原則を行為によつて表現するので、靈的教訓を現実的なものとする。ある時一人の律法学者がイエスに「わたしの隣り人とはだれのことですか」という質問をした。この言葉の中からこの律法学者は、他国人に対してであるか、他階級の人に対してであるか、とにかく何らかの意味において、隣人としてふさわしくないことをしていたということが感じられる。この質問の底には「自分を義としよう」とする気持ちがひそんでいる。

この場合、もちろん、イエスはその律法学者に、そういう質問をすること自体がすでにもう隣人愛に欠けている証拠であると、いと簡単に答えることができたはずである。しかし、有能な教師であられたイエスは「良きサマリヤ人」のお話を聞いて聞かせ、隣人愛とその反対のものを行ふによって表示された。この話のなかの、強盗に会つて傷を負わされた人の中に、この律法学者は困つてゐる人間の姿をさまざまと感じ、また、祭司やレビ人の無情冷淡を知つて、自分の内部にひそむ同情心の乏しさに気がついたにちがいない。それと同時に、親切なよきサマリヤ人の行為のうちに、ほんとうの隣人愛の生きた姿を見たのである。行為によつて隣人愛を示したサマリヤ人こそが、この

律法学者の質問に対する答えであった。それだから、彼はイエスが、「この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になつたと思うか。」と、聞かれたとき、

「その人に慈悲深い行ないをした人です。」というふうに、理解して答えをすることができたのである。

その律法学者は实际上、頭でそれを理解したのであるが、実はそれ以上のものを受け取つたのである。彼は自分自身、ならねばならない人間のモデルを、その胸に感じ、その目で見たのである。

四、現実性を示すことにより、話は行動に感化を及ぼす　お話の中の人物がいろいろの真理を一つ一つ実体化するならば、話は実感をもつて迫り、それらの真理は生徒の日常の行ないにも働きかけるようになつてくる。生徒の感情が話に出てくる人物の行動に刺激されて、尊敬したり軽べつたりするときには、実質的にいつて、生徒はそれらの人物の行動に支配されるのである。あの律法学者が「よきサマリヤ人」のお話に心を動かされているのをご覧になつて、主イエスが、

「あなたも行って同じようにしなさい。」

と言われたのは、實にこの理によるのである。

話をする方法

効果的に話をするためには、語り手は、

- 一、それを知り、
- 二、それを見、
- 三、それを感じ、
- なければならぬ。

一、教師はその話を知らなければならない

まずお話の要旨を完全にマスターすることなしに、教師はそのお話の場面をはつきりと目に見えるようにすることはできないし、生徒の目のキャンバスに生き生きとした言葉の絵の具を、塗つていいくということはできない。それでは、話をマスターするにはどうしたらよいかというと、それは次の方法がある。

話の下調べをして、それを練習してみる。これには努力がいる。こうしておけば、あとで教室に立つた時に靈感がわいてくる。お話というものは一語一語暗記する必要はない。しかし、話し手はその話の場面場面、主要人物、習慣、会話の内容というものを絵のようにはつきりと心に刻みつけ

ておくことが肝心である。

話を検討して、簡略にする。これは、話の大筋や事件がなだらかに順序よく発展していくことを妨げるようなもの、あまり重要でない事件や人物などを取り除くことである。

子供たちにお話ををして聞かせることにかけて、特に経験豊かなキヤサリン・ダンラップ・ケイサー女史は次のような、よく取りあげられる聖書の話の例を示している。

『ダビデと立琴』

——ここはベツレヘムの丘、太陽はさんざんとぶり注いでいます。少年羊飼いのダビデは羊の番をしています。ダビデはよい羊飼いでした。羊の群れを緑の牧場へ連れて行ったり、静かな流れへ連れて行つたりしながら、何か羊たちに害を加えるものが来ないか、と、しじゅう気をつけて、あたりを見まわしていました。ある時はゆるやかな丘の傾斜に羊を追いながら、歌をうたいました。

また、ある時は歌いながら立琴をひきました。その美しい音は丘をこえて流れていきました。さて、この国にサウルという王さまがいました。この王さまは不幸でした。そして長い間病氣でした。が、國じゅうのお医者さんも学者や博士の先生がたも良くしてあげることが出来ません。王さまは笑うということを忘れてしまって、いつもいつも悲しいこと、暗いことばかり考えてくらしていました。それで、その顔には深いしわが刻み込まれていました。

ある日博士たちは、ふと、音楽でもお聞かせしたら、王さまはまた元気におなりになるのではな

かろうかと考えつきました。そこでさつそく、そのことを王さまに申しあげると、王さまは、

「立琴をじょうずにひく者がいたら、連れてまいれ。」とおっしゃいました。

すると、博士の一人がこう言いました。

「羊飼いでございますが、ベツレヘムに立琴をとてもきれいにひく者がございます。この者は強くやさしく、顔かたちもたいへん美しさございます。エッサイのむすこで、ダビデと申します。」

これを聞くと、王さまはすぐに使いの者を出しました。

一方、ダビデはあいかわらずあつちへ行つたりこつちへ来たり、おとなしい雌羊の背中を軽くたたいたり、かわいい子羊があぶないところへ迷い込まないように気をつけたり、羊の群れと一緒に歩きまわっています。そこへ王さまの所へ行くようにとの命令が来ました。おとうさんはダビデに、王さまに献げるパンや、いろいろな贈りものをこしらえてくれました。そこで、ダビデは王さまのお城を目指して出かけました。

王さまの前に出たダビデは、さつそく、立琴を鳴らしはじめました。それはダビデがつくった歌でした。丘に夕ぐれがきて、ものの影が暗くさびしくなつてくるころ、羊たちをその囲いに連れて行く時、羊の群れに歌つて聞かせる歌でした。それから、また、ダビデは、こうろぎやうずらや野うさぎなどが、ふとその足を止めてじつと聞き入るような曲、人々が刈り入れの時に歌う歌、陽気な結婚式の歌を歌つたりひいたりしました。それを聞いたサウル王はたいへん心楽しくなつてその

顔にはいつしか笑いが浮かんでいました。王さまは今までのいろいろな悲しい思いを忘れ、気分も良くなつてきて、間もなくもとのように元気になりました。こうなると、楽しい幸福な王さまです。ダビデも楽しく幸福でした。歌や立琴がこういうお役に立つたので、うれしくてたまりません。

それからというものは、この王さまのサウルが病気になつたり、何かが心を苦しめているときには、ダビデが立琴をひき、歌をうたい、王さまをなぐさめました。

そのあといく年かたつて、このダビデ自身がイスラエルの王さまになりました。そうして、美しい詩をたくさん書き残しました。――

話をして聞かせる場合、出来ごとの順序はよく筋の通るようにしておかなければならぬ。話の途中で話し手が急に言葉を切つて、あわてて、

「あ、そう、そう、言うのを忘れていましたけれどね……」

と言うくらい聞き手の感興をそぐものはない。この意味において、お話のアウトラインをマスターすることは、出来ごとの順序を覚えるのに役に立つ。ここに同じケイサー女史の『ノアの洪水』のお話についての要旨を参考までに掲げる。

力ある人々の群れ——力がすぐれてくるとノアのほかはみんな邪悪になる

神、その邪惡を悲しまれる——これを滅ぼそうと決心される——ノアに箱舟をつくれと命じられる

箱舟をつくる——ノアの一家箱舟にはいる——動物もはいる

洪水

あらしがやむ——ノア、からすと鳩とを放つ——鳩帰つてくる

もう一度鳩を放つ——オリーブの葉をくわえて帰る

ノア、箱舟の覆いを取る——家族や動物といっしょに外へ出る
神に献げる祭壇を築く

お話のなかに出てくる人物の一人一人が使う会話を、できるだけ正確に心にとめるようにする。

会話は第二人称を使うよりも第一人称を使うべきである。イエスが水をぶどう酒に変えられた話を読んで、もしも、その会話がみな第三人人称を使う間接叙述に書き替えられたとしたら、どんなに平板的に、無趣味に流れてしまうかということを考えてみよう。たとえば、

「お母さんは何でもイエス様が僕どもに命令するとおりにしなさいと、僕たちに言いました」
という叙述と、

「お母さんは僕たちに『何でも言われた通りにしなさい』と言いました。」

という叙述とを比較してみるがよい。

二、教師はその話を目で見なければならない 教師は話を覚えなければならないばかりでなくまた、そのお話を想像力のうちに培つていなければならぬ。それは想像力というものだけが他人の想像力を刺激することができるからである。

たとえば、ザアカイのお話がその授業の中心であるとする。

この際、教師がお話をすすめていくにしたがつて、生徒たちは日本にいることを忘れて、パレスチナの暑いほこりだらけの路を歩いているような気がしてくる。

熱い太陽が頭の上でキラキラときらめく中を歩くにつれ、エリコの町を進む一群の人々に引きつけられる。その群集に近づいてみると、そこには、いろいろの階級の人がいることがわかる。妙に威張つたサドカイ人、これはまつ白な衣を着て人をばかにしたような顔をしている。殊勝ぶつたパイスイ人、これは祈りの時に使う肩衣をかけ、手には聖句の小箱をささげて、何かあら探しをするものはないかとあたりを見まわしている。ぼろを着てよろよろ歩くこじき、これはしじゅう右や左へ物乞いをしている。まるそうな目つきであつちこつちをじろじろ眺めまわす取税人。ピカピカと光る軍服をつけたローマの軍人。そういう大群集のまん中に、イエスがその弟子たちと話しながら

歩いておられる。またその周囲には、イエスは神のみ国を建設するためにエルサレムへ行かれるのだと思い込んで、夢中になつてついて行く人々がうず巻いている。

こうして話がすすめられていくうちに、生徒たちはザアカイという背の低い男の上にひきつけられていく。ザアカイは小男なので、つま先で立ちながら、あつちへ行つたりこつちへ来たり、何とかして一目、大先生を見たいものだと苦心している。「背教の取税人」の出しやばりを憎んで押したり突いたりする人々。突然、ザアカイは駆け出して行く。そして、手近にある一本の木に登る。そこは場所がよい。ザアカイはそこから目をキヨロキヨロさせながら下の群衆を見おろしている。とうとう、こうしてかくれてザアカイはイエスを見た。しかし、イエスはザアカイを見たであろうか。——と話は続く。こういうふうに教師は話の様々の情景や人物を聞き手の目に見えるようにしていくのである。しかし、それにはまず教師自身が自分で見ておかなければならぬのである。

三、教師は話を感じなければならない 教師がおもしろいとも思わなければ、感心もしないような話は、話して聞かせてもむだである。「脈うつ心臓からあふれ出るもののが、他人の心臓の乾いたところを潤す。」ためには、自分が目で見たものによつて感動させられ、刺激されるということが肝心である。もし、ほかの人々の想像力を刺激して、そのお話の情景を目に見、心に感じさせようとするならば、まず、話し手自身がその想像力をかきたててそれを感じなければならない。教師自身

がその話の中に出てくる情景や人物に心動かされているならば、ゼスチャードとか、表情だとか、雄弁だとかいうものを心配する必要はない。

「心からあふれるものを、口が語るものである。」からである。

自習案内

- 一、本章を通読し、お話と第九章のたとえ話を比較せよ。一般に、実際にあつたことはお話になるのか、たとえ話になるのか。また、どちらが長いか。
- 二、子供たち、特に、五才ぐらいまでの子供たちの心に、お話はどんな影響を与えるか。
- 三、説教においてお話をすることの効果を述べよ。
- 四、教育的観点から、お話をするということの定義を述べよ。
- 五、よいお話が与える結果を四つあげよ。また、本章における例について、おののおのそれが、いかなる聖書的結果に到達しているかを調べよ。
- 六、じょうずにお話をするための準備を三つあげよ。
- 七、お話の内容を覚えるために教師のなすべき四段階を示せ。
- 八、教師の想像力の有無がお話に与える影響をあげよ。
- 九、お話をするとき、教師はいかにしてその気持ちをお話のなかに投入すべきか。また、ほんとうの意味で雄弁な話し手となるにはどうしたらよいか。

第十二章 印象と発表

参照聖句 ルカによる福音書第六章三八節、ヨハネによる福音書第一二章二四、二五節

教えることによって他人に譲渡してしまうものこそ自分のものとなるのである

第二章において、教育の根本原理の一つは教えられる者の自己活動であるということを述べておいた。それは何らかの方法で生徒に発表をさせることである。十分間のクラス活動は一時間の教師の活躍にまさる、とはまさに事実である。エイモス・R・ウェルズ氏はこのことについて次のように言っている。

ろの知識というものでその銃身がいっぱいになつてゐるのである。教師が好奇心と興味とを喚起することは、そういう銃に対し、爆薬と雷管とを装填することである。そうして、質問を巧みにかけていくことは引金をひくことである。これを碎いて言えば、一番よい教師は、生徒自身が自分で学びとることを、教える教師であるということである。この理をもつてすれば、生徒の側における頭脳活動の伴わぬ學習というものはないということになる。生徒のこの頭脳活動を促すためには、生徒は何らかの方法で、その學習の結果を発表するように仕向けられなければならない。」

そこで、この學習過程についてであるが、これを大別すると二段階になる。第一段階は印象である。これは本を読み、授業を受け、教師の言葉を聞くというよなことによつて代表される。第二段階は発表である。これは生徒自身考えたこと、その努力の結果を外部に示すことである。この二段階のうち、その學習過程を完成させ、生徒に真理を会得させるものは、何といつても、第二段階の発表である。その理由は外部に向かつて言い表わすものだけが、本当にその人のものだからである。教えるということには、常に、印象づけの次に発表が伴わなければならない。今、このことに関する、三点を考えてみることにしよう。

この原則は靈的世界においても眞実である。かしこい靈的指導者たちは、若い回心者たちに対して、最近の靈的體験を証しや、個人伝道など、何らかの奉仕の形で発表させようとする。なぜだろうか。発表されない生命というものは死んでしまうものだからである。使わなければ失われていく。

イエスはこう言われた。「もしこれらのことがわかつていて、それを行なうなら、あなたがたはさいいわいである。」（ヨハネ一三・一七）。

教師自身、行なうことによつて、実際に学び取るのであるという眞理の体得者である。日曜学校の教師はその教材をしっかりと研究し、頭も心も眞理と感動とで満ち満ちて教室にはいつて行く。しかし、それをほんとうに身につけるのは、それを教え、それを発表してから後のことである。教えるという行為、つまり、一つの頭から他の頭へと伝えられていくときに、それまでぼんやりとして形のなかつた眞理が明確な姿を形づくるのである。一つの心から他の心へと移されていくとき、無味乾燥なものが神の火に燃えあがるのである。そうして、教師は、しばしば、他人を教えるながら学び得た眞理の力に、身も心もふるわしながら教室を出て行くのである。

今ここに二人の少年がいて、出エジプト記第二五章から第四〇章にある、幕屋の設計やその細部について研究を始めようとしていると考えてみよう。一人はその各章を読んで頭で理解する。もう一人は同じその各章を研究して幕屋の模型をこしらせる。どちらが幕屋についてよりよく知り、またその実際の知識を獲得することになるだろうか。言うまでもなく、幕屋の模型を作つた方である。人は自分自身の努力、活動で創造したものだけをほんとうに自分のものとするのである。これを広義に理解するならば、とにかくどんなやり方にしろ、生徒が、そのレッスンに関して何かしら発表を行なつてゐるならば、それは創造的活動をしていることができるるのである。

それでは、どういうふうにして生徒に発表活動を行なわせたらよいであろうか。日曜学校の各科にはそれぞれ発表形式がある。幼稚科においては遊戯やゲームのような動的活動があり、小学下級科においてはクレヨンやチョークなどを使って絵を描いたり、影絵を切り抜いたり、またはお話を実演したりという形をとる。小学上級生や中学生は、工作、作文、暗唱というようなものに吐け口を見いだし、それ以上のクラスでは課題研究、自由研究などが自己発表の方法になる。

次章において、これらの方針のうち最も効果的な、質問をして発表させる方法について述べることにする。

自習案内

- 一、本章と第二章とを読みくらべること。教えるということの根本的意味を示せ。
- 二、教師はいかにしてその教えるべき真理を自分のものとし、また、生徒にそれを会得させるべきか。
- 三、救われたばかりのクリスチヤンの信仰を育成する方法を二、三示せ。
- 四、教師がその教えるべきレッスンを完全に覚えることのできるのはいつであるか。
- 五、生徒の積極的、能動的活動が教育の一助となるということを説明せよ。
- 六、日曜学校生徒がその学んだことを発表表現する活動を七つか八つあげよ。
- 七、本章の二つの中心題目を示せ。

第十三章 質問による授業

参考聖句 ヨブ記第三八章八節

忍耐の模範となさるために、神はヨブに質問することによつて、教えられた

数十年前、ある賢者はこう言った。

「核心に迫る質問は知識の半分を与えることである。」

この言葉は今日においてもなお正しい。

よい質問はよい授業、そしてよい質問をする人は一般によい教師である。事実、質問は有効適切な教師の道具である。質問は生徒に自分の意見を発表させ、それをもつてその学習過程のしめくくりをつけていく。その意味において、質問の価値は高く評価されるべきである。生徒はレッスンを研究し、教師の説明を聞く。それが印象というものになる。生徒の頭はその印象に関連したいろい

ろの思想、感情、問題によって充満する。充満はしているが、しかし、これらの思考群は、しつかりした形をもつておらず、ぼんやりした姿、無秩序の状態に置かれている。ここにおいて教師のじょうずな質問は生徒の頭の車の回転の始動力となる。こうして自己の意見が発表されることになるが、その自己発表のうちに、学習したことがはつきりとなってくる。霧も混迷もその頭から消え去つて、

「うん、そうか、これでよくわかった。どうして以前にはこういうふうに考えなかつたんだろう」と、胸のうちにうなづく。

生徒は自分の頭の中から出てくるものに対して驚きと喜びとの目を見張るのである。

しかし、こういう効果をあげるには、その質問を慎重につくり、巧妙に用いていかなければならない。そこで、この質問をしていくことの主要目的を考え、その目的達成のために必要な規準をいくつか、ここに述べてみることとする。

質問は次の結果を達成するために使われる。

- 一、レッスンを発展させる
- 二、レッスンをはつきりさせる
- 三、生徒に考えさせる
- 四、重要真理を強調する

五、生徒の頭の活動を持続する

以下この五項目について記す。

一、レッスンを発展させる

レッスンというものは順序立てて教えなければならないものであるから、質問もまた、筋の通るようにならなければならない。教案に出ている質問は、生徒のためのものというよりも、むしろ、教師のためのものである。生徒の気持ちをひきたてていくために、やさしい質問から始めるべきである。

二、レッスンをはつきりさせる

質問が、レッスンの意味をはつきりさせるためのものであるならば、それは次のように生徒の頭を混乱に落としいれるような性質のものであつてはならないのである。

複合している質問 たとえば、

「ガリラヤの湖でおぼれそうになつた時に、だれがどういうことをなぜ、言いましたか。」というような質問である。(マタイ一四・一一八参照)

この質問には、実質上、三つの質問が含まれている。第一は、だれがこのことを言つたか、第二は、その人は何を言つたか、第三は、その人はなぜそう言つたか、である。

難解な字句を含む質問 教えるということの根本原則の一つに、真理は必ず生徒の理解力に訴えていかなければならぬということがある。この理に基づけば、次のような質問を生徒にすべきではない。

「ユダの変節は、ユダ自身の側から観察して、計画的分子を包含していたのでしょうか。」

聖書は普通の人の普通の言葉で書かれているのである。こういうむずかしい専門語に類する言葉を使つてはならない。そればかりではない。一般の人々にこれはと首をひねらせるようなことは聖書にも書いてない。主は、

「羊を養え」

と言われたのであって、

「キリンを養え」

と言われたのではない。つまり、だれもが理解できない「キリン」のような言葉は避けるのである。

意味の取りようでどういうふうにでも答えることの出来る質問 ある教師がある生徒に、

「罪のゆるしを受けるにはどうしたらよいですか。」

という質問をした。

「まず罪を犯さなくてはなりません。」

とその生徒はすぐに答えた。

これは質問の意味をつかんでの答えとしてまちがいではない。この質問は次のようにすべきであったのである。

「罪を犯したのち、そのゆるしを受けるにはどうしたらよいですか。」

それから、また、

「ピラトはどういう人ですか。」

というような質問も、どうにでも答えることのできる質問である。ローマ人、総督、イエスを十字架にかけた人、裁判官、など。どの答えもまちがいではない。質問者の意図がどこにあるのか、はつきりとしないのである。これをはつきりさせるためには、

「ピラトはどこの国の人でしたか。」

「ピラトはどんな仕事をしていましたか。」

「ピラトはイエスに対してもう一度態度をとつていましたか。」

というふうにしていくべきである。

どちらどころのない質問

たとえば、

「罪を犯すと、どういうことが起りますか。」

というような質問は、次のように明確なものとする方がよい。

「人が罪を犯すとき、良心にどのような影響を与えるでしょうか。」

質問を起こす質問

質問が質問を呼ぶ質問というのは次のような質問である。

「使徒パウロは第二次伝道旅行ののち、なぜ神のみ心に従わずにエルサレムに行こうとしたのですか。」

この質問は、たちまちにして、

「しかし、パウロは神のみ心に従わなかつたのかしら。」

という質問を呼び起こさずにはおかないのであろう。

長たらしい質問 これは、ある人が一日じゅう乗りかえもしないで旅行をしているとでもいうような、長い文章の例としてあげているドイツ文であるが、試みにそれをここに書いてみよう。

「残酷で、その上、しつと深くて、しじゅうだれかが自分の王座をねらっているという疑いを抱いている（事実、そのために自分の妻もむすこも殺してしまった）ヘロデ王の治政下において、神のみ子、王の王の誕生をふれ告げ（特にこれをかくそうとしないばかりではなく、かえって全市にこの知らせを広めたことにより）、自分の死んだことを聞いたなら、ユダヤ全国民はさぞかし喜ぶであろうというので、ユダヤの主な人々をエリコの獄屋にたたき込み、自分が死んだ時これらの人々をみんな殺してしまえば王の死を、国民は悲しむだろうと思って、そういう命令を出していた残忍な人に、自分たちと神のみ子をさらけ出すことは安全なことだつたと思ひますか。」

こうなると、もう、これは質問ではなくて講義である。

以上、要約して言えば、質問というものは人を煙に巻いて混乱させるものではなく、その部分をはつきりとさせ、わかりやすくさせるものであるべきである。質問というものは解答を示して生徒の思考の手数を省くためのものであるべきではなく、少なくとも生徒にその質問の意味するところを教えるべきものである。

三、生徒に考えさせる

「できるだけ少なく教えて、できるだけ多くの報告を求めよう。」

とも言うことができるであろう。

生徒に答えさせる目的は、教師が耳から詰め込んだ言葉や思想を、そつくりそのまま生徒の口から引き出すというところにあるのではない。麦を粉ひき場へ持つて行く時、農夫はそれがもとのままの姿でもどつてくることを考えていない。それがひかれて粉になつて返つてくることを期待するのである。同様に教師も、生徒の思考力というものを通して、碎かれ、ひかれて粉にしたもののが、その口から出てくるという期待をもつて、真理という麦を生徒という粉ひき場へと持ち込むのである。

生徒に、実質的に考えさせるためには、次のような質問は極力避けるべきである。

答えをほのめかしている質問 たとえば、

「人はどんなことを告白すべきですか。」

というような質問。こういう質問は、見ようによつては答えそのものなのである。

肯定詞または否定詞だけで答えることのできる質問 こういう質問に対する回答は、ただ単なるあてずつっぽうで間に合うのである。どつちみち、生徒が真剣に考えたという証拠は示されないので質問をしていった。

『みなさん、みなさんは規則正しく日曜学校へ出席しなければいけないと 思いますか。』
 『はい。』
 『日曜日の朝はいつも時間に遅れないように来なければいけないと 思いますか。』
 『はい。』
 『家でも勉強をしなければいけないと 思いますか。』
 『はい。』
 『日曜日のたびに献金を持って来なければならないと思いませんか。』
 『はい。』
 『わたしのお話はもうやめるべきだと思いますか。』
 『はい。』

ある。マリオン・ローレンス氏はこう言つている。

「生徒は教師がしてほしいと思っているような答えを、別に考えずに答えることが出来る。その結果、図にのつて、おかしな失敗をするようなことになる。実際にわたしの学校であつたことであるが、牧師がこういうことを試みた。その牧師は全校の生徒を集めて、後から後からと次のような質問をしていった。

『みなさん、みなさんは規則正しく日曜学校へ出席しなければいけないと 思いますか。』

『はい。』

『日曜日の朝はいつも時間に遅れないように来なければいけないと 思いますか。』

『はい。』

『家でも勉強をしなければいけないと 思いますか。』

『はい。』

『日曜日のたびに献金を持って来なければならないと思いませんか。』

『はい。』

『わたしのお話はもうやめるべきだと思いますか。』

『はい。』

レッスンそのままの言葉を使って聞いたり答えたりする質問 生徒には生徒自身の言葉で答える
ように仕向けなければならぬ。さもなければ、生徒は表面上答えてはいるものの、実はその意味
を全然つかんでいないことがあるからである。これについて、サー・ジョン・シェア・フィッチ
氏（有名な教育家）は、その著書「質問の技術」のなかで、質問に答えるに当たって、生徒は聖書
の言葉も使わないで、自分の言葉を使って説明するようなどう強硬論さえ出している。

氏はルカ一〇・三〇から次の例をひいている。

「これはだれについてのたとえ話ですか。

——ある人。

その人はどこから来たのですか。

——エルサレム。

どこへ下りますか。

——エリコ。

どんな人たちに会いましたか。

——強盗。

強盗はその人の着物をどうしましたか。

——はぎ取りました。

この教師はこの話全般にわたつて一つ一つの事実に関して質問を出している。この点はた
いへんよろしい。

しかし、どの質問をとつても、みんなできるだけ聖書にある言葉を使っていること、それ
に対する答えにも聖書の言葉の一つを要求しているということである。少年少女にとつては、たつ
た今読んだばかりの聖書の話がまだ耳にひびき残つてゐるうちに、記憶する努力も考える努力もほ
とんどすることなしに、ただ機械的手順で、こういう質問に答えるということは全く何でもないこ
とである。

今、同じ主題を別のやり方で取り扱つてみよう。今度はまず予備的質問を一つ、二つ、つけ加え
て、導入していく。

この話はだれにしたのですか。
この話をなぜしたのですか。

律法学者のした質問を、ここで繰り返して言う。

それから、

これはだれについてのたとえ話ですか。

——旅行に出た人についての話です。

旅行している人を何といいますか。

——旅行者。

その人はどこの国を旅行していましたか。

——ユダヤ。

ここに地図があります。その人の通つて行つた道をたどつてみましょう。
その人はどつちの方向に旅行していたのでしょうか。

——東の方。

どんな国を通つて行きましたか。（教師は地形について補足的説明をする）当時、その国の
状態はどんなだつたと思ひますか。

——人口が少なくて、人通りはほとんどありませんでした。

どうしてそんなことがわかりますか。

——その人は強盗にあつたからです。

強盗というのは、ほかの言葉で言うと。

——どうぼう。

それで、その強盗どもはその旅人をどんなふうにしましたか。

——着物をはぎ取りました。

そのほかに何をしましたか。

——その人を傷つけました。

それはどういうことですか。

——けがをさせたのです。とてもひどいきずをおわせました。

とてもひどい負傷をしたことがどうして聖書からわかりますか。

——半殺しにしたまま逃げ去つたと、書いてありました。その人はもう少しで殺されるとこ
ころでした。

さてこのやり方には目標が二つあるのである。その第一は、質問のうちに答えをほのめかさない
ようにしてあることである。こうすることによって、子供たちはその日常生活に使う自分たちの言

葉で聖書の言葉を解釈していかなければならなくなる。その第二は、答えはただの一語ですますといふわけにはいかないことである。特に、その話に出てくる特別の言葉ですますのでなく、常に耳なれたものに、直していかなければならないのである。」

教室で話をするとき、生徒は自分の日常の言葉を使うようにするという原則を更に説明するためには、W・P・スピルマン氏の語った、ある腕白小僧が授業の話を自分の日常語で自由にしゃべった話をあげてみよう。

「ララミーからさらに北へ何マイルか行つた、ワイオミングのロッキー山脈でのことだつた。ある人がそこを訪ねたとき、七つから十ぐらいまでの男の子で編成されたクラスで授業をしてくれるよう頼まれた。その前の日曜日の学課は『よきサマリヤ人』の学課だつた。

『それでは、みなさん。この前の日曜日に習つたことを話して聞かせてください。だれかできますか。』教師がこう言うと、四、五人手をあげた者がある。そのうちの一人をさすと、その子は立ち上がつて話し始めた。

『あのね、先生、——この前の日曜の勉強はね、エリコの谷での、ホールダップの話だつたよ。ある人がね、そこんとこを、歩いていたらね、ギヤングが飛び出して来てね、着てるものをひんむいて、ぶちのめして、半殺しにしまつた。それからお金を取つて、ずらかっちやつたんだ。

そこに、お医者さんが来たんだけど、

——うわつ、こりや、おれの薬じや、どうにもなんねえな。

といって行つちやつたんです。

すると、そこへ、こんどは、牧師先生が来ました。そしてその人を見て、

——ここは、私の受持ちのところじやないからね。

といって、行つちやいました。

そこへ、こんどは、馬に乗つたカウボーイがやつて来ました。

そいつは馬を飛びおりて、

——うわあつ、この人、けがしているじやないか。

それで、その大けがしてゐる人を、自分の馬に、のつけて、道ばたの宿屋へつれて行つたんだ。そしてそこの人に頼んだんだ。

——この人がね、あつちの谷で、やつつけられてけがをしていたんだ。めんどうみてやつてくれさい。これはおれの友だちだから、ここにお金もおいとくよ。おれは、これで牧場に、行くけど、足りなかつたなら、帰りにまた払うから、頼みますよ。』

これはたしかに洗練された言葉使いではない。しかし、いかにこの子がそのレッスンの真髓をつかんでいるかということは歴然たるものがあつて、これを疑うことはできないはずである。

ここで注意すべきことは、教師は生徒がその質問に答えるに当たつて、その答えが不完全で何か

欠けているような場合にも、それをすぐにだめだと言い捨て、その生徒を失望させてしまわないようになることである。そういうときには、むしろ一応それを肯定し、訂正してあげるのである。レシテーションの最中、生徒が何かまちがつたことを言つたとしても、教師は途中でそれを制止しないで最後まで言わせる方がよい。なぜなら質問をする主要な目的は、ただ単に正確なことを言わせるだけではなく、生徒に自己発表を行なわせ、それによつて真理の理解へと導いていくところにあるからである。答えがまちがついても、それを手がかりにして、教師は生徒の思いがいを直してやることができるのである。その意味において、まちがつた答えもまた重大な役割りを果たすのである。

四、重要真理を強調する

生徒には、たいして大切なこと、枝葉末節にわたることなどを質問すべきではない。ウアイグル博士はこう言つてゐる。

「質問することは、その問題に力点をおくことである。それは、その質問が、その瞬間、思考の中心となるからである。それは、生徒の頭に焼きつけられ、重々しく感じられ、その目に重要なものとして映る。」

そこで、今仮に、教師が、

「イエスさまのおつしやつたのは、どういうへやなんでしょうか。——カギのかかる寝室でしょうか、それとも、自分のへやでしょうか。」

という質問をしたとする。

そうして、それについて、五分かそこら、ああでもないこうでもないと言い合つてみるとしたら、それは全く枝葉末節にわたるむだな時間つぶしである。このレッスンの主要点は場所の問題ではなく、祈りの態度の問題なのである。

質問と答えはお互いに記憶するに値する真理の大切な一面を、構成し合わなければならぬ。たとえば、

「ペテロは金持ちの青年がすごすごと立ち去つて行くのをじつと見詰めながら、どんな質問をしましたか。」（マタイ一九・二七一一九）

という質問を出したとする。

生徒たちはこの質問から次のように考えていくにちがいない。

「金持ちの青年とこのペテロの質問とどういう結びつきになつてゐるのだろう。ふうん、そうか。ペテロは自分自身をその金持ちの青年とくらべてみたのだ。金持ちの青年はすべてをキリストに獻げ切ることができなかつた。そこで、

『どちらんなさい、わたしたちはいつさいを捨てて、あなたに従いました。ついては何がいただけ

るでしょうか。』

ということを聞いたのだ。』

さらに一例をあげよう。

「使徒たちがお互にその足を洗い合うということをしない、とわかつた時、イエスさまはどうなさいましたか。』

この質問によつて、生徒は心のうちにこう思うであろう。

「うん、そうか。ここそこは今までよくわからなかつたんだけど、これではつきりとした。そうだ、そうだ。使徒たちはお互に自分こそ『えらいんだ』と思い込むようになったので、兄弟の足を洗うことができなくなつたんだ。そこで、指導者のイエスさまが、ご自分からへりくだつておみせになつて、弟子たちの心を恥ずかしい思いにさせたんだ。』

以上は教えることの出来る質問と、よい質問とよい答えとが相共に呼応してはたらく結果を示した例である。

五、生徒の頭の活動を持続する

質問をするに当たつては、教師は生徒個人よりもクラス全体を心にとめるべきである。その目的とするところは、クラスの全員に興味を抱かせ、その活動のうちに持続することである。

これに関し、次の五つの点は重要である。

不平等を避けること経験豊かな教師は語る。

「どこへ行つても、教師のする質問に全部答えて、自分をみせびらかしたいという利口な生徒がいるものである。これは許すべきではない。また、極くやさしい簡単な質問にしか返事のできない者もいる。最初に、できない生徒にやさしい質問をして、できる生徒にはむずかしい質問をすべきである。質問の答えをさせる場合に、えこひいきをすることは、全くまちがつていい。それは答える者にとつても、答える責任を除かれた者にとつても悪いことである。』

不注意な生徒のために質問を繰り返さないこと 一人の不注意な生徒のために、授業の時間をむだにするようなことをしてはならない。そういう場合、教師はその質問を手早くほかの生徒にふり向けるのである。そうすると、それがその不注意な生徒に対する軽い叱責ともなり、また、今後のいましめともなるであろう。

指名は一回だけでやめないこと 一度さされたら、この時間の仕事はそれでおしまいという安心感を与えてはいけない。何回も同じ生徒に質問をすることによって、その生徒になすべきことが、もし、その生徒の不勉強に基づいているならば、そうすることによって、その生徒になすべきことを思い当たらせるし、また、その失敗が能力不足に原因しているのならば、教師の忍耐は、その生

徒を励ましていくことになる。

質問はクラス全体に向けてすること もし、教師が、「はい、今度は良夫君、答えてください」というふうにして、質問を出すならば、良夫君以外の生徒はみんな、

「あれは良夫君の答える質問だ」

と考えてしまう。

そうして、良夫君だけに考へることをまかせてしまう。そこで、クラス全体の注意を喚起するため、質問を出す前に、教師は生徒に向かつてこう呼びかける。

「みなさん、よく聞いてください。今度は大事なことを話しますよ。」

こうしてクラス全体の注意を喚起しておいて質問を発する。それから、

「それでは、つよし君答えてください。」

と指名する。

なぜここにつよし君が解答者として指名されたのであるかというと、つよしはクラス中で一番ぼんやりしていたからである。もしこのつよし君が、自分がぼんやりしていたために指名されたといふことに気がついたならば、これから後は、みんなの前で「面目を失う」ことのないように気をつけるようになるにちがいない。

自習本内

- 一、本章全体を読み返し、教授法として質問を使う方法の五つの目的を調べよ。
- 二、本章第一段を読み、効果的に質問することの結果を四つ、五つあげよ。
- 三、最初に答えやすい質問を与える理由を示せ。
- 四、生徒を混迷に落としいれ、レッスンの意味をぼかしてしまう質問の仕方五つをあげよ。
- 五、生徒は自分の知らない言葉、または意味のわからない言葉で考へることができるか。また、教師は生徒の知っている言葉、意味のわかっている言葉で教えているということをどういうふうにたしかめることができるか。
- 六、生徒がまちがつた答えをした時、教師はいかにすべきか。
- 七、生徒がまちがつた答えをした時、ほかの生徒の笑うのを許してよいのか。その理由は。
- 八、あまり大切でない、つまらないことを質問することの結果はどうか。
- 九、「質問と答えはお互いに記憶するに値する真理の二面を構成し合わなければならない」という原則に従つて、この章の例は書かれている。この意味を理解し、各自で質問を二つづくり、また、その答えを書け。その質問によつて教えようとする中心真理は何か。

あなたは真理の言葉を正しく教え、恥じるところのない鍊達した働き人になつて、
神に自分をささげるよう努めはげみなさい。—テモテへの第二の手紙二・一五一

日曜学校教授法

¥ 1,300

1957年6月15日 第一版発行
1958年3月15日 第二版発行
1964年6月20日 第三版発行
1966年12月25日 改訂版発行
1971年2月1日 改訂第二版発行
1974年8月1日 改訂第三版発行
1979年11月1日 改訂第四版発行
1988年3月1日 新装改訂第一版発行
1995年10月1日 新装改訂第二版発行

著者 マイヤー・パールマン

発行所 福音出版社

〒170 東京都豊島区駒込3の15の20

印刷所 ベーテルフォト印刷株式会社
